月刊ナイトバグ
雨宿り投稿参加型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2009年6月号
「マントといえば正義の味方か
悪役と相場が決まってるわ。」
参加43人・124頁
前号比約1.5倍の
大ボリューム！
じめじめ蒸し蒸し……梅雨到来。
せっかくだから、
もっと虫虫してみたら？

オトコノコ毒死必至の蠱惑メイク術
派手男クンも草食クンもイチコロ！
お嬢スタイルで差をつけろ
ショッカク。春色
サイドはエアリー感を残した
甘々ウルフカット。
小物はワンポイントカラーで
淑女を演出、ネイルは地味ツートンで
家事ができちゃうこともさりげなく
アピール！
ドレープワンピは敢えて一色を
選択、春っぽくてクールな水色で
あなたは初夏の昭和記念公園の
バタフライ。

月刊ナイトバグ　2009年6月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

文化への不満と捕食関係

羅外

哀しむべきことですが

守矢の二柱に外の世界では食虫文化が急速に廃れてきていると聞きました

うぅむ

こちらでは蜂の幼虫やイナゴなど広く食されていますが

なんて残酷な

虫を食べるなんて酷いです

あんなにも可愛いのに！

続かないです。

「勢いだけで行動してると大抵半端なものになる。」
タイトル
祝ッ！『月刊ナイトバグ』創刊ッッ！
作者代理
わー
作／戌亥
…？
さて何を描こうか？
くるっ
ものすごい見切り発車だ
SHOCKだー！

ちょ・・・
ネタを考えないで
描いてるんですか？
だまらっしゃいッ！
この東方ご時勢に
リグル本を
月間ペースで
刊行しようという・・・
その心意気や
良しッ！
そんな事を
知ってしまったらッ！
原稿を描かないわけに
いかないでしょうッッ！
じゃあなんで
創刊号に
寄稿しなかったん
ですか？
私たちは皆
時の奴隷なのよ・・・
〆切に
間に合わな
かったんだな・・・

マズイ…
ネタが決まらず
もう３ページ目よ…
こうなったら
エロい絵でも
描いておこう
アナルものでゆうな
この本は
全年齢向けです
…まぢ？
本当です
じゃあ一体
何を描けって
いうのよッ!?
ショタネタもダメなんで
それしかネタの
引き出し
ないんですか？
ダメ人間すぎる…
知らなかった
って事にして
脱ぎなさいッ
ヤッた者勝ちよ
ダメに
決まってる
でしょう
そうこう
している内に
もう残り
１ページッ！
どうオチを
つけるんですっ？
こんな漫画で！

結局脱いでもらいました。
りぐるん
おまけ
フーヤレヤレ
どうにか形にはなったわね
何がしたかったんだ？
この人わ…
最後までグダグダすぎ…
終。

この作品には一部蟲写真が含まれています
蟲嫌いの方、蟲アレルギーの方はアレしてください
…いや大分か？
warning
あ、殺虫剤(アレ)じゃないよ？
おい

呼び出しておいていつまで待たせる気だ
貴女が新しいサービスを始めるというからこうして取材に時間を割いているんですよ？

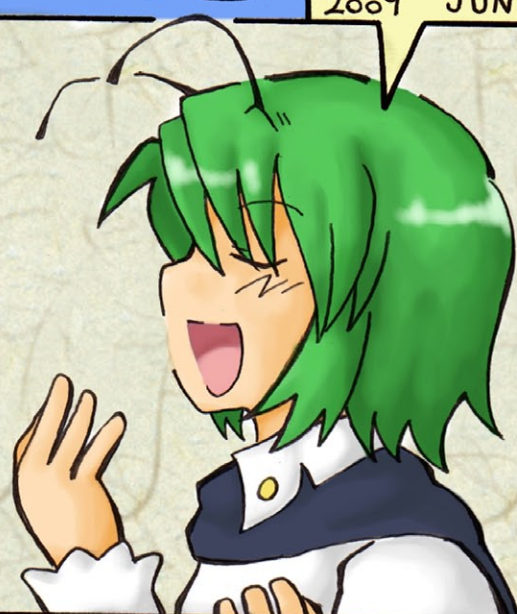
えっとね
これなんだけどさ
私の新聞?
文々。新聞

いやはや
貴女が愛読者だったとは…
これはよいものだ
違うからね
重要なのはその記事

ふむ?
これは兎角同盟の記事…
これが何か?
うん
古兎が面白いこと言ってんだよね
可愛ければ
食べないでしょう?

これだ!って思ったの
役立つ云々以前に
蟲の可愛さを
知ってもらわなきゃって
みすちー
この古新聞(油取り用)
もらっていい!?
いいけど
何か
食べてってね

そりゃけっこうだが
あてはあるのか?
………
蟲の可愛さっつっても
ピンとこないぜ?
これは
虫ピン
それも新聞がヒントかな
読みやすくトピックを
編集して配信するのよ!
題して
ー…

蟲の手帖
描いた人 HOUSE
6月号
2009 JUNE
●バグズライフ講座
初夏のバタフライガーデン
蜜源10選 とかどうよ
流行らないぜ
流行りませんて
あと そのコーナー名は 伏せとけ な
即答!?
誌面中に蟲が蟲くのを見て「わぁ可愛い」となると思うか?
自信を持って言えることがひとつあるわよ
ほう
例えば 猫好きの人妖
そもそも何か得をして蟲を好きになりますか?
・イナゴ
・蜂の子
・カイコの蛹
・ザザムシ
・ゲンゴロウ
・セミ
…etc
おかずの選択肢が増えるくらいでは?
食うなって
損得だけで見るのって本当は蟲が好かないけど
彼女らは道端で猫を見ただけでも幸せになるそうね
お♡ 橙似の猫だ
橙のが可愛いがな!!
ナーオー

全世界におよそ数百万から一千万種が生息し日本だけでも三万種が生息すると推測される。大海を除くあらゆる環境に見られる（海上に進出した例は有）

関東地方では高さ10mの針葉樹には七千頭、広葉樹では二万～三万頭もの蟲が依存していると言われる。

ということは蟲好きになると一歩 歩くごとに幸せになれると言っても過言じゃないわ！

貴女の頭が幸せなのは分かりました

今回は一回目だからね
できる限りとっつきやすい
テーマで行くわよ
えーと
二回目が
あるとは
限らんだろ
「蟲は犬猫狐と違って
モフモフしていない
ところがマイナスだ」
と おっしゃる方に
向けてーー・・・

こちら
毛玉だな
毛玉
ですね

ビロウドツリアブ
体長8~12mm
宙に吊り下げられたように
飛ぶからツリアブ
遠目からは毛玉にしか
見えないモフモフっぷり！
蟲にモフが足りないとは
もう言わせない!!

毛玉にしか
見えないのは
写真の写りが
悪いからでは？
サクッ

仕方ないじゃん…
初心者だし…
あや…？
初心者を盾に
逃げますか？

それに
お？
ありのままの蟲を
見てもらいたくて
能力も使ってないし

能力なんかなくても蟲は可愛い姿を見せてくれるってこと知ってほしいから
…なるほど

例えば この子
ホシホウジャク
開張40～50mm

飛ぶ姿はハチドリのようで実際 彼らの仲間を蜂とまちがう人間もいるけど蛾の一種だから当然刺したりかみついたりしないし…こんな愛嬌のある表情を見せてもくれるのよ
何だこいつ!!
蟲のくせに小首を傾げてるのか?

小動物に見えなくもない…ですかね
ネズミとか

あぁ… まぁ
奴らがかわいいかはまた別としてだが
イメージ変わってきたかしら!

当初よりはな
だが触れない
案外面白いもんじゃないか

もうひと押ししってことね!それならとっておきよ!!
この写真が分かりやすいかな次ページで拡大してみるよ

最終兵器
少女マンがまつげ
どうよ
おっと？
これは効いたかしら
ビビッと
きたかしら
いや
まさかオチが芸人の
一発芸レベルとは…
予想外で
いいのよ 一発芸で
分かりやすい方が
まずは人間の関心をしっかり
引かなきゃだもんね!!
さぁ さっそく配ってくるよ!!
宣伝
よろしくね
なぁ
あいつが
何冊配れるか
賭けないか？
性格悪い
ですねェ
…3冊
つづくかも

迷推理

著者：くろと

快晴の下、無名の丘で少女たちは事件に遭遇した。
鈴蘭畑で大妖精が倒れたのである。
倒れた大妖精の仇を討つべく、大妖精の盟友である湖上の氷精チルノは立ち上がった。
チルノは捜査の基本、聞き込みを行った。
「真っ暗だから何も見えなかったよ」
「歌ってたから分からないわ」
「だから毒だってば。鈴蘭の」
これらの証言からチルノは一つの推理を披露した。
「犯人はリグルよ！」
「……はい？」
予想外過ぎる断言に、蟲の妖怪リグル・ナイトバグは一瞬だけ忘我した。

□

大妖精が寝返りを打つ横で、リグルは思考速度を加速させていた。
（どうすればいいの……）
容疑者と聴衆の面前でチルノが繰り広げた推理は、非の打ち所しかない推理だった。
何をどう考えたのか分からない論理展開、どこに目が付いているのか問いたくなる現場検証、そして所々で言い間違える推理。
本来なら謎解きにすら成らない、そんなありえない推理ショー。しかし、本当の問題はそこではなかった。
「大妖精は毒で倒れた！　だから毒虫を操れるリグルが犯人で間違いない！」
「そーなのかー」
そう、本当の問題とは探偵ではなく聴衆のほうにあったのだ。
裁判において検事や弁護士がどれだけ言い合っても結論は下さない。最後に容疑者へ判決を言い渡すのは裁判官だ。
だから、どれだけ意味不明の推理が行われても、それを聴いている傍聴人が納得してしまえば、それが真実の断片となってしまう。
ゆえにリグルは悩んでいた。このままでは当推量以前な推理が進み、冤罪で捕まる事を。
それを止めるには反論するしかない。だが、それにも問題があった。
リグルが反論しようとすると、
「あたいの推理はまだ続いてるのよ！」
チルノの一喝によって反論を封殺されてしまうからだ。
チルノは自身の推理を信じて疑わず、それを邪魔する反論は一切合切受け付けない。
状況は天秤の片皿が地に着きそうなほどに不利だった。
（早く何とかしないと！）
その焦りからか、肌が汗を流した。
「あー！　リグルが汗流してる！」
聴衆は零した汗を、別の意味で捉えたようだ。
もはや発汗すらいけないらしい。
（まずいまずいまずい！）

唯一の救いはチルノが自分の推理に浸っていることだろう。この調子で行けば推理の終了まで残り数分はある。
その間に突破口を見つける。
そのために先ず深呼吸。
両の瞼を瞑り、すーはーすーはー、と呼吸を繰り返せば心が落ち着きを取り戻す。
次に思考。
落ち着いた心により正常化した思考で推理ショーの打破を検討する。
(推理自体は穴だらけ、反論さえ出来れば)
その反論が出来ないから困っている。
(だったらチルノの言葉を止める)
勢い任せで推理するチルノの口を塞ぐのは簡単だ。蟲で口を塞げばいい。
蟲には一瞬で指示を出せる。おそらく十秒もあれば任務を果たしてくれるだろう。
しかし、それをすると自分が犯人だから口封じをしたという印象に繋がり、反論できても功を成さない可能性がある。
では他に打つ手はあるのか。
(いやないってば)
反論が出来ない段階で無理が生じている。無理やりにでも解決しないと本気で冤罪になってしまう。
「やっぱりリグルが犯人で間違いないのよ！」
チルノが一際大きく叫んだ。
自ら喋っている無茶苦茶な推理に自ら納得させられたのだろう。

いよいよ時間が足りない。
(こうなったら本気で！)
全員からの非難を覚悟し、蟲への指令を飛ばそうとする。
「そんなところで何をしているの？」
その声音は大人の女性のものだった。
思わず首だけで振り返れば、日傘を差した女性が後ろに居た。
だから、一目散に逃げ出した。
なぜなら背後に風見幽香が居たからだ。

□

大妖精を除いた全員が、その場から離れるのに一秒ほど掛かった。
しかし、
「何処に行くのかしら？」
幽香はリグルたちの前方に回りこむのに、一秒すら必要ないらしい。
「ちっ……！」
逃げられないと悟ったメディスンがスペルカードをデッキから引き抜いた。
メディスンのスペルはリグルたちにも影響を及ぼすのだが、そんなことをいちいち気にする妖怪は居ないだろう。
何より、そんなことを気にしていては遅い。
メディスンの動きに同調するように、ルーミアもスペルカードを抜き出している。
「霧符ガシングガーデン！」

「月符ムーンライトレイ！」
同時に撃たれたスペルが二重の弾幕となって幽香に切迫する。
褪せた毒の叢雲を纏った月の閃光だ。
「普通は一対一じゃないかしら？　まぁ、いいんだけどね」
幽香は余裕の微笑みで、二重弾幕をグレイズしながら避けきった。
「蛍符地上の流星！」
「鷹符イルスタードダイブ！」
「凍符パーフェクトフリーズ！」
今度は三重の弾幕で幽香を覆う。
ミスティアは視覚を限定化し、リグルは逃げ場を塞ぎ、チルノが弾幕に時間差をつける。
統一の執れた連携弾幕。並みの相手なら避けきれずに被弾する。
並みの相手なら。
「本当に倒されてみる？」
幽香は動揺の一つも見せずに対応した。
視覚の有無など問題外、幽香は一目で覚えた配置からリグル等の現在位置を割り出し、弾を直撃させてきた。
リグルはそれから先を覚えていない。

□

ふと、隣を向けば死神が呆れ顔をしていた。
これから天国に連れて行かれるのかと死神

に問うと、死神が手を横に振った。
　どうも自分は地獄に落ちるらしい。
　傷心しているると死神がさらに手を振った。よく見るとそれは犬猫を追い払うような仕草だった。
「り……ぐ、る……リグル！」
　気が付くと最初に大妖精の心配顔が広がる。
「……あれ？」
「リグル！　良かった！　良くない、皆が大変なの！　何があったの！」
　涙をポロポロ零し、大妖精が心配しながらに問いただす。最もリグルとしてもそれが聞きたい。
　周りを見渡せば死屍累々、白目を剥いたチルノたちが倒れていた。
　本来ならリグルも混乱するところだが、大妖精のあまりの混乱ぶりを目の当たりにして冷静を取り戻していた。
　そうして冷静になると、今日の行動も思い出してくる。
「えと確か……鈴蘭畑で遊んで、口を塞ごうとして、それから逃げた？」
　そうだ。逃げ出したのだ。でも追いつかれた。
「……逃げた？　私が？」
　リグルは自分の言葉を反芻した。どうして逃げたのか、誰から逃げたのか、それが思い出せないからだ。
「ルーミア！」
　大妖精の声でルーミアが目を覚ました事を知った。他の皆も続くようにそろそろと起きだしている。
　最後にチルノが目を覚ますと、誰からともなく何が起きたのか話し合いだした。
　しかし、正確に状況を覚えている者は居らず、それぞれが覚えている記憶を継ぎ接ぎすることにする。
「私はなんだか気分が悪くなって倒れたの」
「スペルカードを使ってるわ。どこかで弾幕ごっこをしたのね」
「誰かが推理してたのよ。どんな推理かは忘れたけど」
「そう毒よ。毒に騒いでたの。あれ？　なんの毒だっけ？」
　ますます訳が分からなくなった。
　だが、最後にチルノが思い出したように叫んだ。
「犯人はリグル！」
「……犯人？」
　思わず聞き返してしまった。
　いきなり何を言い出すんだ。と顔を顰めてみるも、
「あれ？」
　そういえば自分は誰かの口を塞ごうとした事と慌てて逃げ出した事を記憶している。
（犯人だから逃げた？）
　いや、違う。とリグル自身が指を立てて、出し合った記憶を整合してみる。
「つまり大妖精の気分が悪くなって倒れたのは毒のせいで、それをやった犯人は私で、それを推理されたから口封じしようとして、でも逃げ出して、弾幕ごっこして……」
　そこまで考えると結論に達した。
「あ、犯人私だ」
「そーなのかー」
　そうなのである。
　違和感はあるが、自分を含む全員の証言がリグル・ナイトバグを犯人だとしている。
「おかしいよね？」
　疑問を浮かべながらも、これからすべき行動は把握している。
「えと、ごめん？」
　とりあえず皆に謝る。それから、
「じゃあ逃げるね？」
　一刻も早く此処から逃げ出す事だった。
　それからリグルが追い掛け回されたのは言うまでも無い。
（終）

〈作者コメント〉
　初めて書いた東方のＳＳです。オチも文章も弱いです。なので読んでいただけるだけで嬉しいです

冒険者なヒトたち

春になると出てくる紅いアレ（後編）

著者：ハンダゴテ

近づいてくる気配を感じて紅美鈴は眼を開いた。

いつも居眠りだ職務怠慢だとサボリのレッテルを貼られ怒られているが、それは彼女が自身の能力に絶対の――とは言わないけど、まあ普通に門番やってける程度には――自信を持っているからだ。例え眠りというリラックスした状態にいても、いやだからこそ、鋭敏に気を察知することが出来る。この能力を活かして逸早く侵入者を見つけたことも……あるにはあるのだが、いかんせん相手が悪かったというか何というか。

まあとにかく。今回はそれほど大きな気配の相手でもない。複数――恐らくは三人ほどだが、これなら苦戦することも無くさっさと片付けられるだろう。やれやれ、これでようやく手柄一だ。美鈴はぐるぐると肩を回して体をほぐした。

全身の筋肉に活を入れ、気配の方へ身構える。そこには――

そこには真っ暗な闇があるだけで、何も無かった。

「ん……？」

いやそんな馬鹿な。彼女の能力は確かにそこにいくつかの気配があることを教えている。しかし実際目にしても何も確認できない。勘違いだったのかなあ。まだ数歩分遠い気配に眼を凝らし、

にゅっ。

「うげえ」

唐突に暗闇から生えた剣先に鳩尾を直撃され、美鈴は気を失った。

◇◆◇◆◇◆

「へへーん。闇討ちはうちらの十八番だもんね」

「まいったかー」

「いやまあ人様に自慢できる特技では無いけども」

チルノとルーミアがふんぞり返っている後ろで、リグルは気絶（正確には悶絶）している門番を見ながら申し訳なさそうに呟いた。

ルーミアの能力は闇の展開だ。自身を中心に光を吸収・遮断する空間を作り出す。その暗闇の中では自分も視界が利かないという欠点があるが、リグルの能力を仲介することでそこそこ正確な奇襲を可能にしていた。ちなみに一番偉そうにしているチルノは何もしていない。

門番――眠っていたと思ったら起き出して構えてきた時はさすがに焦ったが――を打ち倒したのは、ルーミアの持つ大剣だった。長さはバスタードソードと同じハンド・アンド・ア・ハーフ・ソードと呼ばれる類だが、刃が幅広である点が異なっている。明らかに女性向けの装備ではないし、一度リグルも持たせてもらったことがあるが、そう簡単に振り回せるものでもない。それでもルーミアはこの剣を愛用し、軽々と扱っているのだが

ら、リグルとしては理不尽なものを感じないでもなかった。
　三人の装備はルーミアの大剣を除けばそう大層な物ではない。女性であることを除いても最近の冒険者の傾向は軽装で、武器以外は露骨な雰囲気を感じさせるものでもないし、軽量で性能の良い装備も数多く出回っている。ほとんどが普段着に溶け込んでしまうようなものだ。派手なもので精々コンテスト向けの装備くらいか。リグルも護身用のナイフくらいしか目立つものは持っていなかった。
「さーて、門番も片付けたことだし、次の問題は……」
　先陣切ってチルノが声を上げる。チルノは無手だが、彼女の場合は――
「この門をどう越えるか、ね。どうする？　一発ドカンといっとく？」
　チルノが必要以上に大きな門を指しながら聞いてくる。その手には氷で出来た巨大なハンマーが握られていた。
　チルノの能力は冷気を操ること。自由自在に氷塊を作り出すことの出来るチルノは、その能力を活かし、氷を加工して武器にしていた。
「随分と派手なノックになりそうだね。私はもうちょっとこっそり行きたいよ」
　言いつつ、リグルは腹を抱えて蹲る門番の方へ歩いて行った。門番の腰からジャラジャラと音を立てる金属製の円環を取り上げる。門番が手を伸ばしてきたが、よっぽど痛むのだろう、碌に動けていなかった。
「まあ、門番なんだから鍵束くらい持ってるよね。じゃないと何守ってるのか分かんないし」
　門の施錠を外しに掛かる。鍵穴に合う鍵を探していると、チルノが手元を覗き込みながら聞いてきた。
「それ、蟲達から聞いたの？」
「うん」
　リグルは蟲の声が聞こえるのだ。

　街道の一つから街の外へ出、道から外れた森の中を進んだ先にその城はあった。方角は花屋の指した方向の通りだ。周囲の木々に隠されるように建つ城は、外からは木よりも背が高い癖に見つけることが出来ず、いざ目の前にすると異様な威圧感を持って訪れた者を迎える。その風体はまさに魔王の城という形容がピッタリだった。
「うっわ～」
　中に入るなりチルノが歓声を上げる。門を開けた瞬間の城の巨大さにも圧倒されたが、城内ではそれ以上に広さを感じさせるバルコニーに歓迎された。正面には両脇から回り込むように上階へと続く長大な階段。二階だというのにその高さはミスティアの宿以上ではないかと疑わせた。その下にある奥への扉までは果たして何歩あるのか。視界の外にも通路と扉が延々と続き、城を歩き回るには一日という単位は不足に思わせた。
　しかしチルノが歓声を上げたのは広さの所為だけではないだろう。何せこの城――
「あっくしゅみ～。全部真っ赤っ赤でぇ」
　目に映るものが須く紅色で統一されているのだ。外も中も紅。目が痛いにも程がある、とリグルも内心悪態をついた。
「こんなところで立ち止まっててもしょうがないし、とりあえず動こー？」
「ルーミアにしてはナイスアイディア。こういう時ラスボスは最上階と相場が決まってる！　という訳で二階に突撃ぃ！」
　階段目指して特攻していくチルノを目端に捉えつつ、リグルはルーミアに耳打ちした。
「とりあえず警戒はした方がいい。ここは蟲達の声が聞こえない」
「蟲がいないってこと？」
「うん」
　ルーミアも心なしか真剣味を帯びた声音で返す。と、唐突にルーミアが聞き返してきた。
「で、なんで私だけに言うの？」
「いや、どうせチルノに言っても聞かないし」
　納得、と言いたげにルーミアは溜め息を漏らした。そうこうしている内にチルノは階段の半ばまで差しかかっている。置いてけぼりにされては敵わない、と二人が走るペースを上げようとした矢先、
「うわ!?」
「おお？」
　ガコン、と音を立てて足元が無くなると、

階段が滑り台になっていた。
「うおおうあぁぅおおお⁉」
「おーちーるーのーかー」
　二人は傾斜に従って滑り落ち、一階まで転がり落ちていった。更にそこに、
「ぁぁぁあああれええええ」
「ごふぅ！」
　盛大に階段を滑り落ちてきたチルノのボディプレスが腹に直撃した。
「……しかも……なんで私だけ……」
「いやあ、ごめんリグル。大丈夫？」
「大丈夫じゃな……伏せろチルノ！」
「へ？」
　四つんばいになったチルノの首根っこを掴んで引き摺り倒す。チルノの体があったちょうどその位置に巨大な刃が通過していき、二人は同時に冷や汗を垂らした。リグルが抑えなかったら上半身と下半身が泣き別れしていた。
「さんきゅリグル……助かった」
「どういたしまして……とりあえずここから離れよう」
　ビュンビュンと頭上を往復する刃の振り子から這い出して、二人はようやく一息吐いた。
「まあ、とりあえず分かったことは……」
　滑り台と化した階段と唸りを上げる刃振り子を見ながら、リグルは言った。
「ここはトラップ屋敷だってことだ」
　帰ろう。二対一で多数決なら決定なのだが、チルノがしつこく反対するので残念ながら棄却された。
「でもさ。この先どんなトラップがあるか分からない訳だし、全滅する前にとっとと帰っちゃった方が安全でいいと思うなー、私」
「そんなあるかないか分からないものに怯えたってしょうがないじゃん。まずは前に進んでみないと」
「んー、確かそんな感じで沼の主に挑んで、頭から丸呑みにされたことがあったよねー」
「その後ちゃんとやっつけて抜け出したじゃん！　あのバケ蛙、お腹壊してヒーヒー言ってたわ」
「で、泣きながら大妖精に縋りついてたよね」
「う……。あーもー！　そんなことはどうだっていいのよ！　進むの？　進まないの？」
「だからトラップがー」
「んなもん踏まなきゃいいのよ！」
「んな無茶なー」
「…………トラップ……踏まない……」
　そこでポン、とリグルは手を打ち合わせた。
「そうだ！　二人とも、こんなのはどうかな？」
　リグルは二人の肩を抱き寄せると、思い付きの中身を明かした。
「ひゃっほーぅ！　いいねコレいいねコレいいねコレー！」
「ひぇぇ！　チルノ、スピード出し過ぎぃ！」
「激走なのかー」
　三人は猛烈なスピードで通路を爆走していた。三人が乗っているのはチルノ特製氷のボートだ。
「イィヤッハー！　トラップなんざ遅い遅い！」
「心臓に悪いよ、これぇ〜」
「グレイズなのかー」
　摩擦係数をゼロにして滑走するボートは、発動スイッチを押しても二足歩行を想定したトラップには捉えることが出来ない。続々と発動していくトラップを振り切りながら、三人は長すぎる通路を突破していく。
「よっと」
　見事な体重移動で直角のカーブをクリアする。既にチルノはこの氷のボートを完璧に乗りこなしていた。
「でー、なんか色々扉スルーしまくってるけど。結局アタイらはどこに向かえばいいのさ？」
「知るかー！」
「おー、なんか目の前にそれっぽく一際大きな扉がー」
「よっしゃ、突撃ー！」
　そのままチルノは減速無しで正面の扉へと突っ込んでいく。

「ちょっとチルノ！　ぶつかる、ぶつかるって！」
「だーいじょうぶ、ちゃんと直前で止め……」
「……ちょっと。おーい。チルノさーん？」
「……なあリグル。これってどうやって止めるんだ？」
「な……！」
　刻一刻と扉が迫る。リグルは引き攣る顔で思いっきり叫んだ。
「バカー！」
　叫んだところでボートが止まるはずも無く、三人は扉を突き破った。

　全身を包む落下感。三人は扉を突き破り、ボートから放り出されて宙を舞っていた。
　視界一面に広がる木の壁。激突すれば鼻が折れる、どころか下手をすれば首が折れかねない。リグルは直感に従って空中で身をよじった。
「っ！」
　肩口から壁にぶつかり、一瞬呼吸が詰まる。何とか受身は取ったものの、今度は二メートル近い距離の落下が待っていた。
　ズダン！　と派手な音を立てて着地する。骨折はしなかったものの、足裏からモロに接地してしまい足に痺れが走る。リグルは歯を食い縛って痺れが抜けるのを待った。
　辺りを見回せる程度には回復すると、とりあえず他の二人の無事を確認できた。顔面から突っ込んでいたり背中から本に埋まっていたりするが、目を回しているだけで目立った外傷は無いようだ。自分がぶつかったのも壁ではなく巨大な本棚らしいということが分かるくらいには室内の観察も出来た。
　扉の大きさ相応に部屋も広い。ミスティアの宿が二つ三つ入ってもおかしくない広さだった。本棚も日常で見かける物に比べれば何倍、何十倍と大きく、自分の身体が小さく縮んでしまったかのような錯覚を覚える。
　居慣れない空気に呑まれかかっていると、リグルは部屋の奥から靴音が響いてくるのに気付いた。これだけ派手に扉をぶち破ればさすがに気付かれる。まだ痺れが完全に抜け切っていないリグルは焦りを募らせた。
「騒がしいわね。何事？」
　姿を覗かせた人物は、紫のローブを纏った背の低い少女だった。不健康そうな肌は白を通り越して青に見える。ローブは少女の体には大きく、指先がちょこんと出ている程度で露出は顔以外ほとんど無い。古風の図書室に古風の衣装。カビ臭さを感じさせる印象の少女に、リグルは魔女の二文字を思い浮かべた。
「あら？」
　その人物がこちらを見る。蝋人形を思わせる無感動な顔が――見る見る内に大きく表情を崩していった。
「いやあああああ！」
　見た目とは裏腹の素早さで奥に引っ込んでいく。ローブの裾を踏んづけて一回コケた。
　身構えていたリグルは、拍子抜けした心地で呆然と見送ってしまった。
「へ？　あの、ちょっと……」
「きゃあああ！　こっち来ないでー！」
「おーい。もしもーし」
「ひいいいい」
　童話の中の図書館さながらに馬鹿でかい本棚一つを挟んでこちらを見やる少女は、それだけの距離がありながらリグルが声をかけるとビビッて顔を引っ込ませる。
「あ、あなた……一体どこから来たのよ」
　おっかなびっくりといった感じで質問してくる。
「えっと……この近くの街から……」
「アタイたちは！　魔王退治に来たのさ！」
「ひょえええええ！」
　突然背後で上がったチルノの声に、少女は引っくり返った。

「おお。起きた」
　全身紫の衣装で身を固めた少女は、目を覚ますなりぱちり、と瞬き一つすると
「ひぃやあああ」
　腰の抜けそうな悲鳴を上げてずりずりと逃げ出そうとしたが、後ろに立っていたリグルにぶつかって止まった。
「いや、それはもういいから」
　ポン、と肩に手を置いて逃げられないよう

にする。少女はビクリと震えたが、それきり半べそをかいて大人しくなった。
「な、何なのよう……一体何の恨みがあってこんなことするのよう……」
なんだか悪い事をしているような気分になって、リグルは逆に質問してみた。
「いや、特に恨みは無いんだけど……そっちこそどうして逃げようとするのさ？」
「そ、それは……」
ゴクリ、と生唾を飲み込み、重苦しい空気を作ると少女は言った。
「私……対人恐怖症なのよ」
「はあ」
「ふーん」
「そーなのかー」
三者三様の返事を返す。それきり沈黙が落ちた。
「……って他に言うこと無いのアンタら!?」
「いや特には」
「別に何も」
「というか何を言えばいいのだー？」
「…………それもそうね。よくよく考えてみれば返事を期待している訳でもないし」
顎に手を当てて言った後、少女は顔を上げてさらに質問を重ねてきた。
「で、アンタら結局何の目的でここに入ってきたのよ？　本泥棒ならもう間に合ってるんだけど」
「アタイたちは魔王を退治しに来たのさ」
本泥棒？　とリグルが疑問符を浮かべる間にチルノが答えていた。何故かチルノは自信満々に胸を張っている。
「魔王ですって……？」
少女はリグルの手を押しのけて立ち上がると、先ほどまでの怯えた様子とは打って変わって硬い口調で三人に言った。
「ここにはそんなものはいない。そんなものはただの迷信。だからとっとと帰りなさい」
取りつく島も無く言い捨てると、カツカツと早足で部屋の奥へと行ってしまう。三人は顔を見合わせると、とりあえず少女の後を追って歩き出した。
「………………」
「…………」
「……」
「……ちょっと。何で付いてくるのよ。帰れって言ったでしょう」
見た目ちょっと震えながら、憮然とした表情で問い掛けてくる。
「いや、帰りたいんだけどさ」
「魔王の居場所が分からなくて」
「帰り道が分からなくて」
リグルに続いたチルノとルーミアの返答を聞き、少女はどっぷりと溜め息を吐いた。
「こっちよ。付いてきなさい」
少女に案内されるまま歩みを再開する。少女は部屋の隅にこぢんまりと取り付けられた扉の前で立ち止まると、振り返ってピシャリと言った。
「いい？　ここで大人しく待ってなさい。どこかに行ったり部屋の中に入ったり本を盗んだりしないこと」
返事を待たずに扉を開けて部屋に入る。中に入るなといった割には扉は開けっ放しだった。
「えーと、どこにやったかな……ここには……無い……なんでこぁはいないのよ、こういうときの為の使い魔でしょうに……全く、あの子ったら妹様に付きっきりでちっとも手伝いやしないんだから……」
愚痴が聞こえ放題だった。何かを探しているらしくごそごそと部屋中を漁っていたが、やがて執務用らしき机の引き出しを開けると、中から一枚の紙切れを取り出した。
「ほい」
部屋から出てくると、その紙切れを差し出してくる。それを受け取って眺めつつ、リグルは聞いてみた。
「……地図？」
「そうよ。ここの地図」
「トラップの種類や位置まで書いてあるけど……」
「じゃなきゃ地図の意味が無いじゃない」
「そうかも知れないけど……よくこんなもの持ってたね」
「そりゃそうでしょう。ここのトラップ仕掛けたの私だし」
「ふーん…………って、えええええ!?」
あまりにも自然に言われた為一瞬聞き逃し

ていたが、思わぬ事実にリグルは驚きの声を上げた。
「何よ、うん……ごめん……」
「あ、うるさいわね」
少女に睨まれて尻込みしてしまい、リグルはそれ以上突っ込む機会を失った。もごもごと口を動かしながら別のことを聞く。
「ええっと……貰っていいの？　これ」
「それがなきゃ道が分からないでしょう？　この城は空間を弄ってあるから、感覚だけに頼ってると永久に彷徨うことになるわよ」
「へ、へぇ……それはまた」
「ああもう、無駄話なんていいからさっさと帰ってよね。いい迷惑だわ、ホント」
「う、うん……」
「ああ、それと間違っても上に行こうなんてしないこと。横道なんてしないで直帰なさい。ましてや地下に行ったりなんかしたら、最悪を通り越して無謀よ」
「分かった……気をつける。えっと……」
「……何？　あんまりジロジロ見ないでよ人を呼ぶわよ」
「対人恐怖症なのに人増やすの？　……君の名前、まだ聞いてないよね」
「…………」
「あ、そっか。名前を名乗る時はまず自分からだよね。私はリグル・ナイトバグ。こっちは……」
「アタイはチルノ！　よろしくな！」
「ルーミアだよー。よろしくねー」
「――――」
フラフラと辺りをうろついていたチルノとルーミアが飛び付くように振り返って言った。少女は警戒するような目を向けていたが、三人が名乗ると目を丸くし、そして口を開いた。
「私は……パチュリー。パチュリー・ノーレッジ」
「パチュリー、か。ありがとうパチュリー。親切にしてくれて」
「……親切になんてしてないわよ。いいからとっとと帰ってよ」
そうは言いつつも、リグルの差し出した手は握り返してくる。触れたかどうかも分からないような握手だったが、リグルは確かにパチュリーの手を握ったと感じた。
「じゃあ、またね！　パチュリー」
「次は遊ぼーなー！」
「じゃーねー」
チルノ特製氷のボートに乗って三人が退出する。最後まで騒がしかった三人を見送り、パチュリーはポツリと呟いた。
「魔女に名前を名乗るなんて……迂闊過ぎよ、全く」
自然と顔が綻ぶのを、パチュリーは止められなかった。
「ところでさあ」
「……うん」
「方向確認する前に走り出したら道分かんなくなるよね」
「……うん」
「それくらい考えれば分かるよね。それともアレか？　君は世間一般に言われるままのバカなのか？」
「……ごめん謝る。だからそんなに怒んないでよ、リグル」
「謝って済むかあ！　これじゃあパチュリーに地図貰った意味が無いだろ！」
「二人とも、前見てー！」
「ああ！　目の前に地下への階段が！　しかも突き当たり一方通行！」
「だああ！　地下には行くなって言われたばっかりなのにいい！」
……まあ、概ね予想通りである。
「うぉっ！　ごっ！　ぎぎっ！」
ガコガコと体のどこかをぶつけるたびに奇怪な悲鳴が上がる。螺旋状の階段に何度も体を打ちつけながら、三人は地下へと転がり落ちていった。
「ふおぅぎゃあ！」
階段の終着点、錆びた鉄製の扉を体当たりで押し開き、リグルたちは部屋の中へと転がり込んだ。
「いてて……」
「っつう～」
「目～が～グ～ル～グ～ル～」

「城内に入ってからこっち、散々だよ……………ん？」
　ぼやいて辺りを見回したリグルは、室内を満たす独特の空気に気付いた。明るめに統一された色調。暖色に包まれた部屋は中に居る者に安らぎと暖かさを感じさせる。家具も丸みを帯びたデザインの物が多く、単純ながら頑丈な造りのものが多い。周囲には遊び道具と思しきガラクタが散乱しており、そして何よりそれらはリグルの手にも小さいと感じさせる。
「ここは……子供部屋？」
　それも、赤子の為の。リグルは立ち上がり、中央に据えられたベッドに近づいていった。
　ベッドは空だった。なんとはなしに視線を移すと、部屋の隅のソファに腰掛けた人物に気付いた。赤い髪に地味な服装。知的という言葉の似合う女性だった。腕には赤ん坊を抱いている。恐らくはこの子がベッドの主だろう。綺麗な金髪が遠目にも鮮やかだった。親指を咥え、女性の胸の中で安らかな寝息を立てている。
　女性はリグルと視線が合うと、ふっと微笑んで唇に指を当てた。赤ちゃんが起きないように、ということだろう。それは見るものを恋に落としそうな素敵な笑顔で、リグルは胸がドギマギするのを感じた。
　ふと、女性の腕の中で赤ちゃんが身じろぎした。むずかるように体を揺らしていたが、女性と顔を合わせるとにっこりと笑顔になる。
「フランちゃん、おはよう。よく眠れまちたか～？」
　女性が猫撫で声で語りかける。赤ちゃんはフランという名前らしい。フランはふとリグルと目を合わせると、キョトンとした顔になった。フランが興味津々といった調子でリグルに向け手を伸ばす。
　女性が立ち上がり、リグルの方へと歩いてくる。近づいてくる小さな掌に自分のそれを重ね合わせようとして、
　ひょいと避けられ、頬をつままれた。
「へ？　……いたたた」
　そのままぐにぐにと引っ張ったりつねられたりされる。リグルは困惑した表情で女性の方を見た。「あらあら。駄目ですよ、フランちゃん。初対面の人にそんなことしちゃ」と注意はしているものの、止めさせる気配は無い。どこか惚けた感じのする笑顔を見ながら、リグルはしばらくは解放されないかな、と内心諦めた。
　と、傍らの覗き込んでくる気配に気付いた。そちらを見遣ると、チルノが目を輝かせて赤ちゃんをじっと見つめている。
「……チルノ？」
「………………ちっこい」
　ぽつり、とチルノが呟くのが聞こえた。そこには目の前の赤ん坊への興味がありありと滲んでいる。
「ふふ。良かったら抱いてみますか？」
「え！　いいの？」
　チルノが顔を跳ね上げる。嬉しそうなその笑顔に、女性もまた微笑みながら腕の中の赤子を渡そうとする。と、
「うー」
　フランが嫌そうに唸り、チルノに向け腕を伸ばした。その掌がキュッと握り締められる。
　瞬間、リグルとチルノの間を風が通り抜ける。頬を打った風圧に冷たいものを感じながら、二人は引き攣った顔を背後に向けた。
　そこには棚らしき物の残骸があった。爆圧でペシャンコにされたようなそれは、既に原形を留めていなかった。
「こら。みだりに物を壊したら駄目ですよ、フランちゃん。めっ」
「うー……うぅ」
　女性に叱られてしょんぼりとうなだれたものの、聞き分けたように頷く気配を見せると「フランちゃんはいい子でちゅねー」と女性に抱き締められてまた笑顔に戻る。そこだけ切り取れば実に微笑ましい光景だった。
　いやいや。こっちは死人が出そうだったんですけど。さすがに声に出す勇気は持てず、リグルは胸中でつっこんだ。
「そうそう、ところで一つお訊ねしても宜しいでしょうか？」
　女性が思い出したように振り返り、慌ててリグルは取り繕った。
「あ、はい。何でしょう」

「……貴方達、誰ですか？」
そーいやまだ名乗ってなかったなー。当然の事実に今更ながら気付き、リグルは少し気後れした。

女性は小悪魔、赤ちゃんはフランドールという名前らしい。小悪魔とはどう考えても本名ではないのだが、そういう規定らしく小悪魔、もしくはこぁと呼んで欲しい、とのことだった。小悪魔はフランドールの乳母であり、フランドール自身も貴族の娘という高い地位にいるらしい。
「それで、リグルさん達は何をしにこの城へおいでになられたのですか？」
「あ、それは……」
「アタイたちは魔王退治に来たのさ！」
さっきもあったなあこんなやり取り、とか思いながらリグルは自分達の状況に改めて情けないものを感じた。まさか花屋に魔王がどうとか言われたので来ましたなんて到底口に出来ない。
「魔王、ですか……？　私にはよく分かりませんが、お嬢様ならば何かご存知かも知れません」
「お嬢様？　そいつってボス？」
「ええ、そのようなものです。……そうですね、ちょうど私からも進言したいことがありましたし……。宜しければ私がお嬢様のところまでご案内致しますよ」
「やったリグル！　ボスのところまで行けるって」
「そのお嬢様が魔王かどうかは分かんないよ」
「あら？　案外本物の魔王かも知れませんよ。そういうお方ですし」
「へ？」
「ふふ。こちらです」
ふわりとした笑みを残して部屋の奥へと歩いていく。その足取りは、軽やかながらも存外に速い。小悪魔が部屋の奥の扉をカチャリと開くと、そこには上へと続く階段があった。
「どうぞ。こちらがお嬢様の部屋との直結通路になっております」
「………なんつーか。意外に早く解決しそうだね」
「うん」
「そーなのかー」
三人はフランドールを抱きかかえた小悪魔に連れられ、階段を上っていった。

敢えて細かい描写は避けるが、敢えてチルノがやたら悪戯しようとしていた事は伏せるが、とにかくファンシーとしか形容しようが無い部屋を通り抜け、通路を少しばかり渡れば、そこはもう玉座の間だった。
「レミリアお嬢様。お客様をお連れ致しました」
「お客様？　今日は誰か招待していたかしら？　咲夜」
「今日どころか向こう十年招待の予定はございませんわ。お嬢様」
玉座に腰掛けていたのはまだ幼い少女だった。ピンクのドレスに身を包んだ姿は、なるほど確かにお嬢様と呼ぶのが相応しい。小さい身なりながら、気品と威厳に満ち溢れた雰囲気を纏っていた。
その傍らには一人の御付きが控えている。所謂メイドの格好をしながら、その立ち姿には一部の隙も無い。小間使いというよりは秘書、あるいは忍者とでも形容した方がしっくり来た。
「そう、なら十年後には誰か来るのかしらね。……それで、忘れ去られた紅魔の城に用があるのは何処のどなたかしら？」
玉座の少女がリグルたちの方を見遣る。王者の余裕と幼さを併せ持つ顔つきから一変、射るような少女の視線にリグルは本能が警鐘を鳴らすのを聞いた。
（マズイ、マズイマズイマズイ）
金縛りに遭ったように全身が動かない。動けばその瞬間に殺される。まさしく虫けらの様に、この少女と自分達の力量差は絶望的過ぎる。動かないのではなく動けない。この場における唯一の生存法は、その気侭な注意が自分から逸らされるのをじっと待つことだけ――
「こらこら、そんなに虐めない。この子達は

単に迷い込んできただけよ。何かの間違いでね」
　そんな空気に割り込んできたのは、つい先ほど聞いた声だった。
「パチュリー！」
「あら、こいつらはパチェの知り合い？　この城から出もしないのにいつの間に友人なんて作ったの？」
「つい先ほど。たまたま偶然。……貴方達。あれほど真っ直ぐ帰れって言ったのに」
「あ、あはは……ごめん」
　先ほどまでの緊張を悟られないように声を絞り出す。とにかくこの緩んだ空気に乗じてとっとと逃げ出したかった。
「アタイたちは！　魔王を倒しにきたのさー！」
（チ・ル・ノ・の・バ・カ・アァァ）
　目立ちたかったのかどうかは知らないが、口を挟んで要らぬことを言ったチルノを、リグルはこれ以上ない怨念を込めて睨んだ。
「魔王？　……フフフッ、そう、魔王」
　少女はひとしきり笑うと玉座から立ち上がり、リグルたちと正面から相対した。両手で自らを指す独特のポーズを取ると、その名に相応しい邪悪な気配を纏って宣言する。
「なら教えてあげる。夜の王、闇の支配者たる吸血鬼の中にあってなお尊き者、永遠の瓶に墜ちた紅い月。――私が魔王よ」
　その言葉に、リグルは胃に冷たい物が落ちるのを感じた。
「ちょっとレミィ。お遊びが過ぎるわよ」
「私が魔王を封じているのよ。なら私が魔王みたいなものでしょう？」
「それはそうだけど……だからって」
「なに、何も知らない相手と少しばかり戯れるだけよ。……ん？」
　魔王と名乗った少女が何かに気付き、目の色を変える。
「フラアアァァァン！」
　突然こちらに向かって――正確には小悪魔の抱きかかえたフランドールに向かって――駆け出した。
「う」
「ぐぼぁ！」
　顔面に例の棚を粉砕した力を受け、魔王が思いっきりノックバックする。綺麗な赤い円弧が宙に舞うのをリグルは見た。
「フ、フラン！　実の姉に何をするの？」
「う」
「ごほぁ！」
　再度フランドールの不可思議な力を受け、天高く吹っ飛ぶ。きりもみしながら落下した先は玉座だった。
「ふ、ふらぁん……あなたのそんなやんちゃなところもおねえちゃんはすきよぉう」
「お嬢様、まずは鼻血をお拭きなさいませ」
　メイドはハンカチで顔を拭ってやると、魔王を立たせてドレスの汚れを払った。それだけで魔法のように衣服が新品同様の輝きを取り戻す。
「……姉？」
　とりあえず気になったのでリグルは小悪魔に聞いてみた。
「はい。あちらはフランちゃんの実のお姉様であり、この紅魔城の主、レミリア・スカーレット様であらせられます」
「へえ……」
　なんというか。目を回してフラフラしている今の姿を見ると、とてもそんな偉そうな人物には見えない。
「それにしても……魔王にこんな小さな妹がいるなんて」
「まったく、妹はこんなに可愛いのに姉はただの生意気なガキじゃないのさ」
「姉が我侭だと妹は苦労するのだー」
　言いたい放題の三人に、魔王ことレミリアは焦点の合わない眼を向けた。
「まー確かにフランは可愛いけど。それでもお前達よりはよっぽど長生きよ？」
「「「…………はい？」」」
　思わず三人同時に聞き返す。それに答えたのは小悪魔だった。
「フランちゃんは四百九十五歳ですからねー。この中ではレミリアお嬢様に次いで長寿です」
「…………えーと、失礼ですがお姉さんはお幾つで？」
「五百歳だけど」

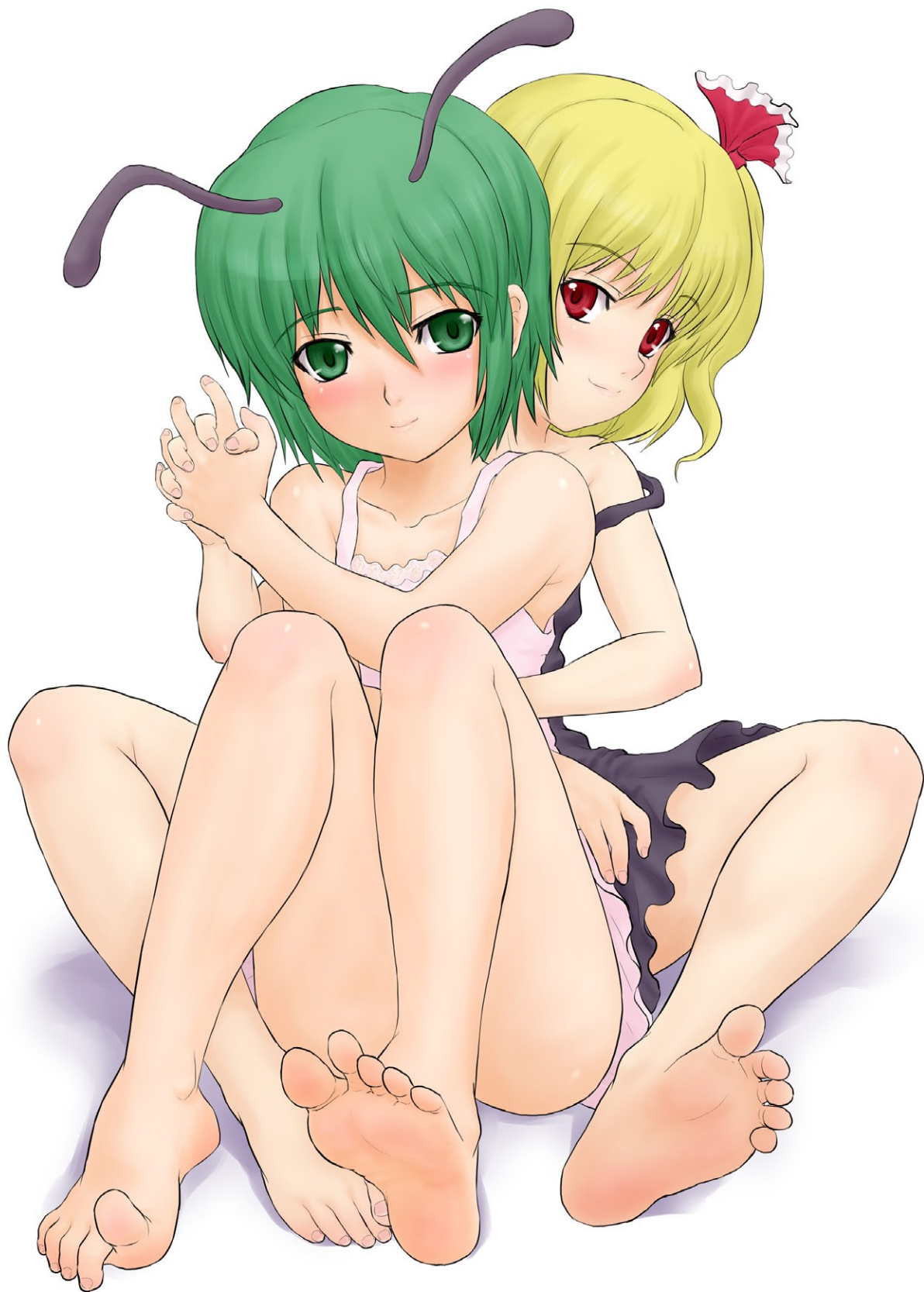
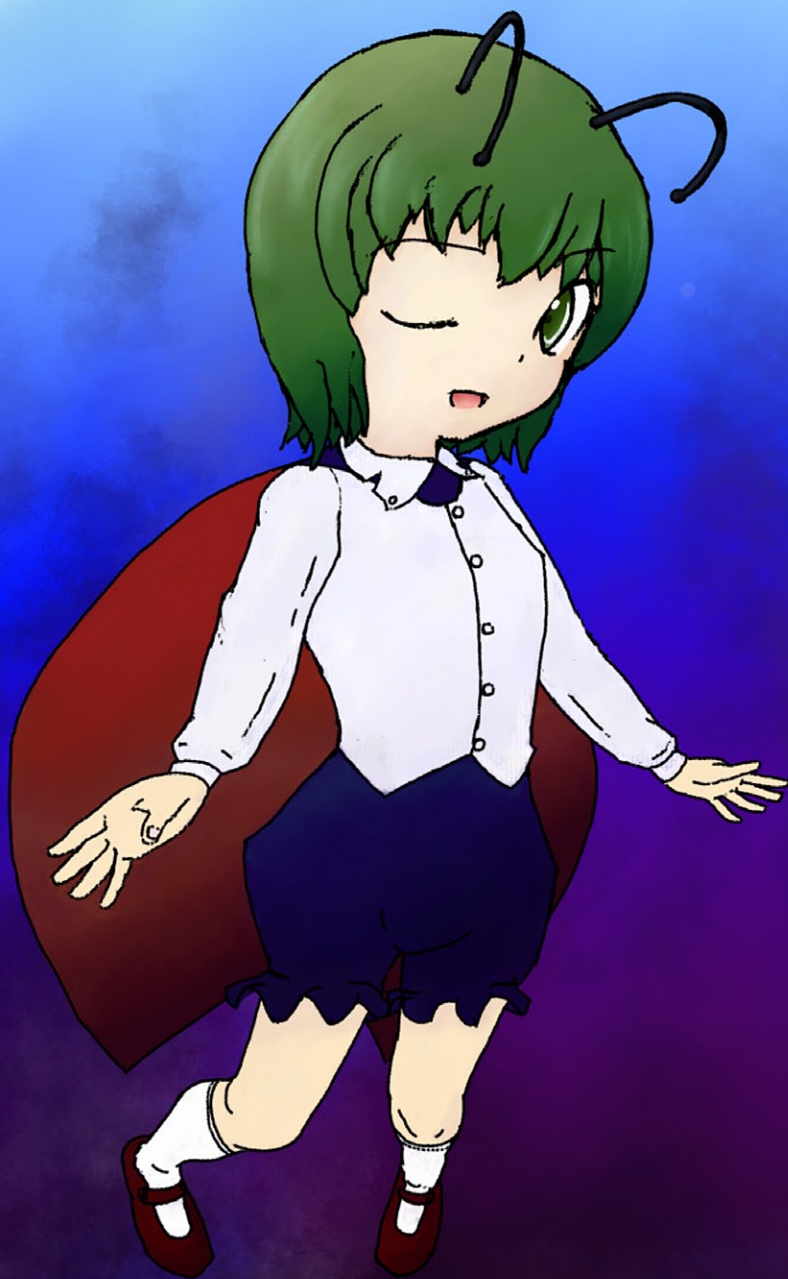
あと五年でああなるのかー。三人の無言の視線が姉妹の間を往復する。
「な、なによその目はっ。言っとくけど私は五年前はそりゃ可愛らしかったけど、さすがにそこまで幼くはなかったわよ？」
「あら。でもお漏らしの癖は直っていませんでしたわよ」
「咲夜っ、余計なことを」
「ぷくく……魔王がお漏らし……」
「コラそこ！　笑うなあ！」
　手足を振り回して暴れる姿は見た目通りの少女そのもので、魔王の威厳はどこかに吹っ飛んでしまった。リグルも既に先ほどの脅威など感じていない。
　と、和んだ空気の中で小悪魔が一歩前に進み出た。
「ところでお嬢様。具申したい事が一つ」
「うぅぅ……何よ？」
「それはですね……」
　小悪魔はすぅ、と息を吸い込むと、はっきりと言い放った。
「お嬢様の昼夜逆転生活をフランちゃんに押し付けないで下さい！」
　ピシッ、という音が聞こえた気がした。レミリアが震える声で反論する。
「だ、だって……夜じゃないと私がフランと遊べないじゃないのよう」
「ですがそれではフランちゃんの健康が損なわれてしまいます。どうしてもフランちゃんと遊びたいと言うのなら、まずお嬢様が生活スタイルの改善をなさって下さい！」
「うぅ……咲夜ぁ」
「お言葉ですが、私もお嬢様の生活スタイルは改められた方が宜しいかと」
「そんなあ、咲夜まで～」
「とにかく、それが聞き入れられないのならフランちゃんと遊ぶのは諦めになって下さい！」
「ええぇ……遊びたい遊びたいフランと遊びたいぃ～！」
　ずりずりずり、とドレスが汚れるのも構わず床を這って近づいてくると、小悪魔の腕の中のフランを見上げながら声を掛ける。
「ね？　フランもお姉ちゃんと遊びたいよね～？」
「う！」
　ぷい、と激しく首を背けられる。リグルはガラガラと何かが崩れるような音を聞いた気がした。
　そこでふと思い出したことがあり、リグルは一つ質問をした。
「ねえ、レミリアって花粉症？」
「ええ、よく分かりましたわね。お嬢様が昼間外に出られないのも花粉が飛んでいるからですわ」
　放心中のレミリアに代わって答えたのは、玉座の傍らに控えたままのメイドだった。
「へえ……でも吸血鬼は日光に弱いから昼間外に出られないんじゃ……」
「リグルさん」
　ポン、と肩に置かれた手から伝わる殺気に、リグルは震え上がった。
「フランちゃんを不健康にする気ですか？」
「あ、いや……そんなつもりじゃ……」
「フランちゃんを不健康にする気ですか？」
「えっと……その……」
「フランちゃんを不健康にする気ですか？」
「ごめんなさい……」
　ようやく小悪魔のプレッシャーから解放され、リグルはそっと安堵の息を吐いた。
「あうぅ」
「へ？　あいたたた」
　気が付けばフランがリグルの頬を掴んでぐにぐにやっていた。力は無いものの、さすがに加減無しでいじくられるのは痛い。
「ふふ、フランちゃんはリグルさんのほっぺが気に入ったようですね」
「うーん……喜んでいいのかものかどうか」
「フ、フラン、お姉ちゃんのほっぺも触ってごらん？　ほら、ぷにぷに～」
「う」
「どぐわぁ！」
　ズシャア、と這って来た道を滑って戻ると、レミリアは真っ白に燃え尽きた顔でうなだれた。そろそろみんな魔王とかその辺の設定忘れてきたんじゃないだろうか。
「ううう……咲夜ぁ、フランが遠いよう。がくり」
「よしよし。お嬢様には私が付いていますわ」
「……もはや形無しね。アンタ魔王の素質な

いわ」
　咲夜もパチュリーも対応がおざなりになってきた。
「あー、なんかもう飽きてきたし帰ろっか」
「そうだね。チルノがそれでいいならいいんじゃないかな」
「お腹すいたー。早く帰ってみすちーのご飯食べよー」
「私とフランちゃんもお供します」
「うー」
「私たちは構わないけど……いいの?」
「フランちゃんがリグルさんのほっぺを離さないんですもの。仕方ありませんわ」
「仕方ないのかなあ、それ」
「おっし、準備完了。リグル、行くよー」
「地図で方向も確認済みなのだー」
「よし、じゃあ帰ろう」
「あー、終わった終わった」
「お疲れさま——」
「それではお嬢様、パチュリー様、咲夜さん、ごきげんよう」
「あーうー」
「ああはいはい、ごきげんよう…………………って」
　流れで思わず手を振り返してから、パチュリーはハタと気付いた。
「助手が消えたあああああ!」
「フラアアアァァァァアン!」
　ついでにガバ、と復活したレミリアと一緒に、去った一行を追って走り出す。
「あ、お二人とも、その先にはトラップが……」
「ギャアアア! 槍が、落とし穴が、格子檻があああ!」
「一体誰よこんなトラップ仕掛けたのは!?」
「おのれじゃあああ!」
　パチュリーを力いっぱい蹴り飛ばすレミリアを見ながら、咲夜は深い溜め息を吐くのだった。

「なあリグル」
「ん? 何? チルノ」
「昼間はあんなに渋ってたのにさ、結局リグルが魔王退治についてきた理由って、何?」
　リグルは天を仰いで思考を巡らせると、ポツリと言った。
「…………買ったヘアブラシが良かったからかな」
　魔王退治の理由なんてそんなもんである。

　紅い城は、こうして平穏に一日を終えた。世界は今日も平和で、特筆する事もあまりなく。地下の封印は気付かれることもなく、何が起こるということもなくて。住人にとっては少しだけ大変な、世界にとってはいつも通りの明日を迎える。
　これが後に『魔王』と呼ばれる少女と『勇者』と呼ばれる少女の、最初の邂逅だった。
（終）

〈作者コメント〉
　五月は軽く死ねる。ナイトバグの原稿にへるしんかオンリーの原稿にコミケの原稿にサイト連載の最終話既に二週間ぶっち済みにさらにその続きにうひゃあというか最初以外リグル関係ないし自重しろ俺つーかあれかM3遊びに行ったのがいけないのかそうなのか畜生楽しかったよM3でも次横浜って遠いいやいやっぱりピクシブ覗いたりラジオ聴いたりしてたのがいけないのかそうなのかいやいやそんなことより文量多くて編集の小崎さんにも読んでる方にも申し訳ないというかああもうスペースがひぇぇ

- 黒ストスキー
- foxtrot
- KAGOKAGO
- 涼音 奏
- くらげん
- せん
- 水無月

女の子同士がじゃれつく光景は可愛らしくて微笑ましいですよね

▶ 海っぽい所を泳いでる様なリグルですね、イタリア人の配管工か、MIT卒の物理学者みたい。

▶ 背景はオマージュって奴です、パクりじゃないです。

何回やっても 何回やっても リグルがたおせないよ
季節外れのバタフライストーム恐ろしいです これがリグルが強いという証拠でしょう?
このごろ韓国に蚊がたくさん見えますね.... 原因はリグル?

「蟲達の上に立つ者として、貴方には華が足りないわ！私がまずその見た目から改造してあげる！」
でもリグルの服ってシンプルながら結構オシャレだと思いますの。

どうも初めまして、リグルがいっぱいで幸せです。
最初はもっと華やかな絵にする気だったのですが、結局暗めになってしまいました；

6月号も、また季節ネタでいこうと思いやっぱり梅雨かなーっ？
ってなわけで、てるてる坊主にしてみました。あれは逆さにすると雨降れー！になるそうですが
この場合はどうなるんだろ・・・・・・リグルが2人いる・・・・・・

りぐるんは女の子だっつってんだろ！（挨拶）
ところで作業量が資料用のMOTHER3プレイ時間>>背景>>>【超えられない壁】>>>ゆうかりん>>りぐるん
なのはきっと糸井さんの卑劣な罠だと思うんだ。うん。

めでたい6がつ
貫キ
6月は雨ばっかだし祝日がないのよねえ
しゅくじつ？？
っておいしいの？
人間が働かなくてもいい日だって聞いたんだけど…
あーーー…
ごめん私もよくわからない
祝
ってくらいだしめでたい日なのかしら？
つか私達っていつでもおめでたいわよね
じゃあ毎日しゅくじつってことね！！
働いてないしネー
まぁ～い～にちが～しゅく！しゅく！しゅっくじつう～
め・で・たい しゅく～じつう～う～
よッだいとーりょー！
そ～なのか～
雨なのに元気だなぁ
う…う～ん…
まぁいっか
終。

ねぇリグルちゃん
人助けか人殺しに
興味ないかな?
?

え…何その
両極端すぎる
二択は?
てか
笑顔で怖いこと
言わないでよ
黒キャラで
走るつもりか?
うふふ
あのね
リグルちゃん いつも
マントしてるでしょう?
天然と
呼んでほしいよ

ザ
なるほどね
私は…う〜ん
正義の味方かな?

マントといえば
正義の味方か
悪役と 相場が
決まってるわ
ならば
リグルちゃんは
どっちだろうと
思ったのよ
ぺか〜〜っ
(やる気のない効果音)

いや…マント黒いから
ダークヒーローかも!
アクターレ並の
カッコ良さ。
なんか
カッコいいしね
ふふっ
それにしても
このリグル
ノリノリである
それって
格好良いかなぁ…

そこで!!
そんなダークヒーロー
リグルちゃんに
無茶なお願いがあります!

かいたひと：の一と

チルノちゃんが
非道巫女に
襲われてるから
助けてあげて♪
シュバババババッ
うおぉい!!
前ページ全部
これの前フリかよ!?
そんな
バナナ!!

ダークヒーローの
仕事じゃない気が
するけどまあいいわ
行ってくるよ!
どうせチルノが
悪いんだろうけどさ
よろしくね
私は安全な所で
見守ってるわ

こらーっ
チルノを
いじめるなー!!
ほらチルノも
謝って…
……
【リグルさんがログインしました】

デデーン
だまれ
ぎゃあああ
あぁあっ!!!
きたねえ
花火だ
【リグルさんがログアウトしました】

少女満身創痍中…

リグルちゃんの
ヒーロータイプが
わかったわ

自己犠牲型
ヒーローだよ!!
今後もその身で
チルノちゃんを
守ってね♪
何度も
やりたく
ねぇよ…
リグるん
ありがとね!
あんたも巫女に
ちょっかい
出すなよ…
苦労人だよ
リグルさん!!
…というお話。

おしまい。

ほたるこい ＜第二話＞

著者：はね～～

「妖怪を怖がらない子供かぁ。ところでさ、リグル」
「ん？」
　裂いた鰻を串に刺していきながら、話が一区切りした辺りでミスティアは私を見た。
「五十年以上経っても、ヘタレは全然直ってない気がするのは私だけかしらん？」
「うるさいよ、そこ！」
　くそー茶化さないって言ってた癖に。いやまあ、話そのものを茶化されてる訳じゃないから、この程度なら別に予想してたし良いんだけど。
　水の残りをあおってから、私は空けたコップを勢いよくテーブルに置く。たぁん、と良い音がした。
「で、どこまで話したっけ。私が女の子と会って蛍のことを聞かれた所までだったと思ったけど」
「うんあってるあってる。それからどうしたの、パックリ行っちゃったわけ？」
「そんな訳ないじゃん」
　ミスティアの期待に満ちた視線を一蹴して、私は話を戻す。

＊＊＊＊＊

「今年の……蛍？」
　襲いかかるのも忘れて、私は思わず女の子に見入った。だって、蛍のみんなが地面から出てこられる時期はあと軽く一月は後だもの。
　あれ、待てよ……。
　こんな遅い時間にこの子がたった一人で川の側にいた理由って、ひょっとして！？
「まさか、蛍が見られないか待ってたの！？」
　私の問いかけに、女の子は黙って小さく頷いた。思わず絶句する私。
　だって幾らなんでも命知らずにも程があるぞ！　夜中に子供が一人で外に出るのは妖怪から見たら、私を食べてって言ってるようなもんなのに。
　ましてやよりにもよって外に出てた理由が、蛍を見るためだなんて。
「そんなに蛍が好きなの？」
「うんっ」
　あどけない曇りの無い瞳で、この質問だけは今までと違い女の子は大きく頷いた。
　その直後、私の腹の虫が遠慮なしに大きく鳴る。
　いや、あのさ。私はこれでも蛍の妖怪だよ。そんな私に向けて、こんな純粋な目で蛍が大好きって全身で語ってくる女の子を？　食べろと？

　冗談じゃない、んなことできるかぁ！！

「あのね……。子供はこんな時間に一人で外に出たらダメなの、本当に食べられるぞ！　すぐ里に帰りな、お父さんやお母さん多分すごく心配してるよ」

食べる気が綺麗さっぱり吹っ飛んだ以上はしょうがない。さっさとこの子は親元に帰してあげるのが一番だ。
でも私としては当然の事を言ったつもりだったのに、女の子は小さく下を向いて首を横に振った。
「だれもしんぱいしてないよ。だいじょうぶ」
「なにを言ってんのさ、そんな親がいるわけ」
そう私が口を開きかけた時、私の目に女の子の着てる服が目に入った。
何色にも染められていない白くてボロボロの薄い布地1枚きり。そして月明かりの下だとはっきり分からないけど手や足に幾つか黒っぽい痣が見える。
この子もしかして。
「もう、いないもん」
ぽそっと。まるで川面に小石を投げるように、女の子は呟いた。
そして私も悟る。両親がいない、体中の痣、こんな時間に出歩いているのに誰も止めないこと、私を怖がらなかった訳。それは全部一本の線で繋がる。
ぼんやりと月を眺める一人ぼっちの女の子。その姿はなんだか、まるで……。
「いいや。まだいるよ心配してる奴が」
「え？」
こっちを見上げた女の子に構わず、私は力任せに女の子の肩を掴むと引っ張って立ち上がらせた。なんでこんな事をしたのか正直なところ自分でも良く分からない。
「私が見てて心配なの！　だから帰って。蛍が見たいなら詳しく話してあげるから、明日の昼にでもここに来てよ」
だけど、このままここにいさせて知らない妖怪に食べられる姿を想像したら、私はとてもこの子をほったらかしには出来なかった。
我ながら自分が馬鹿みたいだとつくづく思う。人間が妖怪に食われるのなんか、当たり前のことなのに。
「…………」
「う。なにさ言いたい事があるなら、はっきり言ってよ」
しばらく不思議そうに私をジッと見つめていた女の子は、やがて口を開く。
「うん。わかった」
素直に頷いてくれて、正直なところ私はほっとした。なんで会ったばかりの私がそんな事を言うのか尋ねられたら、絶対に言葉に詰まったからさ……。
「じゃあ里の手前まで送ってくよ。飛んだら何分もかから……ん？」
この位小さい子なら背中におぶってもすぐ着くよな、って思ってたら私のズボンを女の子の小さな白い手が引っ張った。
「おねーちゃん、なまえ……」
……あ。
言われて私もようやく気がつく。最初は食べる気満々だったから、お互いに名前も何も言ってない事に。
「私はリグルだよ、リグル＝ナイトバグ。虫っていうか……蛍の妖怪なんだけどさ。じゃあ君の名前は？」
蛍の妖怪って教えるのが、なんか少し照れくさかった。
「ひかり」
耳を澄ませてなかったら聞き逃したかもしれないくらい、小さな言葉だった。
「ひかり、ね。上の名前は？」
「……？」
私の質問に首を傾げる女の子。
ああそっか。そういや里の人間の半分位は、名前しか無いんだっけ。
「じゃあ私の腰にでもしがみついてて。離しちゃダメだよ、落ちるから」
「わっ」
小さな手が私の腰に回ったのを確認してから、私はゆっくりと飛び上がった。
「飛んでる……！」
「そうだよ。すぐ着くからもう少しそのままで……って、ちょっと掴むところ違う！？　もう少し上掴んで、そこズボンだから！！」
こっちの呼びかけにも、怖いのか目をぎゅっと瞑ってしがみついたままの女の子。
そして僅かの間にドンドンずり下がる私のズボン。ひえええぇ。
そして一分後。
「はい着いたよ」
里のすぐ手前で女の子を地面に降ろしながら、私はずり下がったズボンを戻す。絶対に

半分以上お尻見えてたよなぁ……あー、危なかった。
飛んだのは多分生まれて始めてだったんだろう。どこか呆けたような感じで上の空な女の子のほっぺたを軽くつつく。
ぷに。
「……ふわ」
「いつまでもボーっとしてちゃいけないぞー。ほら、何か言うことは？」
子供と間違えられた事は数え切れない私だけど、折角だしちょっとお姉さんっぽく振舞ってみる。
「……ありがとう」
「どういたしまして。じゃあ、またね」
興奮気味なのかほんのりと顔を上気させながら頷く女の子に手を振ってから、そのまま私は振り返って帰ろうと……。
「うぉっとお！？」
思ったけど、白くて小さな手が私のズボンを引っ張ってて出来なかった。
「おねーちゃん。明日」
ジーッと私は正面から見つめられる。
あー、そう言えばさっきそんな事を勢いで言ったよな私。
「そうだね。じゃあまた明日」
「まってる」
多分感情を出すのがあまり上手じゃ無いんだと思うけど、言外に強い意志がいっぱい込められてるような感じに一言呟いてから、女の子は小走りで里に戻って行った。

「なんだか少しばかり妙なことになってきたような……まあいっか。どうせ暇だし説明だってすぐ済むだろうし」
頭を掻いて私は里からさっさと離れる。守ってる人間に見つかって追いかけ回されるのはごめんだからね。
気にも留めてなかったけど、ふと空を見上げるとこの日の夜空には遠慮深げに細い月が光っていた。
白い髪と白い服、そしてそれに負けないくらい白い肌の女の子と会った、そんな夜。

＊＊＊＊＊

「そんな感じだったかな。確か私とひかりが出会った夜って」
ふと振り返ってみると本当つくづくヘタレてる気もするけど、多分気にしたら負けだ。
気にしないの精神で行こう。
「そういえばさ、向こうの世界には光源氏計画とか言うのがあるらしいよ」
「なにそれ」
その時、ミスティアから合いの手が入った。光源氏計画……ってなんだろ。
「何でも好みの幼女を見つけて、自分好みに染め上げるとか何とか」
「女同士なのにそんなもんある訳ないでしょ！　私をなんだと思ってんのさ！？」
全く、いい加減にしてよ。

お酒呑んでる訳でもないのに頭が痛い。それにこれはそんな話じゃ無いんだ。ミスティアに話をしながら、私の中の記憶も段々鮮明になってくる。
「そうやって茶化してるなら話やめて帰るよ、私」
「ごめんごめん、もうしないから。で、どうなったの？　次の日も行ったんでしょ」
本気で私が嫌がったのが分かったのか、すいっと焼き魚が出てきた。ちなみにミスティアの屋台に焼き鳥のメニューは一切無い。頼んだら水ぶっ掛けられるし。
「そりゃあ行ったよ、約束したし。たださ……」

＊＊＊＊＊

「……ふぁあああ。あー、良く寝たなぁ」
次の日、私はいつものように自分の家で目を覚ました。
体を起こしてベッドの上で思いっきり伸びをする。昨日の夜はあの後も散策したりして飛び回ったせいか夜が白む頃に帰って来たから、横になったらすぐにぐっすりだった。
「でもちょっと寝すぎかな。もう太陽だって大分傾いてるし」
窓の外から太陽を見たけど、これは多分もう二時回ってるよな。とりあえず、ちょっと水でも飲みに……。

『まってる』
「うわぁあああああああ!?」
布団を跳ね飛ばして、私は起き上がる。眠気も何も一気にぶっ飛んだ。
ややややや、やっちゃったー!
ここからあの沢まで30分位は多分かかると思うけど、そんな事は言ってらんない。超特急で着替えると、私はそのまま飛び出した。
でも、こういう時に限ってそこらにいる低級の妖怪連中がちょっかいをかけて来るんだ。
結局私が着いた頃は、お八つの時間には丁度良いねって時間だった。
「はぁ……はぁ……さ、流石にもういないかな……」
妖怪は一日二日遅れても気にしないけど、人間の場合はそういう訳にいかないのは知ってる。これだけ遅刻したら、幾らなんでも帰っちゃったんじゃないかと思った。
けど。
「リグルおねーちゃん」
本当は分かってた。絶対にこの子は、待ってると言ったら来るまで待ってるだろうって。別に怒る訳でもむくれる訳でもない。
昨日の夜と変わらない表情で、女の子はそこにいて。
「ご、ごごごごめん! 待ったよね、いや待ったのは間違いないんだけど! ああいや何言ってんだ私」
落ち着け自分、やる事は別にあるだろ。
焦って回らない頭を無理矢理回して考える私に、女の子は寄って来る。そして私の頭に手を伸ばした。
「おねーちゃん、ねぐせ……」
言われて私も気がつく。
そういえば全然髪を直さないで出たっけ。水面に顔を映すと、髪の毛があっちこっち向いて酷い頭になってた。
「ねてた?」
「えーと……その。ごめんなさい」
やる事は言い訳しないで素直に謝ること。相手が誰だろうと遅れたらごめんなさい、だ。どこかの人にも本当ごめんなさい。
「うん。でも来てくれたから……いいよ」
かなり待っただろうに、女の子は優しく笑った。
うううう、申し訳なさ倍増。
「でも君、どのくらい待ったかな。軽く見ても三時間は……」
「ひかり」
私の寝癖を指でちょこちょこ弄っていた女の子だったけど、不意にそれをやめて私の言葉を途中で遮った。
あ、そうか。
「ひかり……ちゃん、って呼べばいい?」
「ひかりでいいよ」
「そっか。じゃあ私もリグルで良いから」
この時初めて。私の中で目の前の子は、ただの人間の女の子から『ひかり』っていう名前を持ってる存在に変わったんだと思う。
その後、申し訳なさが四倍増になった辺りで謝るのがループしてることに気がついた。結局四時間近く待たせていた事が分かり、
「っと。そういえば、ひかり昨日言ってたよね。蛍が見たくて来てるって」
「うん」
どうやら本気で蛍が見られると思ってるらしい。
とりあえずこの誤解というか間違った認識をどうにかしない事には、話が始まらないよな……。
「あのさ。蛍の皆が出てこられるのは少なくとも一ヶ月は後だよ。水無月(=6月)に入ってからここに来ても十分に間に合うから」
「そうなの?」
私の説明にひかりはきょとんとする。
うん、やっぱり分かってなかった。
「蛍にも色々いるけれど、少なくとも幻想郷で蛍が見られるは水無月の中から終わりだけ。それ以外に蛍を探しても無駄だよ」
冬以外は年中見かける蟲も多いから蛍もいつでも見られると思ってたのかな。
と思ったら、ひかりは私を指差した。
「でも。リグルは?」
「私は一年中いるけど、妖怪だから別勘定で宜しく。折角だから改めて自己紹介、蛍の妖

怪でリグル=ナイトバグ。基本的に行き当たりばったりで楽しんで生きてます。年は……幾つだっけ、まあいいや」

百から先は数えるのやめたから良く覚えてない。まあ年を取っても中身は大して変わってないんだけどね。

そんな抜けた自己紹介をしてたら、ひかりがクスクス笑っていた。あれ、そんなおかしいこと言ったかな。

「リグル、きのう大妖怪さんっていってたよ?」

「あー。それは見得張っただけ」

そういえば昨日は自称蟲の大妖怪とか言ったんだっけ。尤も数日顔を合わせてりゃそんな大した妖怪じゃないのはすぐばれるから良いんだけど。

でも……表情の起伏が乏しいからあまりピンと来なかったけど、笑うと結構可愛い。そんなことを思ってたら、自己紹介が向こうからも帰って来た。

「ひかり。八つ。おばさんのおうちにすんでる」

簡素な自己紹介だけど、これでも多分ひかりにしたら口数が多いほうなんだろう。

でも……へぇ、8歳なんだ。

けれど、すぐ後にズゴンと重い話題が振って来る。

「おとうさんとおかあさんは死んじゃった」

あー。

昨日の話の断片から分かってはいたけど、自己紹介の延長でこういうのが来ると何ていうか結構へこむ。

せめてもの救いなのはこれを話す時も、ひかりの表情が変わらなかったことだ。

「そっか。おばさんってどんな……あ」

話を別の方に向けようと、どんな人か聞こうと思って私はすぐ後悔した。

夜なら少ししか分からなかったけど、陽の光の下でならはっきり分かる。手や足に、幾つも殴られたり火を押し付けられたような痕があったから。

「きらいなひと」

表情は変わらなかったけど、この言葉だけひかりの語調が強くなった。この子が語調を強くするって事は、どれだけ嫌いなのか。

聞くまでも無いし聞くべき事でもない。というか無神経についうっかりこういう質問した自分が嫌になるよ……本当。

「えと。そういえば、ひかりが蛍を好きな理由ってどうして? 良かったら教えてよ」

初めて会った時から、それは私が凄く気になっていた事だ。

危険も気にしないであんな夜に一人で里を抜け出して沢まで来るって事は、それだけ蛍が見たかったのは間違い無い訳で。

尋ねてみると、ひかりは川の向こうに目をやった。

多分川の向こうを見てるわけじゃないだろうな……凄く遠い目をしてるから。

「いつもおかあさんといっしょに、見にきたの。すっごくきれいだった」

嬉しそうに語っているけれど、でもどこか寂しげに見えるのはきっと気のせいじゃないんだろう。

「来年もいっしょに見ようね、いちばんに見に来ようねって。やくそくしたの」

うぁあああああ。重い、重すぎる。

地雷を避けて歩こうとしたはずなのに地面全部地雷しかなかった気分だ。

でもこれで良く分かった。ひかりはお母さんとの約束を守ってるんだ。

「でも……しばらく、おうちにいるね」

私の方を向いてひかりが言う。でもそれも当然だ。

一ヶ月は後だって私が教えた以上、それまではここに来る意味はない。

だけど、ひかりにとって叔母さんの家って奴は安心して暮らせる所なんだろうか? 考えてみるまでもない。そんな場所とは程遠いのは間違いない。

それどころか、蛍の時期を教えようともせず夜中に家を抜け出すのを止めないって事は。ひかりに死んで欲しいと思ってる連中だって事だ。

そんなのは嫌だ。

大して力もないへたれ蛍妖怪の私だけど、ここでこうやって会って縁が出来ちゃった以上は、放置しておけない。……損な性格だと

思うよ、自分でもつくづく。
「ちょーっと待った！　ひかりは家にいる方が、ここに来るより楽しい？」
　だから、お節介を承知で私は言う。
　分かっちゃいたけど、当然ひかりは大きく首を横に二度振った。
「よし。じゃあ暇な日や出てこれる日はお昼になったらここに来るよーに。私と遊ぼう、ひかりが良かったらさ」
　私の言葉によっぽど驚いたのか、ひかりは目をまんまるにして私を見た。
「リグルは……いいの？」
「大丈夫これでも年中暇してるからね。あれ、嫌だった？」
　聞き返すと、さっき以上にひかりは強く首を横に振る。
　本当は人間と妖怪がこうやって側にいるのは、あまり良い事じゃないんだろうけど。でも気にしない。
「じゃあ開いてる時はお昼になったらここに来ること。良い？」
「うん」
　そうしてその日、私とひかりは別れた。
　別れ際に『あしたはねぼうしないでね？』と言ったひかりの顔は、今までで一番素敵な笑顔だった。

（終）

〈作者コメント〉

　いよいよ蛍の季節も近づいてきましたが、皆さんは如何お過ごしでしょうか。ぽんこつ作者のはね～～ですー。
　待っていてくれた奇特な方、ありがとうございますっ。そうじゃない方（多数派だと思いますけど）ああっ、お願いだから読み飛ばさないでーー！（泣）
　ここから先、物語はひたすらシリアス一直線で突っ走りますが、どうか最後まで目を逸らさず見て頂けましたら幸いです。
「ほたるこい」最終話となる第三話で、またお会いしましょうっ。

リグルとオルゴール

著者：ＭＡＬ

その日は何の変哲も無い一日だった。
特に悪い事をした覚えも無い。
それでもおかしなことが起きる。
だからおかしいのかもしれない。

リグルの手には箱があった。一度地面についたので多少汚れていた。
ふたを開けて中を見るとそこにはよくわからないものが詰まっていた。

＊＊＊

ここはリグルの家。小さなこの家に妖怪、妖精含め四人が集まっていた。
「でさ、リグルはなんでこんなものを持ってるの？」
鳥の妖怪が聞いた。彼女はこの箱にかなり興味があるらしく、他の三人には触れさそうとしない。
「おととい家の近所で拾った」
「これを拾った？」
鳥の妖怪はふたをカパカパさせながら首をかしげた。このままだと箱を持って行かれそうな雰囲気だった。
「正確に言うとぶつかった拍子に向こうが落としたのを拾った。だけどね」
「じゃあ持ち主を探さないといけないじゃん！」
氷の羽を持つ妖精が大声で言った。一瞬、場の空気が凍った。リグルが咳払いをしてその場の空気を溶かした。
「今日この家に集まってもらったのはチルノ言った通りこの箱の持ち主を探す為なんだ。
ほら、ミスティア。箱を返してよ」
「えー、これ私にちょうだいよー」
「他人のだから駄目だって。ほら、机に置いて」
「仕方ないなぁ」
ミスティアが箱を置いた途端、どこからか濁った音が聞こえてきた。
「この音……ミスティアが出したの？」
きょとんとした顔で短めの金髪の妖怪が言った。ミスティアは首を左右に振った。そして再び箱を持ち上げて、机の上に置いた。
その箱から濁った音が聞こえてきた。

＊＊＊

湖に向かってチルノが平たい石を飛ばした。石は何度か水の上を跳ねたが最後は湖の底へと沈んでいった。
「で、ルーミアはどこから探す？」
「さぁ、まずあの箱が何か知らないから探そうにも探せれないよ」
ルーミアもチルノと同じく平たい石を飛ばした。しかし石は一度も水の上を跳ねることなく湖の中へと入っていった。
チルノは一度ルーミアの顔を見てから再び

石を飛ばした。自慢げに投げているだけあって石は何度も水の上を跳ねた。
「こういうときは人に聞くって橙が言ってたから人に聞けばいいじゃん」
「だからその前にあの箱が何かを知らないとだめだって」
今度は普通にルーミアは石を湖に投げ入れた。多少いらっとしていたらしく思った以上の飛距離が出た。それを見たチルノはルーミアのまねをして石を遠くに投げようとした。
しかしより遠くへと飛距離を狙おうとして精一杯の力を入れたがそれは空回りしてしまい近場に大きい水しぶきを上げることになった。
「じゃあそれを人に聞けばいいじゃん」
「今はその箱を持ってないって」
「ってことは探せないってわけ？」
「そういう事になるわ」
チルノが最後に投げた石はかわいらしい音を立て、湖の中へと姿を消した。

＊＊＊

「なんでついてくるのさ？」
「だってその箱が何か気になるし」
「それにしてもミスティアは物好きだなぁ。おっ、見えてきた」
二人の目の先には古臭い一軒の建物があった。その建物は香霖堂と言って外の世界の商品まで扱っている古道具屋だ。戸はきっちりと閉まっていた。
コン、コン、コン。
「香霖さん。いませんか？」
中からどたばたと物音が聞こえてきた。それに紛れて人の声も聞こえてきた。
「いるよー、ちょっと待ってくれ」
しばらく二人は店の外で待機をすることになった。リグルの傍らでミスティアが入念に箱を調べていた。そのしぐさが妙に面白かったのでリグルはふと笑ってしまった。
待っているとようやく戸が開いた。中から香霖さんと呼ばれた男の人が顔を出した。
「おまたせ。さっ、中に入って。今日は暑いから冷や水を用意したよ」
「ありがとうございます」
店内に入るなりリグルは香霖に謎の箱を手渡した。香霖はそれを持った途端にひらめいたかのように小声でつぶやいた。
「これはオルゴールと言う道具だ。用途は音を聞くためにある。残念な事に僕の能力じゃ用途はわからないけどこのねじみたいなのを回せば音を聞けるんじゃないか？」
香霖はオルゴールの底にあるねじを力強く巻いた。しかし錆びているせいか全く動かない。
「んー、油を挿さないといけないな。えーっとあれはどこだっけなぁ？　……あぁ、あったあった」
香霖は油の入った小さい瓶を持ってきて、その中の油をねじ穴に少量入れた。周りについた油を丁寧に布でふき取り、香霖は再びネジを巻いた。
カチカチとテンポの良い音が店内に響いた。そろそろかなと思った香霖はねじから手を離した。自由の身になったねじはゆっくりと回った。それと連動して中の仕掛けが動き、きれいな音が奏でられた。その音があまりにもきれいだったので三人は聴き入ってしまった。
オルゴールはねじが動かなくなるまで音を出していた。最後の一音を終え、香霖堂は物静かないつもの雰囲気を取り戻した。リグルとミスティアの目は宝石のように輝いていたのに対し、香霖は険しい顔をしていた。そしてゆっくり口を開いた。
「これは名作のKYANONじゃないか。外の世界で有名になっている曲だ」
「へぇ、そうなんだ。でもこのオルゴールって言うのに音が閉じこめられていたとは思ってもいなかったよ」
リグルは音の根源となったオルゴールをまじまじと観察していた。しかしミスティアが物欲しげな顔をしていたのでリグルはしぶしぶそれを手渡した。ミスティアは手に取るとすぐに香霖のまねをしてねじを巻き始めた。
「香霖さあ、このオルゴールを知ってる人を知らない？」
リグルは香霖に聞いてみた。まだミスティアはねじを巻き続けている。どれだけ巻ける

か挑戦をしているようだ。
「僕はそんな人を知らないなぁ。そう言えばこんな珍しいものをなぜ君が持っているんだい？」
「私とぶつかった拍子にその誰かがオルゴールを落としてしたんだよ。あいにく顔を見忘れてたから誰かわからないんだ」
「そうなのか。じゃあ僕も探すのを手伝ってあげよう。ここに来る人にオルゴールを落としてないかって聞いてみるよ」
「ありがとうございます」
　リグルが深々と礼をした。リグルはこのまま我が家に帰る予定だった。そんなリグルとは裏腹にミスティアはオルゴールの音を聴いていた。香霖もゆっくりしていきなよと言わんばかりに追加の冷や水を用意してくれた。仕方なくリグルはここに居座る事にした。

＊＊＊

　外はすっかり暮れていた。いったい何時間香霖堂にいたのかわからない。これもどれもミスティアのせいだった。あの後ずっとオルゴールを聴き、感想をだらだらと言い、またオルゴールを聴いて……それはもう地獄絵図だった。今、リグルは自分の家の前にいた。手にはオルゴール。背後には……。
「ところでさ、いつまでついてくる気なの？」
「オルゴールがあるまで」
　ミスティアもついてきてしまった。今日の屋台とか色々心配はあるのだが本人がいいと言うので仕方なくリグルは帰ってくれと言うことを諦めた。
　でもそれより気になるのは家に電気が点いていることだ。今日出たときはちゃんと消していたはずだ。リグルは試しにノックをしてみた。誰か出てくるかどうか、そんな事を考える暇さえ与えないほどの早さで返事が返ってきた。
「あ、今開けるよー」
　中から声が聞こえてきた。その声はまさしくルーミアのものだった。
　家主が不在の家の戸が他人の手によって内から開けられた。状況を上手く把握できていない家主は頭を抱えた。
「遅かったね。ちょっと家のもの拝借したけどいいよね？」
「全然よくない。ってかなんで私の家にいるの？」
「リグルに会うために待たせてもらっただけよ。あの箱が何かわからなかったら人探しなんて話にならないわ」
　二人はリグルの家に上がった。そこにはずうずうしく他人のベッドで寝るチルノと勝手にリグルが集めた本のコレクションを漁っているルーミアがいた。
　リグルにとって一番嫌だったことは今日の晩のおかずが食べられていることだった。ちょっと贅沢しようと思っていたのに机のうえには無残にも空の缶詰が置いてあった。それだけではない。貯め置きしていた水だって勝手に飲まれるし、今日は厄日中の厄日だった。
「ねぇねぇ、オルゴールの音を聞く？」
　ミスティアが落胆しているリグルの手からオルゴールを奪い取った。そして我が物のようにねじを巻いた。
「その箱、オルゴールって言うのね」
「そうそう。今日ね、香霖が教えてくれたんだ。おっ、いい感じに巻けてきた」
　ミスティアはそう言うと手を離した。ねじがゆっくり回っていく。同時に仕掛けもゆっくり動いた。
　なんともきれいな音だった。しかしもう何度も何度も聴いたのでリグルは飽きていた。それに比べ、初めて聴いたルーミアの顔は驚きを隠せない様子だった。
　最後はとても頼りない音で終わるのだがなぜか心を惹きつけ、また聴きたくなるような感覚を引き起こす。オルゴールとは不思議なものだった。
　今度はルーミアがオルゴールのねじを巻いていた。そのせいで今夜はオルゴールの音が止むことが無かった。それはもうリグルにとって迷惑極まりなかった。

＊＊＊

次の日、真っ先に起きたのはチルノだった。一瞬考え事をした様子を見せたがすぐに手を叩いて納得したような仕草をした。
チルノは元気よくベッドから飛び降りた。そして景気良くずっこけた。何かを踏んでしまったのだ。痛みが残る頭を抑えつつ何かを確認するとその何かとはリグルだった。リグルは横腹を抱えながらうずくまっていた。
「いったー。なんでリグルが床で寝ているの？」
「お前がベッドで寝ているからだろ！」
チルノが立ち上がると鈍い音がして再び床の上に倒れた。チルノの頭の真上にいすがあったのだ。リグルはざまあみろとけなしながら横腹を押さえつつ、立ち上がった。
ふとリグルはミスティアとルーミアの方に視線がいった。二人は机に伏せる形で一夜を過ごしていた。なんという執念なのか二人とも手がオルゴールの上にあった。
リグルは躊躇なくその手をどけ、オルゴールを手にした。よくよく見てみれば美しい見た目だ。でもいったい誰がこんなものを持っていたのかはまだわかっていない。
「あたいもついてくよ」
リグルが戸を開け、家から出ようとしたときに倒れているチルノが呼び止めた。断る理由がないのでリグルはチルノを連れて行く事にした。
チルノはのっそりと立ち上がり、ふらふらした足取りでリグルの後を追いかけた。さっき頭を打ったのが相当きいているみたいだ。

＊＊＊

「それってオルゴールって言うんだ。聴いてもいい？」
「また後にしてよ」
リグルは移動中にチルノにこのオルゴールの事を全部話した。納得した様子だが、実際に納得したかは正直のところわからなかった。
リグルは一番人脈が厚そうな霊夢のところを訪れようとしていた。そんなに遠くない所にいるから便利なものだ。しばらく人通りの少ない道を歩いていると博麗神社が見えてきた。都合良く霊夢は境内にいてすぐに話しかけることが出来そうだった。
突然リグルの足が止まった。それに合わせてチルノの足も止まった。そしてお互いに顔を見合わせた。
「チルノさぁ、霊夢に声を掛けてくれない？」
「なんでさ。リグルが声を掛ければいいじゃん」
「実は霊夢が苦手なんだよ。前に悪戯したからまだ恨みを買ってそうで――」
「あら、恨みを買ってほしかったのかしら？」
二人の会話を霊夢の地獄耳がとらえた。それにしても霊夢は気付かぬ間にリグルの真横まで来ていたことは驚きだった。
何はともあれ霊夢と会話が出来たことはリグルにとってうれしくない。ところでさ、この箱の持ち主を知らない？」
「そのオルゴールのこと？」
霊夢は見ただけでこの箱の名前を言い当てた。これにはリグルは目を丸くするばかりだった。
「霊夢はオルゴールのことを知ってるの！？」
「私のだったから覚えているわよ」
「えっ、じゃあ返すよ」
リグルはオルゴールを霊夢に差し出した。しかし霊夢は受け取るどころかそれを断った。
「だから私のだったって言ったじゃない。今はさとりが持っているはず。なのになんであんたが持っているの？」
「ぶつかった拍子に落としたのを拾ったんだ」
「ふーん。ならその時はこいしが持っていたわけね」
「あのさぁ、さとりとかこいしって誰なの？」
リグルは人との付き合いが霊夢ほど多いわけではない。まだまだ知らない人はいっぱいいるのだ。
「さとりとこいしは地底の住民よ。以前に野暮用で会ったことがあるのよ」
「地底って確か私みたいな妖怪が入れない場所だよね」

「んー、そうだったっけ？　妖怪が地底に入れないんなら私がオルゴールを返しに行こうか？」
「じゃあお言葉に甘えさせてもらいます」
　リグルは霊夢にオルゴールを渡した。その刹那、ずっとのけ者にされていたチルノのストレスが爆発した。地団太を踏み、怒りをあらわにしている。
「あーっ！　あたいが来た意味ないじゃん！」
「あっ、チルノいたんだ？」
　そっけなく霊夢は言った。そのせいでさらにチルノは暴走した。しまいにはリグルの背中をぽかぽかと殴る始末だった。
「なんであたいはずっといたのにいないように扱われるのよ！」
「止めてチルノ。痛いよ。でももし今家にいたらオルゴール狂の二人になにされてるかわからないよ？」
「なんで？」
　涙ぐんだ目でチルノはリグルの顔を見た。悟りきった顔でリグルは言った。
「今頃オルゴール狂が必死にオルゴールを探している。狂っている彼女らにもはや言葉は通じない。すなわち何を言っても取り調べという名の拷問が待ってるに違いない」
「た、確かに」
　チルノはあごに手を置き、今の事態を理解した。しかし霊夢はオルゴールひとつで狂う人なんかいるのかとあきれた顔をした。
「じゃあ今から地底に行って来る。あんたの家の場所はわからないから帰ってきたと思ったらまた神社に来て頂戴」
「あ、はい」
　そう言うと霊夢はどこかへ飛んでいった。取り残されたリグルとチルノはお互いの顔を見つめ合っていた。
「ここで待っていようか」
「うん。あたいはリグルの家以外ならどこでもいい」
　境内に腰を下ろすのも何のなので二人は他人の家の中に勝手に入った。
　入る寸前リグルは後ろ手にある空を見ながら我が家が無事なことを祈った。

＊＊＊

　薄暗い洞窟の中。できれば入りたくない場所だがさとりの住む地霊殿はこの先だ。
　親切な橋姫に道を案内してもらい、霊夢は無事に地霊殿につくことが出来た。その後お燐にも案内してもらい接待間に連れて行ってもらった。
「あなたはオルゴールのことで来たのですか」
　地霊殿の主、さとりはいすに深く腰掛けていた。第三の目で人の心を読んでしまうため人からは嫌われている。
　今回も話す前の霊夢の心を瞬時に読んだ。霊夢はそれを知ってあえて話さずに会話を始めた。
「地上の妖怪が私のオルゴールを拾ってくれたんですね。そしてあなたは『オルゴールが私の所持品だと知っているので返しに来た』でいいですね？」
　はたから見れば一方的な会話に過ぎない。だがこれで成り立っているのだから驚いたものだ。
「持って来てくれたのは有り難いのですが実はそのオルゴール、お返ししたかったんです」
「えっ！？」
　思ってもない返答に霊夢は無防備な声を発したと同時にいすから立ち上がってしまった。
「ああ、それは冗談です。ただ壊れたオルゴールを修理したかっただけですけどね」
　霊夢はさとりの言葉が少し気になったのでオルゴールのねじを巻いてみた。手を離すとしっかり音は出ていた。
「壊れてないわよ？」
「それならばおおかた拾った方が直してくれたんでしょう」
　それを言うとさとりはしばらく黙り込んだ。一方的に読まれている上に黙り込まれるなんてこれ以上辛いことはない。
　霊夢はさとりが喋るのを待っていた。待っているのに気付いたさとりは話す内容を素早く吟味し、再び口を開いた。

「やっぱりこれは返したほうがいいですね」
「なんで?」
「こんな所に置いていたら前みたいに壊れて聴けなくなってしまうからですよ」
「じゃあ私は来た損?」
「そのようですね」
「じゃあ私に」
「わかってます。お空、霊夢に手土産を持たせないさい」
　霊夢はお空から手土産を渡された。手土産を手にすると霊夢は至高の笑みを浮かべ、さっそうと地上へ帰っていった。
　霊夢が地霊殿から帰っていった後、気になることがあったお空はさとりに尋ねた。
「あのオルゴール返しちゃっていいんですか?」
「元は霊夢からもらったものですし、こいし以上にオルゴールの好きな人が地上にいましたからね」
「えっ、こいし様ってオルゴールが好きだったんですか?」
「さぁ、私はこいしの心だけは覗けませんからわかりませんが、ただオルゴールを落としてしまって何も言わない所を見るとそこまで好きじゃないと思いますけどね」

＊＊＊

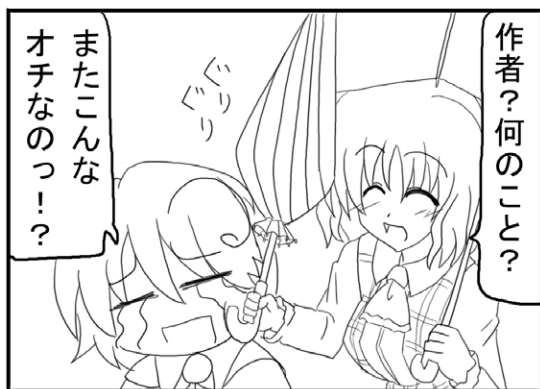
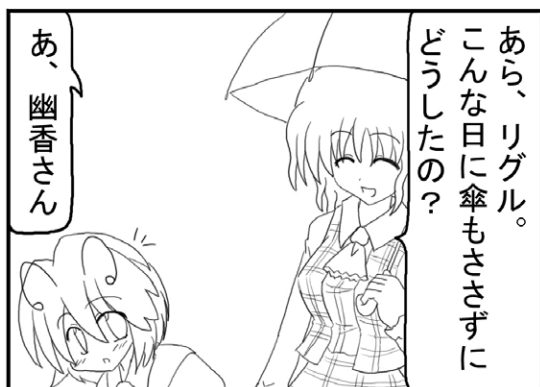
「勝手に人の家に上がって……」
「あっ、霊夢。どうだった?」
「このざまよ」
　霊夢はリグルにオルゴールを見せた。リグルはそれを見て首をかしげた。
「返してきたんじゃなったの?」
「突き返されたのよ」
「じゃあそれはどうするの?」
「私は別にいらないわよ。だからさとりにあげたのに。んー、じゃああなたにあげるわ」
「えっ、くれるんですか?」
　驚きと喜びが混じった声でリグルは言った。霊夢は頭を上下に振り、オルゴールをリグルに手渡した。
　リグルは自分の手の内にあるオルゴールについ見とれてしまった。
「じゃあ私は寝るから帰ってくれない?」
「あっ、わかりました」
　寝ていたチルノを叩き起こし、リグルは我が家に帰っていった。
　霊夢は気が抜けてしまったのかそのまま倒れて寝てしまった。

＊＊＊

　ミスティアが開いている屋台で二日ぶりの火が灯った。しかし客は一人を除いて誰もいなかった。
「あのさぁ、ルーミアがいると他のお客さん来ないんだけど」
「じゃあオルゴール渡して」
　ルーミアが小さい手をミスティアに差し出した。それをミスティアは押し返した。
「リグルは私に渡したんだよ。それにその後じゃんけんで公平に決めたじゃん」
「ミスティアはわがままね。仕方ないから明日の三食おごりで諦めてあげる」
「三食ってちょっと言い逃げはなしだって!」
　ルーミアが逃げていった後、一人になったミスティアはオルゴールを鳴らした。何度聴いても飽きないその研ぎ澄まされた音にいつも魅了されてしまう。
　このオルゴールから流れる魔法の音色に誘われた誰かが来ることを祈って何度も何度もミスティアは繰り返し音を流した。
　この後、ほんの数十分で屋台の席が埋まったらしい。それだけこのオルゴールは良い音色だったんだろう。とミスティアは今日もリグルに自慢していた。

（終）

〈作者コメント〉
　二度目の投稿、MALです。季節ネタが来るだろうと予想してあえて季節ねたからはずしてみました。
　KYANONとかネタを振った割に神奈子は出てきませんでした。さすがに要領がね。楽しめる作品になってたら幸いです。

描いたひと：ひどぅん

リグると！

かぶと

描いたひと：ひどぅん

楽屋ウラ的4コマ りたーんず。

かいたん：草加あおい

ゆうかりんの愛情表現

でらっくす☆りぐるちゃん

りぐるん☆参上

ちょっと休もー

あら

蝶と蜂・・・と

蝿、虻、天道虫

蛾、蜻蛉、蛍・・・

ハッ!!!

テレレ

闇に蠢く光の蟲

リグルナイトバグ

殺虫

キャー

作☆さかりん

キ☆チョール

ヨク キク
ひぇええええ

たすけて…
ぶおーん
助けてほしい?

DOKI
DOKI
はい…
じゃあちょっとお願いしたいのだけども
DOKI

神社の害虫駆除を…
…いいわよ

あれを操る程度の能力

はい
追いだしたわ
うじゃあぁ
描きたくないよ
虫たち

虫を一カ所にまとめるな…
うぷ…
かわいいのにー

ふふ…
な
何よ
ギッ

お前の友だち皆死ねええ!!!
ガキか
お前はッ
ビュー

早苗さんの奇跡の力によって
憧れの人気者になったリグル
その運命は…？

リグル＆早苗さん本（タイトル未定）
６月７日　ComicCommunication13
N－20b「海亀」にて販売します

早苗・ナイトバグ

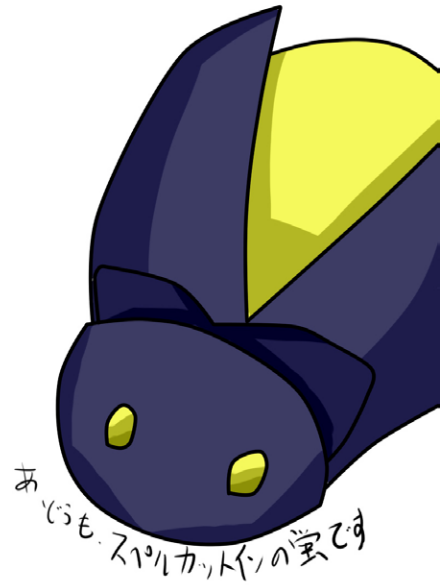
描いた人　東

リグルのしゃくび

描いた人 オワタ

おひるね

4月22日の

描いたひと：怒羅悪

異変去りし後に

著者：壁々

花は散った。迷える魂も無事に行くべきところへ行った。幻想郷にいつも通りの初夏が訪れようとしている。
無縁塚も、いつもの姿―わびしく、殺風景な光景―へとなる。そう四季映姫・ヤマザナドゥは思っていた。だが実際は
「罪符『彷徨える大罪』。」
「くっ…わっ…!」
「悔い改めよ!審判『ラストジャッジメント』!!」
「きゃん!」
色鮮やかな弾幕がたびたび飛び交うこととなっていた。
映姫は、あの六十年に一度の魂の氾濫の一件まで、小町のことを「少し仕事が遅い気がする」程度に思っていたが、それは違ったということを確信した。そこで、映姫は暇ができる度に無縁塚へ見回りに行くことに決めたのである。実際これはなかなか効果があるようで、レーザーのごとき雷、というかレーザーを落とされて満身創痍の小町は「なんであたいがサボってるのわかるんですか～」とべそをかきながら言ってきた。映姫は「あなたがサボると私が暇になりますから、見回る時間も出来るのです。」と言ってやってもよかったが、「あなたの行動などお見通しなのです」と、威圧的に言っておいた。

「じゃあ、仕事に戻ってください。ちゃんと手加減はしたんですから。」
「は～い…」

「…これで手加減ねぇ…結構あちこち痛いんだけど…」
映姫が去ったあと、涙目の小町はレーザーを落とされて墜ちたその場所から動けずに大の字になって寝ていた。さすがに死神といえど痛いものは痛い。
「ん…よしっ、いっちょやりますかっと!」
さすがに小町といえど叱られた直後にサボろうという気にはならない。大きく下半身を振り上げ、その反動で上半身を起こす。勢いよく立ちあがり、大きく体を後ろにそらせて「ん?」
人影を見つけた。しかも目に見えて近づいてくる。明らかに目的地はここ、無縁塚のようであった。
「…やれやれ、こんなところに来るなんて…」
自殺者なんてろくでもない魂を作らない。それも仕事のうちだと勝手に信じている小町は大鎌を手に取り、その人影に接近を試みた。
「こら!まだ死ぬには早すぎるよ!」
「いやいや、死のうなんて…」
「ここに来るようなやつは死にたがりしかいないよ、さあ帰った帰った!」

「…その大鎌…あなた、死神ね？」
「そうさ、あたいは三途の川の一級案内人、小野塚小町。あんたみたいな虫の妖怪が今持つ金では三途の川は渡せない。帰らないならたたきのめして帰してやる。」
「いや、渡る気はないって…私はあなたに聞きたいことがあってここに来たのよ」
「…？　聞きたいこと？　私に？」
「うん。」

二人は無縁塚に降り立ち、適当な石を見つけて腰かけた。あたりにぽつぽつと幽霊がただよう。
「…で、聞きたいことって？」
「虫の魂…を見せてもらいたいなって。」
「虫の魂？」
「うん、この春、私はわけあって幻想郷中の花を見たわけじゃないんだけど、幻想郷を飛び回ってた友達がいてね。この二人、いつもは前あったことなんてあんまり覚えていることもないんだけど、この二人がなんとなくでも覚えてて、あんまりいい思い出でもなさそうだったのに話してくれたっていうのは、二人にとってすごく印象に残ったってことだと思うの。それで、私なりにも少し魂について考えようかな、って思って。」
「ほう。で、なんで虫の魂？」
「一寸の虫にも五分の魂、ってことわざがあるらしいじゃない？　けど、このことわざはおかしいと思ったの。だって、『五分』っていうのは何かを基準にしないと言えないはずで、多分基準になってるのは人間だと思う。けど、私は人間にも虫にも魂としての差はないと思うのよ。」
「なるほど」
「だから、ここで虫の魂を見つけて、連れてって、人間─とりあえず博麗の巫女あたりに見せつけて、『虫をバカにするなーっ！』って言ってみたいのよ」
「……。んーまぁ、それを仮に見せれたとして、虫の権威回復につながるかは別としてね…」
「で？　虫の魂は？」
「…順をおって説明しようか。」
小町は大きく伸びをした。そして、期待に目を輝かせる少女に向き直った。
「まず、あんたの考えは9割あってる。たしかに、魂に生物による差異は存在しない。人間の魂より虫の魂が小さいなんてこともなければ、まして尊いなんてことは絶対にない。だから、あんたの言う通りそのことわざは間違っている。」
「だがね、1割の間違いがあまりに大きいんだ。」
「？」
「魂と幽霊は違うんだよ。魂とは、生物すべてに等しく宿る、自然を構成する小さな小さなパーツの様なものだ。魂の輪廻は、私たち死神や閻魔様の管轄をはるかに超えた位置に存在する。だから、『虫の魂』は私のところには来ないんだ。」
「なら…ここにいるのは魂じゃなくて幽霊？じゃあ、虫の幽霊は？」
「幽霊っていうのは、『気性の具現』だ。気性─すなわち本人の性質、自我の持ちようを表す存在で、幽霊は最低でも自我がないところからは存在し得ない。つまり、『虫の幽霊』は存在しないから、私のところにはやはり来ようがない。」
「あんたがこの勘違いをしたのは、人間にとって魂と幽霊はほとんど同じようなものだからだ。人間を人間たらしめる最大の要因は、他の動物にはない、確固たる自我だ。自我があるからこそ感情も生まれる。私たち死神の目から見れば、幽霊がそのものの死から発生しうるかどうか─これが、人間と、虫の最大の差なんだよ。」
「…?? じゃあ…やっぱり…虫は人間より劣った存在なの？」
「そんなことは断じてない。さっき言った通り、魂は生物すべてに等しく宿るものだ。この世界を統べる輪廻という存在から見れば、虫も人間も変わらないよ。それに、自我はややもすると輪廻の輪をはずれ、魂としての役割を果たす邪魔になることもあるんだ。まっすぐと、ひたすらに輪廻の輪にしたがって全力で生きる虫は、この視点から見れば人間よりも優れた存在かもしれない。」
「………。」

「ちなみにね、妖怪と呼ばれるまでに力をつけると、ものを考えるようになり、自我を持つ。あんたはすでに幽霊が生まれる状態なんだ。その一方で虫としての自覚、矜持も忘れてはいない。人間にも、虫にも決して持てない魂のありかたをあんたは手に入れてるんだ。そうした状態で自らを省みるのはいずれあんたの糧になるだろう。」
「…うん…。」
　話が途切れると、待っていたように無縁塚に一陣の風が吹いた。草木はもの悲しそうになびき、それにつられるようにそこここで幽霊も漂っていた。
「…いけないね、四季様の説教癖がうつったかな…？　よし、堅苦しい話はここまでにして、この春の話をしてやろうじゃないか！」
「え？」
「私は結構話好きなんだがねえ。幽霊は話しかけても返事がないし、かといってこちらに来るようなやつはたいてい人の話を黙って聞いてくれないんだ。あんたは今、私の話をしっかりと聞いてくれたし、受け答えもしてくれるだろう。こんなに話がいのあるやつはめったにきてくれないからね。それに、あんたもこの春を満足に楽しめなかったみたいだし。あたいがこの春に見た幻想を話せる限りあんたに聞かせてあげるよ！」
「…うん！」

「…と、まぁこんなとこかなぁ…」
　無縁塚を濃い橙の光が照らすころ、小町は今年の春を語り終えた。
「うわー、すっごい面白かった！　そっかぁ…ちょっと残念だな。自分の目で見たかったかも…」
「気にするな。また６０年くらい後に見れるよ。」
「そう…だね。うん、楽しかったし、ためになった！　今日はありがとう！」
「ああ、どういたしまして。…そういえば、あんた、名前は？」
「リグル。リグル・ナイトバグっていうんだ。またね、小町さん！」
「…こんなとこに何度も来るなよ～！」
　お礼を言いつつ遠ざかっていくリグルの声を聞きながら、三途の川の渡しのほうに向きなおる。小町はそこで—ようやく—あることに気づいた。まわりをとりまく幽霊の多さに。そして、もうすぐ夜にもなろうという時間であることに。
「…話し込み過ぎたっ！　急いで戻っ…」
　あわてて渡しへ戻ろうとするも時すでに遅し。もはや、威圧という言葉すら生ぬるい、殺気としか言いようのない気配が小町の体をとらえていた。
「…まさか、説教の直後にサボるとは私も思ってませんでしたが…どうにも不安に感じて戻ってみればこういうことですか…。」

「…ち、ちがいます。ここに自殺をしようと試みに来た虫の妖怪がいましてね。それを引き留めるために延々と説得を」
「もういいです。あなたの言い訳は無視して判決を下します。」
「…お手柔らかに…」
　小町の苦笑はあきらめからか、映姫のむし発言からか—それは誰にもわからない。

　一方、小町と別れたリグルは家路を急いでいた。今日は沢山のことを学んだ。結局、ほとんどわからなかったけど、家に帰ってゆっくり考え直して、明日の自分の糧としよう。虫を率いるものとして、虫の代表として、もっと成長しよう。今のリグルはやる気に満ち溢れていた。高ぶる気持ちを抑えきれずに
「よーしっ頑張るぞー！」
　と叫んだ瞬間
ドーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！
「ぉわぁっ⁉」
　すさまじい轟音を立てて背後に雷が落ちた。ように思えた。
「なっ…」
　振りかえって見てみれば、落雷場所はさっきまで自分がいた場所と大差ない。あと3分飛び立つのが遅ければ、直撃を受けていた可能性があった。
「ひぇぇ…」

リグルは身震いし、これがほんとの虫の知らせなのかな、と思った。

（終）

〈作者コメント〉

一応、前回の続きっぽい感じで書いてみましたが、気づいたらリグル分がありえない少なさになってました…。

みなさんの想像力で、自分を高めようと日々努力するリグルを思い浮かべてください。そのきっかけとなれば幸いです。

次回こそバリバリにリグルがメインなものが書ければいいなぁ…。

雨と蟲の空模様

著者：夏樹　真

八雲紫は、雨空を憂鬱そうな瞳で眺めていた。

そんな主を横目に、八雲藍はせっせと家の家事を進めていく。

今日は雨がずっと降り続けている。お陰で洗濯物は干すことが出来ないし、藍の式である橙も元気がなさそうに隣の部屋でぐだーっと横になっていた。本当ならば、外に遊びに行きたいのだろうが……この雨では、仕方が無かった。

（あぁ、紫様ったら早く布団から出てくれないかなぁ。本当ならそろそろ外で干したいけど、この雨じゃ仕方ないしなぁ。せめてシーツだけても変えないと。そうだ、お昼のご飯は何にしようか。お昼は紫様も食べるだろうから、どうしようか悩むな……うーん、微妙に肌寒いからここは暖かい食べ物の方がいいのか。でも橙が猫舌だから熱すぎるものはダメだし。うむむ）

そんな風に色々と考えていた藍は、紫が立ち上がって傘を持っていたことに気が付くのが遅れてしまった。そして、うーんうーんと悩む藍の頭に、ブンッと振り下ろされた傘が直撃する。

「きゃふぉっ、いきなり何するんですか紫様っ!?」

「貴女が変な顔をしながらうんうんと煩いからよ。自重しなさいな?」

紫に軽く怒られた。

確かにすぐ側で掃除をしながら唸っていたことについては申し訳ないと思うのだが、そこに愛の鞭を入れるのは流石に酷いと思う。ジンジンと叩かれた位置が熱を持っていた。帽子も少しずれてしまっている。

うぅ、と涙目になりつつずれた帽子を直している藍を横目に、紫はスキマと呼ばれる空間への入り口を開いていた。

「あれ、お出かけですか?」

「えぇ。少し、保険をかけてくるわ。今日のお昼には素麺がいいわね。じゃ、そういうことで準備よろしくね、藍」

藍の返事を聞くことも無く、紫はそのままスキマの中へと消えて行く。

一人取り残された藍は、ポツリと呟いた。

「……こんな雨の日に素麺なんて、紫様の我侭は相変わらずだなぁ」

はぁ、とため息をつく。そんな式神の頭上には、スキマから傘を持った腕が伸びていて。

きゃおぅっという、二度目の悲鳴が部屋の中に響き渡った。

その日は、朝から雨が降っていた。
　傘を差しながら、上白沢慧音は里の外れの辺りを歩いていた。その表情には、何処か暗い影があった。原因は、雨による憂鬱さ、だけではなかった。
　今日、これから慧音はある人物と会わなければならない。そして、その人物に里で起こった出来事を報告しなければならなかった。その事が、慧音の気分が沈んでいる最大の原因だった。
　待ち合わせの場所に着く。ここは、昔は農地として利用されていたのだが、今は誰も利用しない空き地となっていた。屋根だけが残っている物置が、寂しさを感じさせる。数年間は放置されているらしく、草は乱雑に生え放題、地面はデコボコとしていて歩きにくいことこの上ない、といったように完全に荒地と化してる。しかも朝から降っている雨により、水を吸った地面は泥となり、歩く際に足をとられないように気をつけねばならなかった。
　荒地であるが故に、この場所はその人物とこっそり会うのには適していた。現に、慧音とその人物はここで定期的に会い、話し合いをしている。里の人に見つかりにくいため、密会の場所としては好都合なのだ。
　周囲を見回してみる。どうやら目的の人物はまだ到着していないようだった。慧音の口から、軽いため息が漏れる。雨が降っているし、少しくらい遅れるのは仕方が無いのかもしれない。
　とりあえず、屋根だけが残っている物置のところへ入り、慧音は傘をたたんだ。もう少し待つようならば、雨を避けれるところで待っていた方が懸命だからだ。幸いなことに、ボロボロにはなっているものの、しっかりと屋根の役割は果たしてくれていた。
　頭の中で、今日話さないといけないことを整理する。その事を考えるだけで、気が重くなった。
　それからしばらくして。遠くから「おーい」という声が聞こえた。
　どうやら、待ち合わせの相手がやってきたようだ。緑色の髪を雨に濡らしながら、少女が走ってくるのが見えた。髪が揺れるのと同時に、頭から生えている触角も忙しなく揺れている。背負っている黒色のマントが、水分を吸って重そうだった。
　少女の名はリグル・ナイトバグ。妖怪の少女にして、蟲達の頂点に立っている存在だ。
　片手を上げて、慧音は所在を示す。リグルにもそれが伝わったのか、慧音の方へ向かって走った。そのまま屋根の下に入ったリグルは、よほど急いできたのか荒い息をしていた。
「大丈夫か、別に私は待ってても構わなかったのだから、もう少しゆっくり来ても良かったのに」
「はぁ、はぁ……そ、そういうわけにもいかないでしょ。待ち合わせに遅刻とか、あんまりしたくないよ」
　肩で息をしながら、リグルは答えた。その言葉に、リグルという少女の性格が現れていた。そして慧音は、リグルのそんなところが好きだったりする。苦笑しながらも、ハンカチをリグルへと差し出す。
「雨が降ってなければ、飛んできたんだけどね……結構強い雨だから、うまく飛べそうに無かったよ」
　幻想郷の妖怪や、一部の妖怪は空を飛ぶことが出来る。もちろん、蛍の妖怪であるリグルも空を飛ぶことが出来た。だが、これだけ雨が強いときに飛ぶというのは、若干無謀な行為である。傘を差しながら飛ぶ、というのは空気抵抗の関係で難しいし、かといって雨に濡れたまま飛ぶと、体調を崩す危険性がある。
　リグルもそれが解っていたから走ってきたらしいのだが、傘も差さずに来たのではあまり差がない気がする。やれやれ、と慧音は内心で苦笑する。
「はぁ、やっぱりチルノたちと遊ぶんじゃ無かったよ。待ち合わせがあるっていうのに、中々帰らせてくれないんだから……」
　ハンカチで顔についている雨の雫をふき取りつつ、リグルが愚痴る。それを聞いて慧音は納得する。チルノたちというのは、リグルがよく一緒に遊んでいるメンバーのことだろう。妖怪や妖精とはいえ、彼女たちはまだ幼い。遊びに気を取られるのは、仕方が無い。

「それで、今日話したい事って何？　私達に関することとなんだろうけど」
「あぁ……そうだな」
　私達、という言葉の意味。
　リグルは蟲達を束ねる王女的な立場にいる。蟲の妖怪が、今現在で確認されているのがリグルくらいしかいない。噂によると地下の方にもいるらしいのだが、地上の方ではリグルくらいしか確認されていない。そして妖怪である為、蟲の世界のパワーバランスで頂点に立つ存在なのだ。
　故に、蟲達にしてみればリグルは王女のような存在として映ってしまうらしい。リグル自身も、それを認識して蟲達の地位向上を目指して、色々と取り組んだりしている。
　最も、妖怪としてはまだまだ幼さが目立つような少女なので、まだまだ甘い所があったり、取り組みが上手くいってなかったりと、苦労しているようだった。
　そんなリグルと、慧音はある取引をしていた。
　その内容は、人達と蟲達の共存を目指していこうじゃないか、といった感じのものである。
　人と蟲は、一見無関係のように見えて、実に深い関係を持っている。
　例えば、慧音の住む里には多くの農家がいる。農家にとって、蟲は切っても切れない関係である。野菜などの受粉を行うのは蟲達の活躍だ。また、作物を荒らす害虫もいるが、それの天敵となる益虫も存在する。良い意味でも悪い意味でも、その関係は深いといえる。
　農家以外でも、周りを見れば蟲達は色んなところで見ることが出来るだろう。空を飛ぶ蝶々や、木々の間に巣を張る蜘蛛、地面を見れば蟻達がせっせと働いているのを見ることが出来る。
　慧音は、リグルに協力してもらうことで、蟲の無益な殺生を防げるのではないか、と考えていた。人に嫌われている蟲というのも、意外と多い。蜂や百足などがそのいい例であろう。それらをリグルからの指示で人里になるべく近づけないようにしてもらったり、受粉を虫達で積極的に行ってもらうようにしていた。そうすることで、双方が不快な思いをしないで済むようになり、相互の関係が良くなるはずであった。
　そんな取引をしているリグルに、慧音は残念な知らせをしなくてはならないのだった。
　少しの間を空けた後、慧音は語りだした。
「先日、里の近くで雀蜂の巣が複数……正確には三つ、発見された。リグル、君にすぐに連絡を取ろうとしたのだが中々見つからなくてな。報告が今日になってしまった」
「え……おかしいな、雀蜂のみんなにはちゃんと注意していたはずなんだけど……」
　リグルの表情に驚きが広がった。やはり知らなかったらしい。知らなかったということは、ここから先の内容は彼女にとってはショックなものになるかもしれない。それでも、慧音は途中で話を止めるわけにはいかない。伝えることを、最後まで伝えなければ、と決意する。
「里の人たちには刺激しないように注意してくれと言っていた。雀蜂の巣が出来ていたのが農地の近くだったのでな。なるべく近づくなといっていたのだが……農家は、農地でなければ仕事が出来ない。そして、最悪の事態になってしまった」
　リグルの顔が、青ざめる。
　慧音は気づかない振りをして、話を続けた。
「農作業をしていた数名が、雀蜂に襲われて……刺されてしまった。幸いなことに、その場ですぐ救急処置が行われ、その後永遠亭の医者に見てもらったために大事には至らなかったのだが……」
　慧音の語尾が、少し弱くなる。リグルから視線を外し、迷うように下を向いた。
　やがて、意を決したようにリグルを見直した。
　そして、告げる。
「その事により、里の意見は一致した。その雀蜂の巣の駆除が、行われてしまったんだ」
「あぁ……そんな……」
「私には、それを止めることが出来なかった。きっと君を見つけることが出来れば、なんとかなったかもしれない。きっと、私がもう少し待ってくれともっと頼み込んでいれば、違

うことになっていたかもしれない。所詮は、結果論だけど、な……」
　慧音の告げた現実に、リグルは自分の肩を両の手で覆うようにして、震える体を抱きしめていた。
　その震える原因は、苦しさからか。悔しさからか。それとも、悲しさからか。それを慧音が知る術は無く、ただリグルの心情を推し量ることしか出来なかった。その事が、無性に心を蝕む。
　リグルにとって、同胞である蟲達を殺されてしまうというのは、耐え難いことに違いない。それは、人で例えるならば、知り合いの一家が突然いなくなるのと同意義だろう。仮に、慧音の側でそんなことが起きようものならば、きっと正気を保てずに犯人を探し出そうとするかもしれない。つまり、そういうことなのだ。
　慧音には、それを告げないという選択肢もあった。そうすれば、今ここでの悲しい顔は見なくて済んだだろうし、もしもリグルが気づかなければ、それは無かったことになっていただろう。慧音が心の中に秘めてさえいれば、問題は無かったかもしれない。
　だが、そんなことは慧音には出来るはずが無かった。隠し事というのも気分が悪いし、何よりそれがどこからかリグルに漏れてしまった場合、二人の仲だけでなく、人と蟲という、より大きなもの関係に亀裂が入る可能性すらあるだろう。蟲との共存の話を持ちかけた慧音としては、それはなんとしても避けなければならない展開だ。
　告げるべきことは、告げた。慧音は、リグルの反応を待っていた。この残酷な告白に対して、この少女はどのような反応をするのだろうか。泣き出すだろうか。軽蔑されるのだろうか。それとも、罵ってくるのだろうか。今は責めてくれたほうが、まだ気が楽だろうな、と慧音は思う。
　だが、その予想は全てが外れた。
　リグルは自身を包んでいた両手を離すと、ただ、寂しそうに笑った。そして、こう言ったのだ。
「あはは、仕方ないよね……仕方ないよ、うん、仕方ない」
　どこか、諦めたかのような表情。その言葉の意味が、慧音には理解し切れなかった。
「仕方ない……だと。仮にもお前は蟲達の王女なんだぞ、仲間が殺されたというのにそれではあまりにも」
「だったら、どうしたらいいっていうんだよ！？」
　リグルの叫びに、慧音の言葉は遮られる。リグルの視線は、慧音の目を捉えていた。そこには、大粒の涙が浮かんでいた。そして、怒りにも似た、悲しみが広がっている。その視線に、慧音の動きは固まってしまった。
「蟲達にとって、生死なんてのは常に隣にあることなんだ。いつどこで、何が起きて死ぬかなんてわからない。慧音達みたいに、人間にとってはそうじゃないかもしれないけど、蟲達の世界では理不尽なことが普通なんだよ。その命は、何かの役に立って、それで死ぬんだよ。仕方ないって、認めてあげるしかないじゃない！」
「それは……でも、今回のは……」
「今回だってそうだよ。雀蜂のみんなには、出来るだけ人里には近づくなって言ってた。君達は人間から見たら恐怖だから、殺されたって文句は言えないよって。でもあの子達は気性が激しいし、自信家なところがあるから、きっと聞いてくれなかったんだと思う。そして、人間達にとって、それは脅威になるって思うよ。生物の本能として、脅威を取り除こうとするのは悪いことじゃないよ、自然界では普通のことだよ。それで殺されたとしても、文句なんか言えないじゃない……それこそ、慧音に悪いよ……」
　その叫びは、慧音の心に強く響いた。
　まだまだ幼いだけの妖怪だと思っていたが、それは慧音の思い込みだったらしい。
　果たして、その小さな体に、いくつもの悲しみを抱えているのだろうか。
　果たして、その幼い心に、どれだけの悔しさを滲ませているのだろうか。
　そして、それらを経たからこそ。少女は、『強さ』と呼べる何かを持ち合わせているのだ。
　純粋に、この子は強いんだな、と慧音は思

う。私が持ち合わせていない覚悟を、持っているのだから。
「……すまなかった。今回の件とは別に、謝るよ。君は、強いな」
「強くなんか無いよ……いつだって、みんなを守ってあげたいのに、守れないんだよ……」
「その覚悟が、強さだ。そんな君だからこそ、蟲達は君を慕い、君について来るんだ。もっと胸を張るといい。君は、紛れも無く蟲達の王女なのだから」
「慧音……」
リグルの瞳から、ついに涙が零れ落ちる。恐らくは、辛かったのだろう。今回の件で、もしかしたら他の出来事も思い出してしまっていたのかもしれない。
そんな少女を、慧音は優しく抱きしめる。身長差から、リグルの顔は慧音の胸に埋まる感じになる。その頭を撫でながら、優しい声で子供に諭すように話しかける。
「たがな、辛いときは泣いてもいいんだ。私は、君の味方でありたい。リグルの悩みを解決できるなんてことは思ってはいないが、こうやって話を聞いてやることも出来る。泣きたいときは、胸を貸してやることも出来る」
「えっと、あの……」
「だからこそ、もう一度お願いしたい。改めて、人と蟲の共存関係を強めていきたいと。リグル、君ならそれが出来る。君じゃなければ、出来ないと思う」
「なんだか褒められすぎてる気がするんだけど……」
リグルはまだ涙を瞳にためながらも、顔を赤くしていく。恥ずかしさと嬉しさが混ざったような、そんに笑顔が浮かんでいた。
まだまだどこか頼りなさは感じるが、それでもこの子ならばうまくやっていくだろう。そんな思いが慧音の中にはあった。リグルが成長していけば、きっとこの幻想郷はより良い世界になる。そんな、期待。
ふっと、慧音がリグルから離れた。そして、何も無いはずの空間を見つめ、目つきを鋭くする。リグルはきょとんとした表情で、そんな慧音を見つめていた。
「……立ち聞きとは、趣味が悪いな。出てきてもらおうか」
「あらあら、お邪魔しちゃったかしらね?」
何も無いはずの空間から、突然響いた声。
その声が合図といわんばかりに、突然空間が裂けた。それは『スキマ』と呼ばれるもので、この幻想郷において、ただ一人のみが使える能力である。その中から、傘がひょいっと現れる。続けて、その中から慧音と年が近いような女性が現れた。毛先にかけてウェーブのかかった金髪ブロンド、そして少し不思議な形をした帽子。まるで自宅でのラフな格好のような、胸元の大きく開いた紫色のワンピースからは、その女性的な立派なものが良く見て取れる。
彼女の名は、八雲紫。この幻想郷に住まう妖怪ならば、誰もが一度は聞いたことのある名前だろう。つまり、大妖怪であった。それだけ強大な力を持つ、いわば大妖怪、ということでも有名だ。そして、性格が胡散臭い、ということでも有名だ。
何故こんなところに、こんなヤツが現れたのか。慧音はリグルを隠すように前に立つ。相手の狙いが分からない以上、迂闊に動くわけにはいかない。
「あらあら、そんなに警戒することはないでしょうに。信頼されてないのね」
「貴様の口が言うか、そんなことを。何の用だ、特に用事が無いのなら帰ってもらいたいところなんだが」
うふふ、と紫は笑うだけで、そのまま近づいてくる。
ちぃ、どうしたものか。慧音と紫では、実力に差があった。悔しいことではあるのだが、慧音では紫に勝つというのは不可能だろう。なんとか、この場を凌げればいいのだが。
そんな慧音の思考を察したのか、紫はクスクスと口元を隠しながら笑った。
「何を警戒しているのかしらねぇ。血の気が早すぎるんじゃないかしら、ハクタクさん?」
「煩い。貴様が何を考えているのか分からない以上、警戒するに越したことはないだろう」
「じゃあ答えてあげるわ。今日用事があるのは、貴方じゃなくて……」
その瞬間、慧音の視界から紫の姿が消え

る。何処に消えたのかと辺りを見回そうとして、後ろから声が聞こえた。
「こっちの、幼き蟲の王女様なのよ。だから、貴方は少し黙っていてくれると嬉しいのだけれど?」
「ちぃっ」
振り返ったときには、紫の腕の中にリグルがいた。慧音のすぐ後ろに立っていたはずなのだが、いつの間にか数メートル離れた位置に二人はたっていた。すぐにでもリグルの元へ駆けつけたかったが、紫の手中にある以上、迂闊に動くわけには行かなかった。いくらなんでも無意味に傷付けるようなことはしないだろうが、あの紫である。慧音の口元に、悔しさが浮かんでいた。
それを確認して、紫は慧音から視線を移し、リグルの方へと向く。当のリグルはというと、突然の出来事に頭が付いていってないのか、完全に固まってしまっていた。
「さて、ハクタクも大人しくしてくれるみたいだし。さっさと要件を済ませてしまおうかしら」
「え、あの……用件、って?」
搾り出すようにして答えた声。それでもちゃんとした反応があったことが嬉しかったのか、満足したように紫は微笑みながら言葉を続けた。
「貴女に伝えたいことは、警告と助言よ。今年の蟲達は、例年以上に力をつけているわ。それについては、貴女も、そこのハクタクも感じたでしょう。話を聞いてくれない、雀蜂という形でね」
「あの子達……やっぱり、そうなんだ」
「そう、貴女も薄々感じてはいたのね。蟲達の異常を」
「感じないわけが無いよ……」
紫の話をまとめると。どうやら今年の蟲達はいつも以上に力が強いらしい。それによりにより自意識過剰、とでもいうのだろうか。リグルの言葉を無視している蟲が出てきている、という状況らしい。慧音にはそんなことは分からないが、蟲達を纏めるリグルと、何故か紫はそれに気づいている、ということらしい。
疎外感を感じつつも、話の内容が気になる。慧音はそのまま紫の話に対して耳を傾ける。
「なら、話は早いわ。今のが、警告。今の貴女は、この事態に対してどう対処していいのか悩んでいるのではなくて?」
「それは……」
「未曾有の事態に遭遇し、困ること、悩むことは恥ずべきことではないわ。むしろ、その事態に対して何ら対策を講じないことこそが最大の罪なの。」
「私は……何とかしたい、このままだとみんなはどんどん私の言うことを聞かなくなってしまう。でも、どうしたらいいのかが私には分からないんだ……!」
どうやら、リグルはこの事態に対してどうしたらいいのかを迷っているようだった。迷っているというよりは、どう対処したらいいのかわからないといのだろう。
リグルの表情には、焦りが見えて取れる。それは仕方の無いことなのかもしれない。今までは頂点として、蟲達を操っていたのに、急にそれを聞かない蟲が現実に現れ始めているのである。どうしたらいいのかと思うだろう。まだ幼い彼女には、その対策方法が分からないのだ。
ギリッと、慧音の奥歯に力が入る。身近に感じていたはずの少女の、そんな不安を感じ取ってやることが出来なかった自分が情けない。そして、あのスキマ妖怪の方が自分よりもリグルの事情を理解していたという事実が、何故か余計に感情を逆撫でていた。
「では、これは助言よ。あなたは今までの様に、普段どおり蟲達と接しなさい」
「でもそれじゃ……」
「但し。いつもより強い口調、態度で接しなさい。どちらが上なのかを、思い知らせるのよ。そうすれば、蟲は自ずと本能で悟り、貴女に従うわ」
部下に舐められた時。上の立場の者がどうすればいいか。
答えは簡単である。実力を示し、どちらが上なのかをはっきりと思い知らせてやればいいのだ。
これが人間や妖怪の話だと、様々な感情が混ざり合ってややこしい事になってしまう。だが、蟲や動物にはそんなことは無い。本能

で活動する生物にとって、実力差というものはそれだけで絶対的な差となるのだ。
　つまり、今回の場合。リグルが毅然とした態度で蟲達に接し、その実力差をわからせてやればそれで解決しそうな問題だったのだ。
　ただ、もう一つ問題なのは。
「ま、私はあくまで助言をするだけ。これを聞いて、あなたがどう行動するのか。期待させてもらうわよ?」
「……うん。善処は、するよ」
「そう。それを聞けたのなら、今回は満足としましょうかしらね」
　リグルの返事に満足したのか、紫は少しずつ後ろに下がっていく。
　数メートル離れ、屋根から出ようかというところで、そのまま姿を隙間の中へと滑り込ませていった。時間にして、一秒に満たない刹那に、紫の姿は消えてしまった。
　まったく、迷惑な妖怪である。言いたいことだけ言って、勝手に満足して帰ってしまったのだから。
　ふぅ、と慧音は軽いため息と共に緊張を解いた。その声にあわせるように、リグルも緊張を解いたようだった。あちらからもため息が聞こえた。
「嵐の様にやってきたな、あいつは。まぁそれは兎も角として、大丈夫だったか?」
「うん、一応は心配してくれてるみたいだったし。ちょっと怖かったけど」
　あはは、と軽い笑いを浮かべる。だが、次にはリグルの表情は真剣になっていた。
「問題なのは、私の態度と意気込みってことだよね……きっと」
「……まぁ、そうなのかもしれないが」
　思い悩みながらも、リグルは強い態度で挑もうとしているようだった。
　それ自体は、悪いことではない。悪いことではないのだが、慧音の胸に沸いた不安は、消え去らない。
　慧音が抱いた、もう一つの問題。それは、果たしてリグルが家族と思っていると言っても過言ではない蟲達に対して、どこまで強気になれるかという点であった。
　もちろん、しっかりと毅然とした態度を取れれば、蟲達は改めて従うだろう。だが、もしそういった態度を取ろうとして失敗し、逆に舐められてしまったら。それは、取り返しの付かないことになる可能性も孕んでいると言えた。
　後はもう、見守るしかない、のだろうか。
「だが、無理だけはするなよ。いつでも相談してもらって構わないのだからな。可能な限り、協力するぞ」
「うん、ありがと、慧音。頼りにさせてもらうよ!」
　リグルの、満面の笑み。その裏に隠されているのは、安心か。それとも、不安か。
　それを慧音が知る由は無い。だからこそ、この小さな蟲の王女を信じるしかなかった。
　手をリグルの頭に乗せる。くすぐったそうにしていたが、それを気にせずそのまま撫でてやった。こうすることで、少しでも少女の中の不安を取り除ければ。そう願いながら。
　――――幻想郷の夏は、これからが本番だった。

＊＊＊＊＊＊

　机の上に、お昼ご飯の支度を進めていく。
　藍は、紫が言ったように素麺を準備していた。ちゃんと準備しておかないと、また傘で叩かれてしまうからである。まったく、式神使いの荒い主である。
「浸ける用の汁も準備したし、合わせの野菜も完璧。これならば紫様も満足されるだろう」
　うんうん、と笑みを浮かべる。いきなり素麺がいい、だなんて言われたものだからどうしようかと思ったのだが、案外準備してみれば何とかなるものらしい。汁は保存用のがまだ使えるみたいだし、野菜も胡瓜に葱を準備できた。更に彩を加えるために出し巻き卵を細切りにしたものも作った。短時間でこれならば、悪くない出来といえるだろう。
　紫がいつ帰ってくるのかが分からないのが心配ではあるが、帰りが遅くなるということは良くあることなので先に橙と食べていようか。藍がそう考え、橙を呼びに行こうとした時。突然空間が裂け、そのスキマから紫が帰っ

てきた。
「おや、お早い帰りでしたね。お昼ご飯の準備は出来ていますよ」
「そう。ご苦労様」
　一言だけ、労いの言葉をかけられる。
　それだけの紫の言葉が、藍には妙に嬉しかったりする。
「そういえば、紫様は何の保険を掛けにいかれたのですか?」
「貴女もあの白沢と同じで気づいていないのね。まぁそれについてはそのうち解るはずよ」
「はぁ……そういうものなのでしたら、あまり気にしないようにはしますが」
「ただ、保険としての可能性としては、ほぼ零割に近いといった感じかしらね」
「って、それは保険としての機能を為していないのでは……」
　ほぼ零割、ということはつまり、意味が無いということと同意義である。
　主が、その様な意味の無いことをするとは思えないのだが、それでも藍にはその行為の意味がわからなかった。ただの徒労ではないのか、そんな事は。
　それを表情から察したのか、紫は微笑みながら言葉を発した。
「何もしないのと、何かを為すというのは別物よ。例え、同じ結末を迎えるとしても、その過程が変わってくるわ。それだけで、意味が生まれるものよ」
「うーむ、そういうものなのでしょうか。私には理解しかねますが」
「ふふ、その辺の風情をもう少し楽しめるようになれば、あなたも人生がより楽しくなるわよ?」
「あはは、精進させて頂きます」
　結局、紫が何の保険を掛けに行ったのかは、不明なままだった。
　だがそれでもいいと藍は思っていた。主がいずれ解ると言うのならば、それを無理して今知る必要は無い。それくらいには、主のことを信頼しているのだから。
「さて、それでは橙を呼んできますね。揃ったらご飯にしましょう」
「えぇ、よろしく……って、藍、あれがないわよ」
「あれとは……?」
「素麺といえば山葵に決まってるじゃないの。山葵の摩り下ろしが見当たらないわ」
　しまった、と思ったときには遅かった。
　目の前には、紫の引きつった笑顔と、その右手の傘。
　藍は乾いた笑みを浮かべる。そして、視線で懇願した。ごめんなさい、と。
　それに対する、紫の返答は――――
　きゃうぅっという、藍の本日三度目の悲鳴が、八雲の家に響き渡った。

（終）

〈作者コメント〉
　どうも、夏樹 真です。今回もリグル以外の視点に挑戦させてもらいました。でも話の中心はリグルですよ！　今回も短期間で書いてしまったので粗が多いかとは思いますが、宜しければ楽しんでくださいませー。あと、多分続編があるかもです。落とさなければ！
　それでは、お粗末さまでした。

Batesian Mimicry

by やにたま

…と言う訳で、群雄割拠の幻想郷で生き残らんが為、

この私も同胞達を見習って…

何故か裸

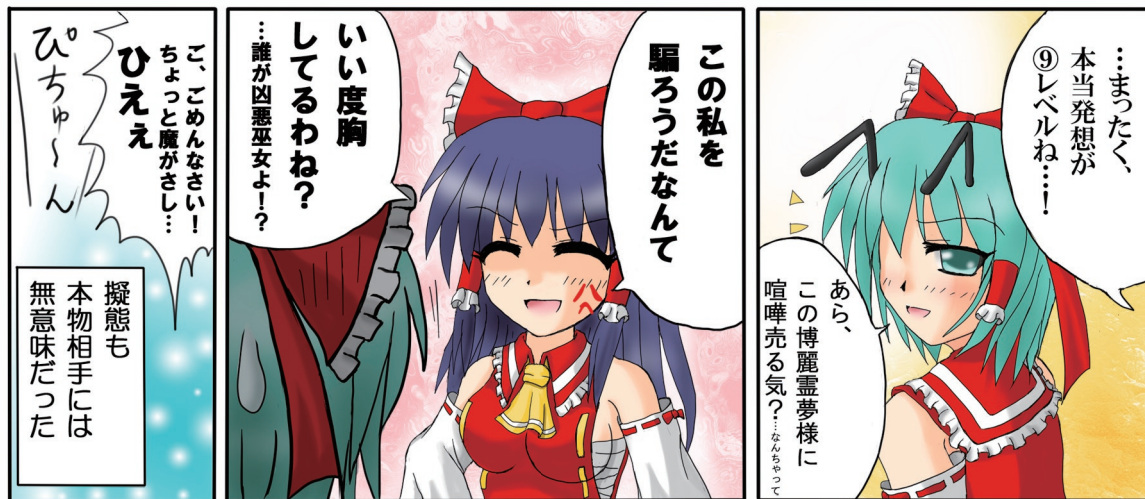
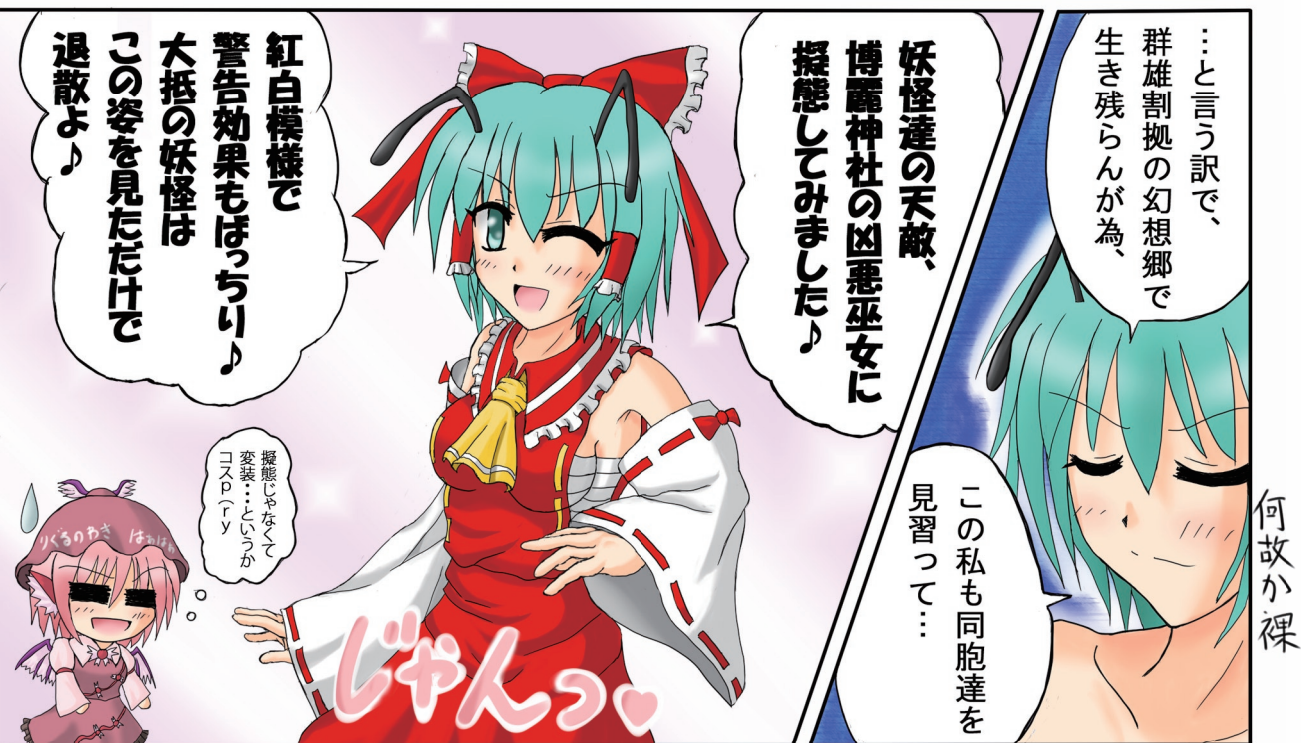
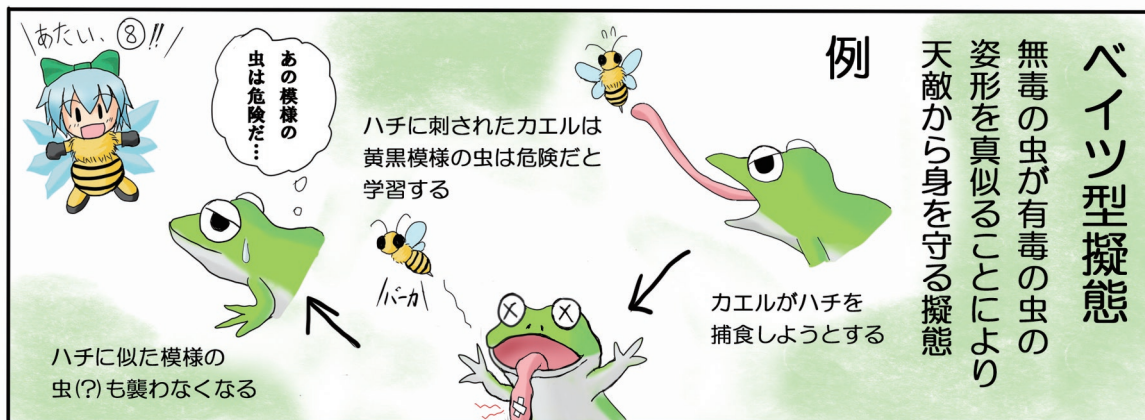
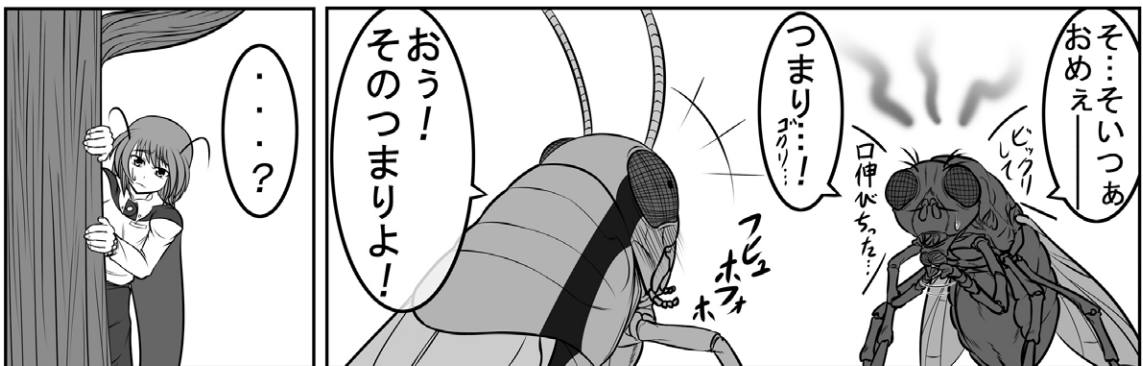
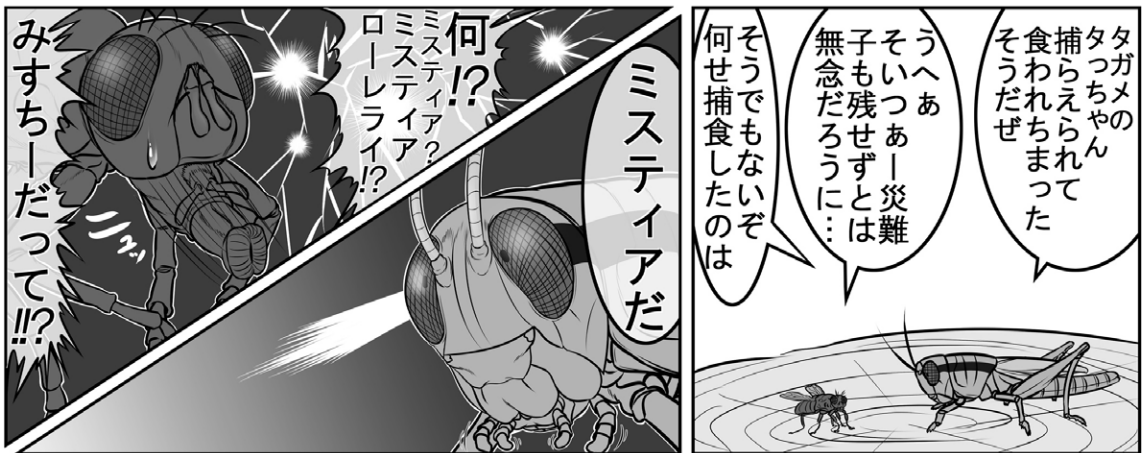
妖怪達の天敵、博麗神社の凶悪巫女に擬態してみました♪

紅白模様で警告効果もばっちり♪大抵の妖怪はこの姿を見ただけで退散よ♪

じゃんっ♥

擬態じゃなくて変装…というかコスp(ry

Title:友蟲部　kaitayarou:言示弄

タガメ：調理しだいでおいしく食えるらしい

イナゴ：食える。　でもいきなり目の前で踊り食いするのはやめてくれ。　吃驚したわ。
（バッタじゃないよ！）

ハエ：口（吻管）が伸びるらしい

あの愛らしい
掌に捕らえられ
唇をくぐり…
舌の上で弄ばれ

君のためなら
死ねるwww
食wわwれwwww萌wえw
――キモくないよ?
蟲自体はね?
あれは…ほら
個々の性格が問題な
だけ…で…さ…

わかってないいね
あいつらは…

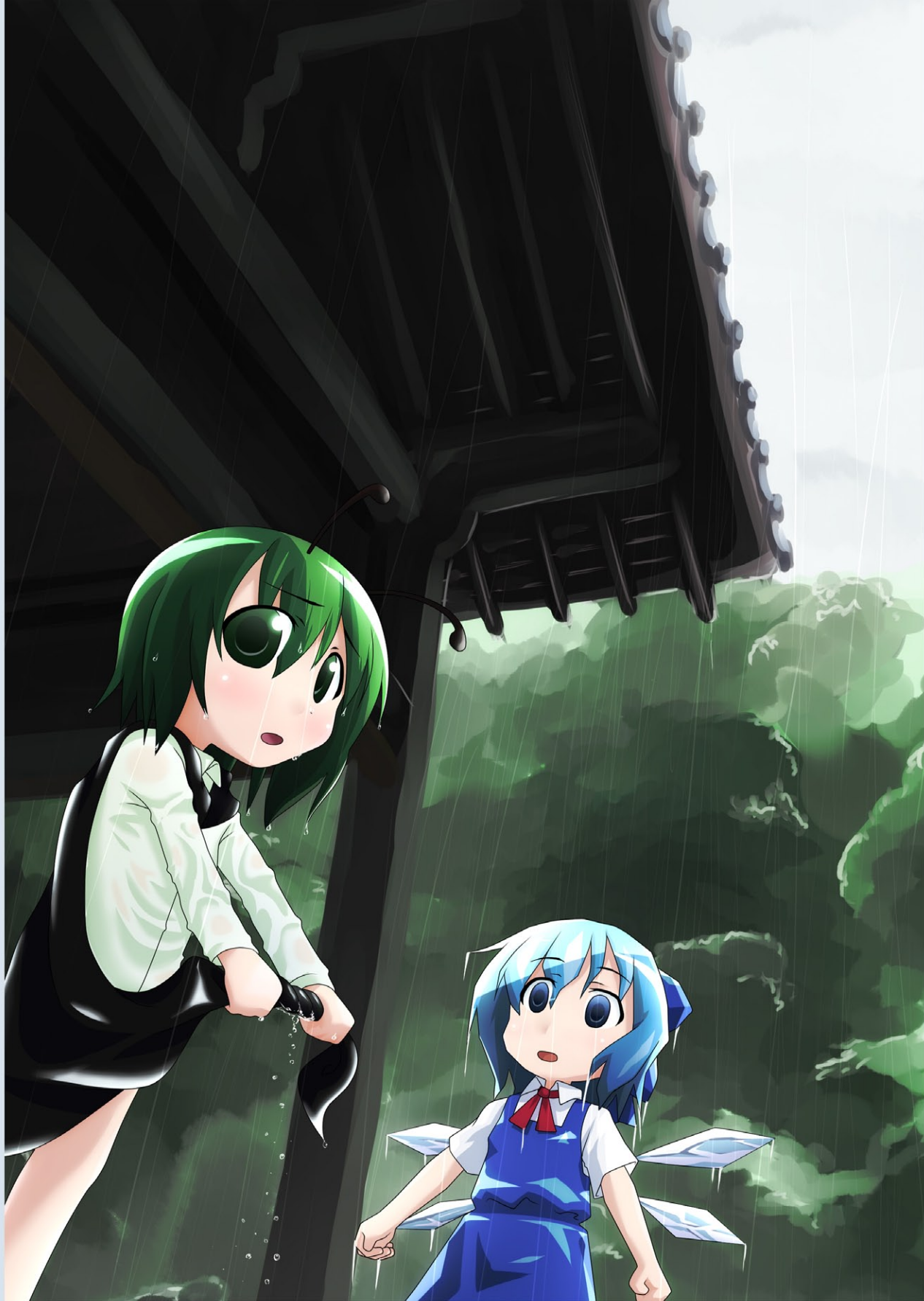
食われるなら
橙ちゃんだろ普通

ばっかおまえ
お燐ちゃんだろ
常識的に考えて

俺ちょっと
ヤマメたんに
食われてくるわノシ

ここまで
藍様なし

※彼女の体内から（で）分泌された液体:消化液　※ミスティアと一つに:栄養として吸収される的な意味で　※圧死厨:圧死フェチみたいなもんかな

- 草葉
- くうりん
- むつのかみ　よしゆき
- しゃき・しゃき
- 緑
- アルフィア
- 凡用人型兵器
- ara
- lube

▶ 虫にとって雨は命を脅かす災害であり恵みでもある。そしてチルノは凍る

蠢符「ナイトバグトルネード」

永夜抄のスペルカードをイメージして描いてみました。
リグルって一面ボスって扱いですけど、ラストワードとか十分強力ですよね。
ところで、僕が描くリグルには白ニーソは似合わないらしいです。くっ・・・。

むつのかみ　よしゆき

＊リグルくんのきょうれつなこぶし!!

Wriggle Nightbug

Glowfly's apparition

てやーく

ドゴォ!!

▶ 今回は手描きで頑張ってみました。初心に戻ったつもりで頑張ってます。
リグルは肉弾戦のイメージが付いてて困ります(弾幕綺麗なのにねw)

蛍ってとても弱い虫だけど、どこか力強さを感じます。
最近は見ていませんが、もう少しで蛍が出てくる季節でしょうか？
蛍を見に遠出するのも風情かもしれませんね。

▶ きっとこの二人は凄く仲が良いと思います。少し男の子っぽいけど、それがいいのです。
どなたかリグルは男の子派だと言う私と同志の方はおりませんかー？

▶ どうも初めまして。アルフィアといいます。面白そうな企画でしたので参加させていただきました。
実はこの企画に気づいたのは創刊号発行日でしたorz
いまだにリグルのLastWordが取れない・・・（TT
お目汚し失礼しましたー。

○月×日
かねてより性別不詳の呼び声高いリグル・ナイトバグへ突撃取材を行った。
頭悪そうにボケっとしているところを背後より急襲、触診を試みる。
胸……あるようなないような気がした。よく分からない。
下半身……激しく抵抗されたため、よく分からない。
本日の取材は残念ながら失敗に終わった。
どうせすぐに忘れるだろうから、警戒を解いたころにもう一度試みよう。
少し我慢すれば一回で終わるのに、こういうところが頭悪いのだと思う。
まあ、恥ずかしがっているのが可愛かったから、これはこれで良しとする。

▶ 描いている途中、チャットで知人に技術指導を求めたところ、「へそがえろくない」という批評をいただきました。
そういうことを聞きたいんじゃない。

▶ リグルの露出を高めようとしたものの結局着せてます。へそ〜

▶ まさかの当日着手・・・何とか間に合ってよかったです。6月号なので雨をイメージしてみました。

蟲の願事

著者：社 蛍夜

幻想郷のどこかの森にあるリグルの家にチルノ、大妖精、ルーミア、ミスティアの４人が集まっていた。
　集まったと言うよりは探しに来たと言うべきだろうか。
　リグルの姿が見えず探していたら家の前でリグルが熱を出して倒れていたのだ。

※※※

「まさか、まだ寝てたりしないわよね」
　第一発見者はチルノだった。
　家の前に行くと、玄関前にリグルが倒れていた。
　どんな人（この場合妖精か）でも、このような状況に出会えば異常なのはすぐ分かる。
「ッ・・・!!」
　チルノはすぐに駆け寄りうつ伏せになっていたリグルを起こし、壁にもたれ掛からせた。
　そして、肩を揺すりながら声を掛ける。
「ちょっと!?　リグル!?　生きてる!?」
「う・・・いきなり「生きてる?」は酷いよ」
　リグルが返事をして安心したのか手を離す。
「よかった・・・何事かと思ったわよ。一体何があったの?」
「え・・・そういえば・・・・・何でだ?」
「・・・え?」
「いや、っと・・・覚えてない、ね」
　その言葉にチルノは開いた口が閉まらないようだ。
　少し間が開いてチルノが尋ねる。
「・・・本気?」
「・・・うん」
「・・・覚えてることは?」
「昨日、チルノ達と遊んで家の前に着くまでかな?」
「で、倒れてた理由が」
「きれいさっぱり」
　チルノが頭を抱えた。
　珍しい光景な気はするが、チルノは本気だ。
　そんな事をやっていたらチルノはある事に気づいた
「あれ?リグル、顔赤いよ」
「え?　そう?」
「うん。熱出てんじゃないかな?」
「でも普通に歩けるし、フラフラしたりもないよ」
　そういうと、大丈夫と言わんばかりに立ち上がり、普通に動けることをアピールした。が、顔は赤いままだ。
　よく見れば、表情が少しトロンとしているようにも見える。
「とりあえず熱がないか触るわよ」
　そうして、チルノがリグルの額を触る

※※※

そして今に至る。
今はリグルが布団で寝ていてそれを皆で囲んでいる。
「・・・さて」
少々疲れた感じに溜息を吐きながらチルノが切り出した。
「姿が見えないから探してみたら・・・風邪のようね」
リグルは、皆に少しながら看病してもらったが、相変わらずだ。
それに、熱が出ているのだ、頭にはチルノの氷で作られた氷のうがのせられている。
「・・・チルノ、手は大丈夫?」
「ん？　あぁ」
先ほどのチルノがリグルの額を触った時の事だ。
リグルはかなりの熱が出ていた。
そこを「氷の妖精」が触ったのだ、すぐに離したから良かったのか、軽い火傷程度で治まっていた。
その手を『プラプラ』という擬音が合う揺らし方をしながら喋る。
「まぁ、この程度ならもう平気ね。すぐ冷したから何も問題無いわ。それよりしっかり寝なさいよ」
「そうだよ、チルノちゃんが来た時はリグルちゃん倒れてたんだから、ちゃんと寝てなきゃ」
「そうね。でもまずは栄養を取るのが先よ。はい差入の鰻の蒲焼き」
「そーなのだー」
皆に次々と言われたリグルは、
「あはは・・・皆に言われちゃあ、おとなしくしてないといけないね」
苦笑いしながら返事をした。
そんな時ミスティアが
「にしても、珍しいわよね」
「何が？」
チルノが返しにミスティアが呆れながら答える。
「『何が』って、リグルの熱に決まってんでしょうが。妖怪や妖精の私達が風邪をひく事自体珍しいのに今回のリグルの熱は異常なんじゃないかな？　大ちゃんはどう思う？」
急に振られた大妖精は、少し驚きながらも答える。
「そう言われれば確かにそうかもしれないけど・・・ほら、昨日かなり遊んで疲れてたじゃない、それで風邪をひいたんじゃないかな？
最近熱が出るだけの風邪が逸ってるそうだし」
「っていうかあたい達って今まで風邪にかかった事が無かったわよね。ある意味そっちのが不思議に感じるわ」
その言葉に大妖精が思いつく。
「あぁ、それで急に熱を出したのが気になったりしたんじゃない？　今まで無かったから少し違和感を感じるだけだよ」
「まぁ、妖精妖怪が風邪をひかないとかいうわけじゃないけど、昨日元気に遊んでたし少し気になって・・・」
「そーなのかー」
そんな会話を聞いていたリグルは
「皆ありがと。大丈夫、一日寝ればすぐ治るよ」
と、皆に精一杯の笑顔で言った。
その顔は安心してほしいと言ってるように見えた。
だが、ミスティアは何かが引っ掛かった感じがしていた。
「ん・・・ならいいんだけど」
「大丈夫。風邪をひいた本人がそう言ってるんだから、あたい達はその言葉を信じて待ちましょ」
「それにリグルの風邪が誰かに移ったらそれこそリグルに悪いわよ」
不安がるミスティアをチルノと大妖精がなだめた。
「ん、まぁ・・・そうね。リグル、何かあったら虫でもよこして呼ぶのよ」
「うん、分かったよ」
会話が終わりチルノ達はリグルに安静にするよう言いながら出ていった。
それを布団の中から見送ったリグルは
「さて、明日元気に皆と遊べるように今は眠ろう」
そう自分に言い聞かせるかのように呟くと、目を閉じた。

※※※

チルノ達はリグルの家を後にした。
ミスティアはリグルに感じた違和感が未だ晴れず、考えながら歩いてるのか３人より少し後ろだ。
そんなミスティアが、急に喉にあった魚の骨が取れたかのような表情に変わると、少々興奮気味に言い出した。
「そうか！　分かったわ！」
チルノが後ろからした大きな声に驚きミスティアの方を向く。
「なっ・何よ？」
「リグルの具合いについてよ！」
「「「ッ！⁉」」」
その言葉に反応し、他の２人も反応してミスティアへと振り向く。
ミスティアは続ける。
「リグルは・・・

（終）

〈作者コメント〉
お久しぶりです。初めての方は、初めまして。社　蛍夜と申します。
「あれ？こんな人いたっけ？」的な方
決して創刊号を見返してはいけません。てかマジヤメテクダサイ。
今回のｓｓ（と言っていいのか？）はプロローグです。一応続く形です。
一応ですよ。（大切な事なので二回いいます）
もし、次回投稿がなければ暖かい目で見守らずに、読者の方々で脳内補完してください。
最後に
小崎様及びリグル好きの皆様に感謝。

お天道虫様は知っている

著者：ヘルバナナ狸地

「どうすればいいのかなあ…」

　リグルは悩んでいた

「ねえ、メディ。虫の地位を向上させる為にはどうすればいいのかなあ？」

「そんなこと私に聞かれても…」

　リグルが悩んでるせいでメディスンは困っていた

「じゃあ譲歩して私が好かれるためにはどうすればいいか」

「それって譲歩なの…？むしろ難しくなった気がするんだけど」

「う…うるさいな！虫全体より私一人の方が簡単でしょ！」

「その理屈は置いといて、私知り合いとかあまりいないよ。そんな私じゃ人に好かれるにはどうすればいいかなんてアドバイスしても意味ないんじゃないかなー？」

「え、そうなの？」

　何の根拠も無くメディスンは回りからそれなりに好かれてると思い込んでいたリグルは予想外の事実に目を丸くして驚いた

「そうだよ。私の知り合いっていったら永遠亭の人達と…あと幽香さんと…あと…あと…あと…」

「ど…どうしたの？」

「あと…あと…あと…」

　どうやらメディスンの地雷を踏んでしまったらしい

「もういいよ！それ以上はいいよ！」

「あと…う…うぅぁぁぁぁっ！」

　ついにメディスンが絶叫し始めた

　自分は知り合いが少ない

　あまり気付きたくない現実である

「うわぁぁぁぁ！いいよ、いいよ！私にはスーさんがいるもの！回りがなんと思ってたってぇぇ！」

「こうなったら…ごめんメディ！」

「スーさぁぁぁぁぁぎゅぅぁ！」

　絶叫するメディスンの首筋に炸裂した必殺のリグルキック

　メディスンはリグルキックに耐え切れずその場に倒れ込み動かなくなった

　蹴られたのが普通の人間だったら死んでいたんじゃないだろうか

　もっとも、リグルとて普通の人間の首筋にキックを喰らわせたりはしないだろうが

「ごめん…えーと…人の価値は友達の数だけじゃ決まらないよ！」

人に好かれる為にはどうすればいいかを聞いていた人、もとい妖怪の言うことじゃない

「さて…メディは気絶しちゃったし…」

　気絶させたのはリグルだが

「誰かに聞きに行かなきゃな。聞くならみんなから好かれてる人だよね。みんなから好かれてるっていうと…やっぱり霊夢かなあ」

　博麗神社には吸血鬼からスキマ妖怪に魔法使い、その他諸々いろんな者が訪れる

　人から妖怪から種族問わず集まるのは霊夢が回りから好かれているからだろう

　回りから好かれている者として、これ以上

の人材もいない
「うーん…でもメディを放っておくの不安だなあ。こういうときは…」
　リグルは数匹の虫を呼び寄せ伝言を持たせ幽香の元へ飛ばせた
「幽香さんに頼んでおけば平気だよね」
　虫が途中で鳥に食べられたり、人間に捕まったりせず、無事に幽香の元へ辿り着ければ。の話だが
「よし…じゃあ博麗神社に行こう！」
　こうしてリグルは倒れたメディスンを置き去りにして博麗神社へと向かっていった

◆　◇

「今日も平和ねえ…」
　霊夢は境内の掃除を終え、縁側に寝転んで暇を持て余していた
「平和なのはいいけど、暇なのは困りものねえ…」
　霊夢があまりの暇度に『紫のスキマの中に見える目は一体誰の目なのか』というしょうもない事ここに極まれりというような事を考えだしたその時玄関を叩く音がした
「霊夢ー！いるー！？」
「はいはい、いるわよー。まったく…めんどくさいわね」
　だるそうに起き上がり玄関に向かっていく霊夢
「にしても、一体誰かしら、わざわざ玄関から入ってくる奴なんて滅多にいないのに。まあ、どうせ神社の参拝客じゃないんだろうけど」
　霊夢自身が参拝客の可能性を否定してしまうあたりからいかに参拝客が少ないのかがわかる
「どちら様ですか、っと」
「あ、おはよう霊夢ー」
　戸を開けた先に立っていたのはリグル・ナイトバグだった
「はぁ…」
　ーーパシン！
　思わず頭を叩いてしまった
「い…痛い！なんで殴られたのー！」
「あー、気にしなくていいわ。ところで何の用よ？」
　いきなり叩いておいて気にするなというのも無茶苦茶な話だ
「え？あ…ああそうだ」
「まあ、いいわ。どうせ暇だし、上がりなさいよ」
「じゃあお言葉に甘えておジャマします」
「お茶出してあげるから縁側で待ってなさい。ちなみに縁側はあっちね」
　霊夢は縁側がある方向を指差してみせた
「あ、お茶煎れるの手伝うよ」
「あー、いいわよ。あんたはさっさと縁側に行ってなさい」
　霊夢は手をプラプラさせながら台所の方へと歩いて行った
「やっぱりみんなから好かれてるだけあっていい人だなあ」
　リグルは霊夢の優しさに小さな感動を覚えながら縁側へと行くことにした

◆　◇

　リグルが縁側でごろごろしながら待つこと10分
　霊夢がお茶とドラ焼き二人分をお盆に乗せてやってきた
「はい、お茶。あとドラ焼きもあるけど、あんたドラ焼き食べられる？」
「どうもー。甘いものは大好物だよ！」
「そう、じゃあ一個あげるわ」
　お盆に乗っていたドラ焼きの一つを手渡す霊夢
「あ、ありがとう」
　リグルが手渡されたドラ焼きを食べ終えると霊夢がお茶を飲みながら聞いた
「で、結局何しに来たのよあんた」
「あ、そうだった。私が今日来た理由は…」
「ちなみに虫の知らせサービスの勧誘なら間に合ってるわよ」
「あれはわざわざ勧誘してまでやらないよ。私が何も言わなくても依頼が来るようにならなきゃ、虫が必要とされるようになったとは言えないもの」
「ふぅん…勧誘無しでも必要とされるようになるとは、また随分高い目標ね。で、実際のところ、勧誘無しでどれくらい依頼されるのよ？」
「う…、そ…それは今日は関係無いから置いとこうよ！」

実際のところ、虫の知らせサービスの評判はあまりよくはなかった
「虫の知らせサービスの勧誘じゃないならなによ？」
「霊夢はみんなから好かれてるけど、なんでそんなに好かれてるのか知りたくて、それを聞きに来たの」
「はあ？知らないわよそんなの。どいつもこいつも人の家で騒ぐだけ騒いで片付けやしないし、賽銭だって入れやしない。正直迷惑なくらいだわ」
「えぇー…」
幻想郷一好かれている巫女はどうやら無意識で好かれているらしい
わざわざ作戦を立ててまで好かれようとするリグルとは器の段階からケタが違う
「えっと…えっと…でも何かあるでしょ？たとえば…こんなことしてから回りに人が増えたとかさ！」
「あー、うちに来るのは大概、異変解決しに行ったときに会ったやつらね。参拝客は滅多に来ないし。レミリアにしろ、幽々子にしろ、あんたにしてもそうじゃない」
異変解決などリグルの力ではどうあがいても出来るはずがない
そもそもそんなにいつもいつも異変が起きているわけでもない
つまり霊夢と同じようなやり方で好かれるのは無理ということだ
「そんなあ…やっぱり私がみんなから好かれるなんて無理なのかな…みんな…リーダーがこんな頼りない蛍でごめんね…！」
現実を突き付けられたリグルの落ち込みようは、霊夢に罪悪感を抱かせる程だった
「あー、何？あんたは回りから好かれたいの？」
「う…うん…」
「なら…確か魔理沙が忘れてった本に役に立ちそうなのがあったような気がするから、それを持ってくるわ」
それを聞いた途端、この世の終わりが来たのかと言わんばかりにどんよりとしていたリグルの顔がパッと明るくなった
まだ好かれる可能性が0ではないのが嬉しいのだろう
「じゃあちょっと待ってなさい」
霊夢はそう言い残し縁側から姿を消した
縁側に取り残されたリグルはつぶやく
「無意識のうちに回りに好かれてるなんて…うらやましいな」
お茶は少しぬるくなっていた

◆　◇

「あったあった。これが実際にあんたの役に立つかまでは保証できないけどね」
霊夢が本を持って戻って来るのに5分とかからなかった。魔理沙がその本を忘れていったのは最近のことなのだろう
「えーっと、これは何なの？」
「持ってきたときに魔理沙が説明してたけど…興味がなかったからよく覚えてないわ。とりあえず外の世界の本らしいけど」
「へぇ…ここで読んでもいい？」
「あー？しかたないわね、いいわよ」
霊夢が許可する頃にはリグルは既に活字に夢中になっていた
「まったく…わざわざ持ってきてやったんだから礼くらい言いなさいよ。さてと…私は睡眠でもとろうかしらね」
「あっ、ありがとうね！」
霊夢は寝ると言ったが、時計はまだ朝方10時を指したばかりだった

◆　◇

「んー、よく寝たわ」
寝床から這い出した霊夢はお茶を求めて台所へと向かった
「そういえば蛍が来てたわね。まだいるのかしら？一応あいつの分も用意してあげようかしらね。帰ってたら自分で飲めばいいし」
リグルが来たときと同じように二人分のお茶を用意し、お盆に乗せる
「そういえば…なんで私があいつにこんなに親切にしてるのかしら」
深く考えたところが特にこれといった理由は思い付かなかった
「まあ…用意しちゃった以上しかたないわね」
ため息をつく霊夢に突如一つのアイディアが閃いた
悪魔が囁いたとしか思えないそのアイディア

霊夢は早速そのアイディアを形にし、リグルのいる縁側に持って行った

◆　◇

「あ、霊夢おはよう」
「おはよう。…って言っても、おはようって時間でもないけど」
　時計の針はもう少しで１１時３０分を示す
「あー、読むのやめたの？」
　リグルの横には閉じられた状態の本が置かれている
「まあ、あんたが読書家だとも思えないし…」
「いや、もう読み終わったよ」
　首を振り振り答えるリグル
「へえ、ずいぶんと早かったわね」
「そんなに長くなかったし、面白かったから一気に読んじゃったよ」
「ふぅん…じゃあ、その本はあんたから魔理沙に返しておきなさいね」
「うん！それとねえ…霊夢、私はこの本を読んで決意したよ！」
「あー？何がどうしたのよ？」
　霊夢としてはリグルの決意よりも台所で閃いたアイディアをいつ実行するかの方が重要だった
「私はこの本の主人公みたいになる！」
「ん？あー、そう。頑張りなさい」
　その本の主人公というのは何をするものなのか魔理沙が本を持ってきた際にえらく熱心に説明していたがそれを適当に聞き流し読んでもいない霊夢には内容が全くわからない故に、その決意によってリグルが何をするのか全くわからなかった
「じゃあ、景気付けにお茶でも飲んでいきなさいよ」
　霊夢の顔は平静を装っていたが実際は笑いを堪えるので必死だった
　台所で閃いたアイディアというのは目に入ったとあるものをお茶に入れることだった
　霊夢はそのお茶を勧めているのだ
　そのお茶を飲んだときのリグルのリアクションを想像するだけで笑いが込み上げてくる
　その笑いを堪えるのは結構辛かった
「ごめん、私はもう行くよ！」
「…え？」
　霊夢にはリグルの言ったことが理解できなかった
「いやいや、せっかく用意したんだし飲みなさいよ。そんなに急ぐ必要もないでしょ」
「その気持ちは嬉しいよ。でもね、私がこの人の真似をする以上、少しでも早く人を助けなきゃいけないんだ」
　本の内容がわからない霊夢にはリグルが何をするのかがわからなかったが、とりあえずリグルがお茶に手をつける気がないことだけはわかった
「それに、ちょっと寄っていきたいところもあるから早く行かないと」
「あー…そう…じゃあさっさと行きなさいよ」
「ここに来てよかったよ！お茶とドラ焼きありがとうね霊夢。じゃあね！」
　リグルは左手に本を抱え、縁側から飛び下りると全速力で走り去っていった
　一人取り残された霊夢はリグルに飲ませる予定だったお茶を眺めていた
「ったく…お茶を飲んでいかないなんて…どういう神経してんのかしら」
　リグルに飲ませるはずだったお茶をこのまま捨てるのも勿体ないので自分で飲むことにした
　どんな味がするのかという興味もあった
「…こっ…これは…！！」
　霊夢の口内に口では表現できない何とも言えない不快な味が広がる
　慌てて自分用に用意したお茶を飲むも口に広がった不快感は全く緩和されない
　台所で霊夢が閃いたアイディア
　それはお茶の中に醤油を混ぜるというお茶に対する冒涜としか思えない行為
　お茶を愛する霊夢に何故そんなことができたのか、それは誰にもわからない
　魔がさしたというやつだろうか
「この味は…お茶を冒涜した罰ね…」
　なかなか消えない不快感に苦しみながら己の行為を悔いる
「やっぱりお茶は…そのまま飲むものね…！！」
　霊夢は一つ悟った
　そして醤油茶を庭に撒いた

◆　◇

博麗神社を飛び出したリグルが向かった場所

それは香霖堂だった

「いらっしゃいませ、こんばんはー。店主はいるでしょうかー?」

ゆっくりとドアを開き店主を呼ぶ

「いらっしゃいませってのは…僕のセリフじゃないかな?それに、こんばんはって時間でもないだろう」

香霖堂の店主森近霖之助がカウンターで苦笑している

「で、何をお探しですか?」

「この本に出てくるこういう服が欲しいんだけど、ありますか?」

カウンターから出てきた店主に抱えていた本を渡すと表情が変わった

「ん?この本は魔理沙が勝手に持っていった本じゃないか」

「そうなの?」

「そうだね。持ってくなって言ったのに持ってかれたから困ってたんだ。持ってきてくれて助かったよ」

パラパラとページをめくる店主は実に嬉しそうな顔をしている。その本を相当気に入っているのだろう

「本に夢中になってるとこ悪いけど、結局この服あるのかな?」

「あ…ああ、すまないね。つい本に夢中になってしまったよ」

「しかたないよ、その本おもしろいもんね!」

リグルも読んだのでその本がいかにおもしろいかはわかっている

「この服でいいんだね。それならあったはずだ、ちょっと待っててくれ」

店主は店の隅に置かれていた箱をガサゴソと漁りリグルの要求した服を引っ張り出した

「これでいいかな?」

引っ張り出した服を両手て広げリグルに見せる

「うん、まさにそれだよ!さすが香霖堂だ、なんでもあるね!それじゃ…」

「ちょっと待った」

リグルが服を受け取ろうと手を伸ばすと、店主はそれを自分の背に隠した

「ここは店で、これは商品だ。お代を貰ってない以上、これを渡すわけにはいかないな」

「うぅ…そりゃそうだよね…やっぱりお金が必要だよね…。残念だけどそれは諦めるよ…」

服を手に入れられなかったというだけだというのにリグルは今にも泣きだしそうだ

「と、言いたいところだけど」

「…うぇ?」

店主は背に隠していた服をリグルに差し出した

「あの本を持ってきてくれたお礼だ。もっていくといい」

「でも私はお金なんて持ってないよ…?」

「お礼だって言っただろう?タダでいいよ、無料だ」

「こ…香霖堂の店主はびた一文安くしてくれないって聞いてたのに…」

「そういうことは本人に面と向かって言うもんじゃないと思うけどね」

店主は再び苦笑した

「確かに、普段ならそうかも知れないが今日は特別だ」

「そう?じゃあ…ありがとう」

「せっかくだし、それを着てみてくれないかい?」

「言われなくてもそのつもりだよ!」

渡された服を上から着るリグル

マントの上から着るだけで着替えたりするわけじゃないからいやらしいことは特にない

「へぇ、似合ってるじゃないか」

「ここまで似合ってるとなると、私はあの本の主人公みたいになるために生まれたのかもわからないね!」

「気に入ってもらえたようなら服も満足だろう」

「気に入った、気に入ったよ!それじゃあ私はもう行くね。ありがとう店主!」

入って来たときとは対象的に勢いよくドアを開けてリグルは香霖堂を飛び出して行った

「それにしても…彼女は服を真似て何をする気なんだ」

リグルが開け放ったドアは開いた状態で止まっていた

◆　◇

「タケノコ!」
魔理沙は突如タケノコを食べたい衝動に襲われた。
大量のタケノコを、一人で煮たり焼いたりと、あらゆる方法で調理されたタケノコが食べたいのだ
「だがタケノコとてそう安くはないな…」
大量のタケノコを買う程お金に余裕は無い
無理をすれば買えないことも無いが、いくら大量に食べたいからといって財布に無理をさせてまでタケノコを大量に買い込みたくはなかった
「よし!こうなったら竹林に行ってタケノコ狩りだぜ」
考えた末タケノコ狩りをすることにした
無料で、しかも大量にタケノコを手に入れるためには野生のタケノコを採ってくるのが一番早いと考えたのだ
思い立ったが吉日。魔理沙はすぐさまタケノコを採るための道具を準備し、その道具を持って箒にまたがり竹林に向かって飛んで行った

◆　◇

「さあ、タケノコ狩りだ!大量に採るぜ!」
魔理沙は竹林に来る途中に寄り道してアリスやにとり協力してくれるよう頼もうかとも思ったが結局一人でタケノコ狩りをすることにした
どちらに頼んでも一人でやるより効率はいいだろう
それは魔理沙にもわかっていた
頼めば絶対手伝ってくれるだろうな。とも思っていた
だが魔理沙は一人で竹林に来ることを選んだ
「協力した分け前にタケノコを半分よこせなんて言われたらたまったもんじゃないからな…」
タケノコ狩りの準備をしながらつぶやく魔理沙
アリスもにとりもきっとそこまでタケノコに固執しないだろう
というより、この二人のどちらかに協力してもらえば二等分したって一人でやるよりも多くのタケノコを手に入れられるはずだ
どうやら魔理沙はタケノコ欲しさに冷静な考えがやられてしまったようだ
「早速一つ目のタケノコ発見だ。こいつは幸先がいいぜ!」
なんにせよ、こうして魔理沙のタケノコ狩りが始まった

　◇

「ごめんくださーい」
魔理沙がタケノコ狩りを始めたその頃慧音の家に来訪者があった
「はいはい、少しお待ちください」
戸を開けた先に立っていたのは射命丸文
「ああ、いつぞやの新聞紙」
「私は新聞を出しますが新聞紙ではありません」
「それは失礼。で、今日は何の用だ?」
「私の記者としての勘が今日はここにいれば事件に会えると言っているのです!」
「そうか、仕事熱心だな」
「というわけでおジャマします」
「おジャマされる」
文としては運のいいことに今日の慧音は特に予定が無く暇を持て余していたために文が自分の家に上がり込むことを特に拒まなかった

　◇

文が上白沢邸に訪れてから2時間が経過したが、まだ事件と呼べるような事は起きていなかった
その間二人は暇だからずっとオセロやってた
「何も起きないな」
飽きたということで邪魔になったオセロを片付け慧音がつぶやく
「…起きませんね」
「記者としての勘とやらは、一体いつ頃事件に会えると言っていたんだ?」
「さあ…?ただ今日は慧音さんの家にいれば事件に会える気がしたってだけですから、時間まではちょっと…」
「そうか、早く事件に会えるといいな」
正直なところ、慧音としては事件など起きない方がありがたかった
暇だから、という理由で文を家に上げたが、冷静に考えれば慧音の家で事件に会える

ということは慧音の家で事件が起きるということだ
慧音としては自分の家で事件が起きるなど当然お断りだ
だが文は事件の臭いがする上白沢邸に上がりこんだ以上、事件が起きるまでここを離れないだろう
そもそも、『文がいるから事件が起きる』のではなく『事件が起きるから文がいる』のだ
文を追い出したところで結局事件が起きることに変わりは無い
「慧音さん、コマ回しで勝負しましょう！」
慧音が集中するのを邪魔するかのようなタイミングで声をかける文
「はあ…なんでコマ回しなんだ。別に構わないが、この家にコマはないぞ？」
「こんなこともあろうかと、今日はヒモとコマを二組用意してあるのですよ」
「なんでそんなもの用意してるんだ…まあいいだろう、貸してくれ」
「ちょっと待ってくださいね…」
そういって射命丸は室内にある棚の一つを開けその中を探りだした
慧音自身はそんなところにコマをしまった覚えはないのだが
そもそも人の家のタンスを勝手に探っていいものだろうか
「えーと…あ、ありました。はい、どうぞ」
文は見事棚の中からコマとヒモ二組を発掘した。
「そんなところにコマをしまった覚えはないんだが…いつの間に。うぅん…どうも」
ぶつぶつ言いつつもコマとヒモ一組を受けとる慧音
「やる以上本気でやらせてもらうぞ…！言っておくが私は強いぞ。里の人間が名付けた『ハリケーンミキサー』の二つ名は伊達じゃないことを教えてやる！」
「ふふ…私だって他の天狗から『サイクロンクリエイター文』と呼ばれてるんです。負けはしませんよ！！」
どちらの呼び名も失笑物だが重要なのはそこではない
二人が本気だということだ
事件はどうした
そして二人とも集中のあまり遠くから
「けぇぇぇねぇぇぇぇぇぇぇ！助けてくれぇぇぇぇっ！」
と、叫ぶ声が近付いていることに気がつかなかった
「なるほど…相手に不足は無い、ということだな…ではいくぞ！」
「スリー…」
「ツー…」
「ワン…」
「ゴー…シュートッ！」
その瞬間ドアが開き必死の形相の魔理沙が入って来た
「け…けえぇねえぇぇぇぇ…」
「な…どうしたんだ魔理沙！？」
「魔理沙さん、どうしたんですか！？」
突然の来訪者に体を向ける二人
だがコマをシュートする動きは止まらない
その結果――
「あ…しまった…！」
「避けてください魔理沙さん！」
「た…助けえあぅぁっ…！」
二人の放ったコマは魔理沙の頬に襲い掛かった

◆　◇

「魔理沙がここまで慌てるというのは…ただ事じゃないな…」
「そうですね…これは間違いなく事件です」
文は顔こそ深刻そうにしているが口の端は笑っている。記者の勘が当たり新聞のネタに会えたことが嬉しいのだろう
「とりあえず魔理沙が起きて、何があったのか話してくれないことにはどうしようもないな」
魔理沙が二発のコマを食らい、気を失ってから３０分が経過していた
「ぐ…うぅ…」
「お、起きたか」
「魔理沙さん一体全体何があったんですか？」
「うぅ……ここはどこだ？」
「私の家だ。一体何があったというんだ」
「あ…あぁ、そうだ。慧音、お願いだ…助けてくれ！」

自分の側に慧音がいることに気がつくなり起き上り慧音の服を掴み助けを求める魔理沙
　その目は今にも泣きだしそうだった
「助けるって…だから何があったというんだ」
「私の…私のタケノコとファイアボルトが！」
「タケノコ…？」
「ファイアボルト…？」
　魔理沙の言うことが理解出来なかった文と慧音は互いの目を見合って再び魔理沙に視線を戻した
「何を言っているんだ…冷静になるんだ魔理沙。お前がそれでは、助けたくても助けようが無い」
「私はいたって冷静だ」

◆　◇

　魔理沙は首を振り、側に置いてあった帽子を被り深呼吸をすると何が起きたのかを語り出した
　重要なとこだけ抜き出すと、どうやら魔理沙は竹林でタケノコを収穫しているところを何者かに背後から襲撃されてファイアボルトと収穫したばかりのタケノコを全部持って行かれたらしい
　ファイアボルトっていうのは箒の名前なんだとか
　魔理沙が言うには、以前読んだ外の世界の本に登場した箒から名前を拝借したらしい
　この話を真剣に聞いていた慧音も、メモを取りながら聞いていた新聞屋もあまりに複雑な事件に顔をしかめてる
　こんなときこそ私の出番だ！
　まさかこんなに早くチャンスが来るとは思ってなかったけど、この難事件を虫達の力で解決できれば、みんなきっと虫達を見直すよね！
　でもなんで魔理沙はタケノコなんか収穫してたんだろう？
　まあ、その辺は本人に聞けばいいかな
　とりあえずはあの本の主人公みたいにかっこよく登場しなきゃ！

◆　◇

「竹林と言ったが、それはどこの竹林なんだ？それがわからないと調べようがないぞ」
「あの時はとにかくタケノコを探しに夢中だったからどこの竹林だったか全然覚えてないぜ…」
「場所がわからないんじゃあ犯人を予想するのも難しいですよねえ…魔理沙さんに何か盗られた人達が仕返しにやったということもありえなくは無いですが、それにしたって…」
「タケノコを盗る。というのはなあ…箒は魔理沙のアイデンティティーだからまだわかるとして、タケノコはなあ…」
　文と慧音を悩ませているのは完璧にタケノコだった
　どんな理由を考えようともタケノコが全てまぬけにしてしまうのだ
「んー…よくよく考えたら被害者がタケノコと箒を盗まれただけの事件なんて、いくらなんでも新聞に書くようなことじゃない気がしてきました…帰っていいですか？」
　事のまぬけさに文があきれ始めたそのとき
「帰るのはまだ早いよ、新聞屋！」
　窓の外に何者かの影が現れた
　その何者かは窓を開けようと窓をガタガタさせているが鍵が掛かってるので開くはずもない
　タケノコだけで充分まぬけだというのにさらにまぬけな奴が現れたので慧音はいい加減頭にきた
　右手で窓の鍵を開け左手は軽く握っていた
「おジャマします」
　窓を開けるとそこからリグル・ナイトバグが入って来た
　窓から入って来るという非常識な行為に慧音の勘忍袋の尾がついに切れた
「ふざけるなぁぁっ！」
　――ガシン！
　リグルはまたもや叩かれた
「いったぁっ！うはぁぅ…」
　慧音に頭を叩かれその場にしゃがみ込むリグル
　かっこよく登場したいという願望は完全に崩れた
　窓を開けるのにてこずっていた時点で崩れていたような気もするが何にせよ崩れた
「な…何で叩かれたのよー…」

「お前が！変なタイミングで！窓から入ってくるからだ！」
変なタイミングかどうかはともかく、窓から入ってきたら家主が怒るのは当然だろう
慧音の怒りようを見た魔理沙は玄関から入ってよかった。と、胸を撫で下ろす
もっとも、慧音の怒りの半分は魔理沙、4分の1は文によるものなのだが
魔理沙がタケノコ強奪事件など持ち込まなければリグルが窓から入ろうとため息をつく程度だっただろう
「ところでリグルさん、その服装は何ですか？」
慧音の怒りの矛先が自分に向く前に文は話の筋を逸らした
「そういえば…確かにいつもと違うな」
慧音は頭に血が上ってリグルの服装がいつもと違うことに気付いていなかったようだ
「なあ、リグル。もしかしてその格好…お前…まさか…」
リグルが真似をしている元の本を読んでいる魔理沙は、その服装が意味することに気付いた
リグルはいつもの服の上にインバネスコートを羽織り、頭には鹿撃ち帽を乗せている
「まさか探偵なのか！？」
そう、リグルの服装は『探偵』と言われた際に多くの人が思い浮かべるであろう服装なのだ
「そう…私は探偵蛍、リグル・ナイトバグよ！」
「おぉ…探偵…。探偵ならこの事件を解決して私を助けてくれるよな！」
「ふふふ…任せなさい！この事件は、絶対に私が解決する！ナイトバグサンダーの名に賭けて！」
「おぉっ！慧音よりよっぽど頼もしいぜ！リグルなら確実に事件を解決してくれるに違いないぜ！」
普段ならリグルを相手にすることなど無いのに、探偵の格好をしているだけで相当な信頼の寄せ方だ
あの本に登場する探偵というのは、相当優秀な人物として描かれていたのだろう
「さて魔理沙、さっきどこの竹林にいたか覚えてないって言ってたよね？」
「あ…あぁ、言った。どこの竹林にいたか覚えてないから困ってるんだ」
「ふふふ…その程度のこと、私と私の助手にかかればすぐにわかるよ！」
そういうと数匹の虫がリグルの元に飛んできた
リグルはその虫を右手に乗せると何かを呟き再び虫達を飛び立たせた
「さあ、これで魔理沙がどこの竹林にいたかを把握するのは時間の問題だ！」
「今のは何をしていたんだ？」
慧音が問い掛ける
「今の虫達をいろんな竹林に飛ばして、それぞれの竹林にいる虫達に魔理沙を見たかどうかを聞きに行かせたんだ。魔理沙を見た虫が見つかったらその虫がいた竹林に行けばいいでしょ？」
「それなら確かに私のいた場所が見つかるのも時間の問題だ。さすが探偵だぜ！」
――飛ばした虫が途中で人間に捕まったり鳥に食べられたりしたらどうするつもりなのか
慧音はそれが気になったが、盛り上がっている魔理沙に水を差すと面倒なのは目に見えているので空気を読んで黙っていることにした
「ところで、魔理沙さんがその話をしたとき、リグルさんはまだいなかったはずですがどうして知っているんです？」
慧音は空気を読んで黙ったが、文は空気を読まずに口を挟んだ
「えっ？外で聞いてたからだけど」
「盗み聞きですか。趣味がいいとは言えないですねえ」
「隠し撮りを仕事にしてるお前が言えたことかよ」
リグルを擁護する魔理沙
慧音にはそれがとても不思議な光景に思えた
「なっ…！失礼な！私は隠し撮りなんてせこい真似はしませんよ！」
「どうだかな。まあ、盗撮天狗なんてどうでもいいが」
「盗撮天狗とは失礼な。前言の撤回を要求し

ます！」
「うるさい！」
「うはっ！」
　抗議を始めた文に魔理沙はヒップアタックを敢行した
「うぅ…市民の味方である新聞記者に手を出すとは…」
　魔理沙の尻に敷かれうめく文
「なぁにが市民の味方だ。そういえば、さっき言ってたナイトバグサンダーってのはなんだ？あの探偵はそんなこと言ってなかったはずだぜ？」
「ああ、あれ。あれは、思い付きで言っただけだよ。特に意味は無いんだ」
「なんだ、そうだったのか」
「ところで、お前達がさっきから言っている探偵というのはいったい何なのだ？」
　空気を読んで黙っていた慧音が口を開いた
「ああ、それはだな…」
　魔理沙が説明しようとすると一匹の虫が窓から侵入しリグルの手に止まった
「うん…なるほど…なるほどね…それだけわかれば十分だよ。ありがとう！」
　リグルがそう言うと虫は再び飛び上がり入ってきたとき同様窓から出ていった
「魔理沙がいた場所がわかったよ！」
「もうわかったのか、さすが探偵だ！」
「で、探偵というのは結局…」
「悪いな、説明はまた今度だ。今は私の箒を取り返す方が先だ」
　質問を遮られた慧音はやれやれという顔で椅子に座った
「場所がわかったならさっさと行ったらどうだ？もたもたしてると箒は折られ、タケノコは食べられてしまうかもしれないぞ」
「おいおい、慧音…不吉なこと言わないでくれよ…」
「場所はわかったんだけど…細かい位地がわからないんだよね…」
「な…マジかよ！じゃあ行けないじゃないか！」
「待ってよ魔理沙。落ち着いて。射命丸さんが辛そうだよ」
　上に座っている魔理沙が興奮しているので尻に敷かれている文は苦しんでいた
「こいつはいいんだよ、自業自得だ」
「私は何もしてないじゃないですかぁ…」
「うるさい。人をこそ泥扱いした報いを受けろ」
「落ち着いてってば。名前はわかんなくても近くに住んでる人の名前はわかってるからさ」
「竹林の近くに住んでるっていうと、藤原妹紅か」
　魔理沙は肝試しの夜に出会った蓬莱人を思い浮かべる
「よくわかったね。知り合いなの？」
「一度弾幕をやりあった程度だよ。知り合いっちゃ知り合いだな」
「それなら話は早いね。その藤原妹紅ってのが犯人だよ」
「待ってくれ。何か証拠はあるのか？そんなに深い付き合いでもないが、少なくともタケノコを盗むような奴ではないはずだぞ」
「妹紅が背後から魔理沙を襲うのを見た虫がいるんだ」
「目撃者がいるんじゃどうしようもないな…。だったら早く行くといい」
　知り合いである妹紅を庇おうかとも思った慧音だったが冷静に考えればタケノコと箒を盗んだ程度でそこまで酷い目に会わされはしないだろう
　酷い目に会わされてもそれはそれで自業自得だ
　慧音としては妹紅の身よりも魔理沙達が家から早く出ていく方が重要だった
「あの野郎…！あいつの家の位置なら大体わかる、早く行こうぜ！」
　魔理沙が立ち上がったので文はようやく尻から解放された
「ようやく自由になれました…」
「自由になったついでにお前も来い」
「嫌ですよ。魔理沙さんが背中にずっと乗ってたせいで背中が痛いんですから」
「自業自得だって言ったろ。お前はリグルの探偵としての活躍を記事にするんだよ。新聞記者を名乗るんならそれくらいしたらどうだ」
「しかたないですね…。まあ、このまま帰るのも尻に敷かれ損ですし…。魔理沙さんがタ

ケノコを盗まれただなんていうまぬけな記事を書くよりはよっぽどいいです…」
　魔理沙に対しての嫌味のつもりだったが残念なことに魔理沙はまるで気にしていない
「さあ、行くぜ!私のタケノコと箒を取り返すんだ!」
　魔理沙は勢いよくドアを開け飛び出していった
　実に嫌そうな顔をしながら文も続いた
「私を置いていかないでよ!」
　主役のはずなのに出遅れるリグル
「あーっ…と。おジャマしました」
「はい、おジャマされました。まあせいぜい頑張ってこい」
「言われなくても頑張るよ!じゃあね!」
　リグルも勢いよく飛び出していった
　ようやく静かな我が家を取り戻した慧音はため息をつきながらドアを閉める
「タケノコ泥棒…か。本当に…まぬけだな…」
　リグルの入って来た窓はまだ開けっ放しだった

◆　◇

「藤原ァァァァァァッ!」
　妹紅の家のドアを蹴破り中に入るなり絶叫する魔理沙
「誰だ?今食事中なんだけど」
　部屋の奥からお茶碗片手に妹紅が出てきた
　お茶碗にはタケノコご飯がよそられていた
　ドアを蹴破って入ってきたことを気にしないのは長生きしていればそんな場面も慣れるということだろう
「わ…私のタケノコォォォ!!」
「魔理沙!?しまった!」
「私のタケノコとファイアボルトを返せぇぇぇぇっ!!」
「待って魔理沙ー!暴力はよくないよー!」
　妹紅に飛び掛かろうとする魔理沙に咄嗟にしがみつくリグル
「離せリグル!盗っ人は退治されて当然なんだよ!」
「魔理沙さんはいったい何人に退治されるんですかねえ…」
「うるせえ、デバガメ野郎は黙ってろ!タケノコと箒返せよ!」
「ファイアボルト…?」
「お前が盗んだ私の箒の名前だよ!」
「あー、なるほど。あれはな…もうどっちも無い」
「は…?」
　リグルを引っぺがそうとじたばたしていた魔理沙の動きが一瞬にして止まった
「無いって、お前…どういうことだよ…」
「タケノコは見ての通り全部タケノコご飯にしちゃったし、箒は…ちょっとした手違いで炭に…」
「あ…あぁ…あぁぁぁぁ…」
　タケノコも箒も失った魔理沙はその場にへなへなと崩れ落ちた
「私の…タケノコ……ファイアボルトが…あぁっ…」
　魔理沙はフラッと後ろに倒れ動かなくなった
「あらあら、魔理沙さんまた気絶しちゃいましたよ。一日に二回も気絶するなんて大変な人ですねえ」
「依頼人が気絶しちゃったよ…どうしようかなあ」
「とりあえず…タケノコご飯食べない?作りすぎて困ってたんだ」
　テーブルの上に置かれためし桶を妹紅は指差した
「うーん…調理されちゃった以上しかたないかなあ」
「あ、ちょっと待ってください。新聞を書くために写真を一枚撮らなければいけません」
「それもそうだね…どんな構図がいいかなあ」
「新聞って…どんな記事を書くんだ?」
　そもそもリグルと文が魔理沙についてきた理由を知らない妹紅は何の話だかまったくわからない
「そうですねえ…とりあえず妹紅さんがリグルさんにひれ伏してる画が理想的ですかね」
「え…?ひれ伏す?そんなのごめんだよ。なんで私がそんなこと…」
「いいじゃないですか。あなた一人がリグルさんにひれ伏すだけで、私とリグルさんの二人が得をするんですよ。ほら、早く。タケノコと箒を盗んだ罪滅ぼしだと思えば気になりませんよ」

被害者である魔理沙が何も得しない以上罪滅ぼしにならない気もする
「うーん…タケノコと箒を駄目にしたのは事実だしな、気乗りはしないけどやるかな」
「それでいいんです。いくら新聞が真実を取り扱う物だとはいえ、こんなまぬけな事件、真面目に付き合ってられません。さっさと終わらせますよ。ほら、リグルさん、タケノコご飯食べてないでこっちきてください」
「ちょっと…待って…今、飲み込むから…」
　リグルは口の回りに米粒を大量につけながら急いでタケノコご飯をほお張る
「リグルさん、仮にも新聞に載せる写真なんですから口の回りの米はちゃんと取ってくださいね」
「おっと、ちょっと待って…」
「鏡ならあっちにあるから」
「あ、どうも」
　鏡を見て米を取るついでに髪をいじるリグル
「あー、その帽子被れば髪形なんて関係ないですからさっさと戻ってきて下さい」
「そうかなー…写真に写るなら少しは気にした方がいいと思うんだけど」
「いいですから、早くきて下さい。私は疲れているんです」
「わかったよ…」
　このままだと文の怒りが頂点に到達しそうなのでリグルはしぶしぶ鏡から離れた
「それで、私はどんなポーズとってればいいのかな？」
「リグルさんはそこに少し偉そうに立っててくれればいいです。そうしたら妹紅さんがそこにひれ伏してください」
「こうでいいかな？」
　リグルは仁王立ちをした
　探偵ファッションのおかげかそれなりに似合っている
「自業自得とはいえ…こんなやつにひれ伏さなきゃいけないのか…はあ…」
　仁王立ちをするリグルにひれ伏す妹紅
　実に珍妙な光景である
「はい、それでいいです。動かないでくださいね」
　文がシャッターを切るとすぐさま妹紅は立ち上がった
「こんな…こんな屈辱的な気分になるんならもう悪さなんてしない…」
「それはいいことだよ！さあ、タケノコご飯を食べようよ」
「ああ…そうだな…」
「私はこれを記事にしなきゃいけないんで先に帰らせてもらいます」
　文は心底めんどくさいというような顔をしていた
「タケノコご飯持ってくか？」
「遠慮しておきます。今日の夕飯はもう用意してあるんで」
「そうか、じゃあ気をつけな」
「はい。それでは、取材に協力していただきましてどうもありがとうございました」
　文は魔理沙が蹴破ったドアを踏み付けて出ていった
「魔理沙には悪いけどタケノコご飯おいしいよ、妹紅さん！」
「うまいな。ところでその服装はなんなんだ？」
「あー、これはね…」
　リグルはタケノコご飯をつまみながら妹紅に探偵について説明した
　その間、ドアは蹴破られっぱなし魔理沙は気絶しっぱなしだった

◆　◇

「リグルさん、新聞ができましたから持ってきましたよ」
「あ、新聞紙どうも」
「なんでしょう…なんかひっかかる言い方ですね」
「あら、お久しぶりな天狗」
　メディスンが台所からペペロンチーノが盛られた皿を持って現れた
「あなたもいたんですか、仲のよろしいことで。せっかくですからあなたにも一部あげましょう」
「どうも。ところであなたは何しに来たの？」
「私はこれからこの新聞を配りに行かなければいけないのでリグルさん説明しておいてください。それではおジャマしました」
　文はドアを開けて出ていった
「で、どうしたの？」

「私の活躍を新聞にしてもらったんだ！」
「リグルが記事に？じゃあ、ちょっと読んでみようかな」

◆　◇

【お天道虫様は見ている知っている】

先日、魔法の森に住む霧雨魔理沙がタケノコを収穫しているところを何者かに背後から襲われ、タケノコと箒を盗まれるという事件が発生した

手掛かりも無く迷宮入りするかと思われたこの事件だったが探偵（後述）を名乗るリグル・ナイトバグとリグルに従う無数の虫達の見事な捜査によってあっさりと解決された

犯人は竹林に住む藤原妹紅だった

犯人に直撃取材を行ったところ犯行に及んだ動機は

「タケノコを無性に食べたくて我慢できなくてやった。今は反省している。箒は気がついたら取っていた」

と供述している

リグル・ナイトバグは当分は自宅を事務所とし、探偵としての仕事を続けるとのことなので失せ物捜しに人捜し、もしくは事件を鮮やかに解決する様を見たいのなら依頼をしてみてはいかがだろうか。依頼料は要相談

※探偵とは…………

◆　◇

「へえ、事件を解決するなんてすごいねえ。リグルって頭よかったんだ」
記事を読み終えたメディスンが顔を上げる
「あー…悔しいけど私はあまり頭よくないんだ。事件を解決できたのはみんなのおかげだよ」
「みんな？ああ、虫のことね」
「これをきっかけにみんなが虫達を見直してくれればいいんだけどなあ」
「ところで、あの魔法使いが被害者らしいけどタケノコと箒はどうなったの？」
「タケノコはタケノコご飯にして私と妹紅さんで食べちゃったし、箒も妹紅さんが駄目にしちゃったらしいからどっちも妹紅さんが弁償するってさ」
「にしても、なんでタケノコなんか収穫してたのかしらね？」
そこでリグルは忘れていたことを思い出した
「しまった！なんで魔理沙がタケノコを収穫してたか聞くの忘れてた！」
「あの魔法使いのことだからなんかの実験にでも使うつもりだったんじゃないの？」
「なんであんなにタケノコに執着してたのかなあ」
リグルが首を傾げていると玄関の戸をノックする音がした
「ナイトバグ探偵事務所はここでしょうかー？」
ドアの外から声がする。新聞を読んだ誰かが来たのだろう
「天狗の新聞っていうのも意外と人気ね。早速探偵の活躍を見たがってる人が来たよ」
「タケノコについて考えてる場合じゃないね。メディ、そこの帽子とコート取って！」
メディスンが背後に掛けてある帽子とコートをリグルに投げつけた
「それ似合ってるね。じゃあ、頑張ってねー」
「よーし！虫達の地位向上のために今日も頑張るぞー！」
リグルにどうにかできるような事件がある間は、幻想郷も平和だろう
「ナイトバグ探偵事務所へようこそ！どのようなご用件でしょうか！」

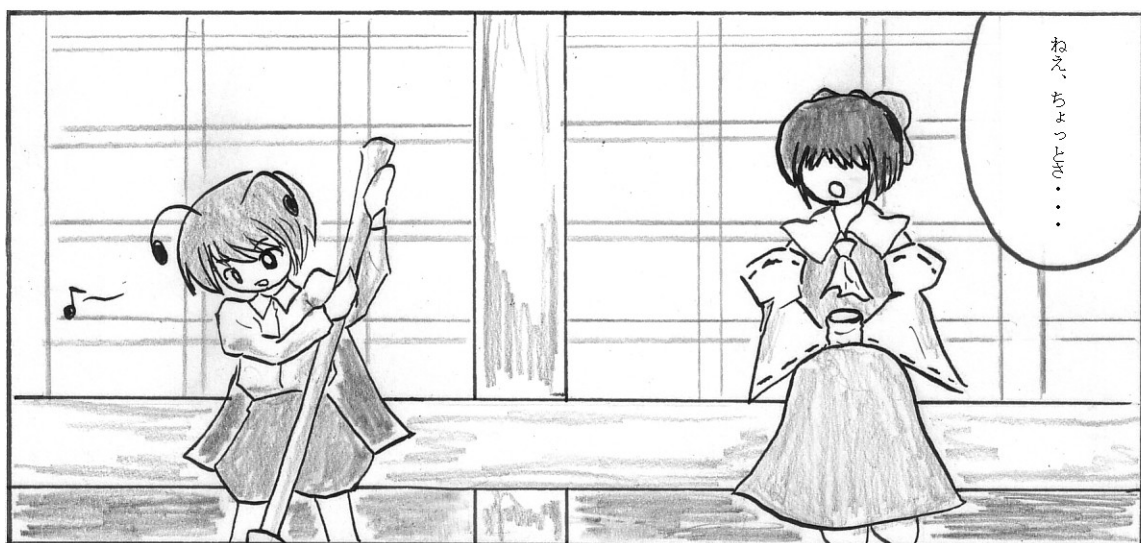
（終）

〈作者コメント〉
素人なので読みにくいところも多かったとは思いますが少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。
探偵ルックのリグルはとてもかわいいと思います。想像しただけですが。

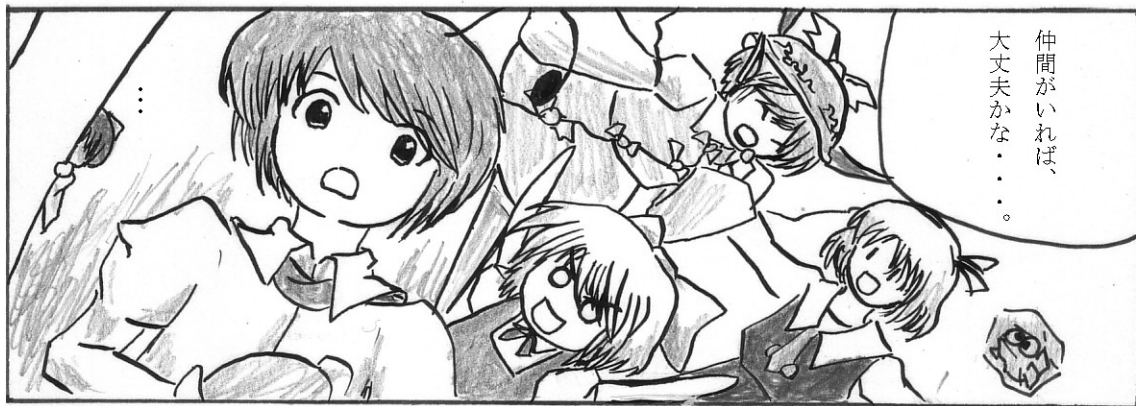
むかしむかし、幻想卿に
一人の魔法使いがしました。
魔法使いは、
めぼしいものがないか、
川へ探しに行きました。
中略だぜ
食べられない!?
ももたろうリグル！？

作：異国の民

♪〜
ねえ、ちょっとさ・・・
鬼退治してきてよ。
わかった、
いってくるね。
ことわらないいっ⁉

とりあえず、
道具は魔理沙らもらってね。
おおう、
私ね、いまから
鬼退治に行くんだよー。
勇者には
武器と食料が必要だ。
鬼退治なら、
豆はどっちにも
なるぞ！
ありがとー。
めぼしいものがあったら、
持って帰るんだぞ？
うん。
ところで、どこに
退治しに行くんだ？
「こうまかん」って霊夢がいってた。

自称最強。
勝手についてきた。

よくわからないけど、
ついてきた。

豆をあげると、
喜んでついてきた。

仲間がいれば、
大丈夫かな・・・。
・・・

あのままだと、私が悪人みたいじゃない・・・・。
主人公は私なんだからもうちょっと印象を良くしないと・・・

とりあえず門でも開けとくか。

こんな感じでいいかな。

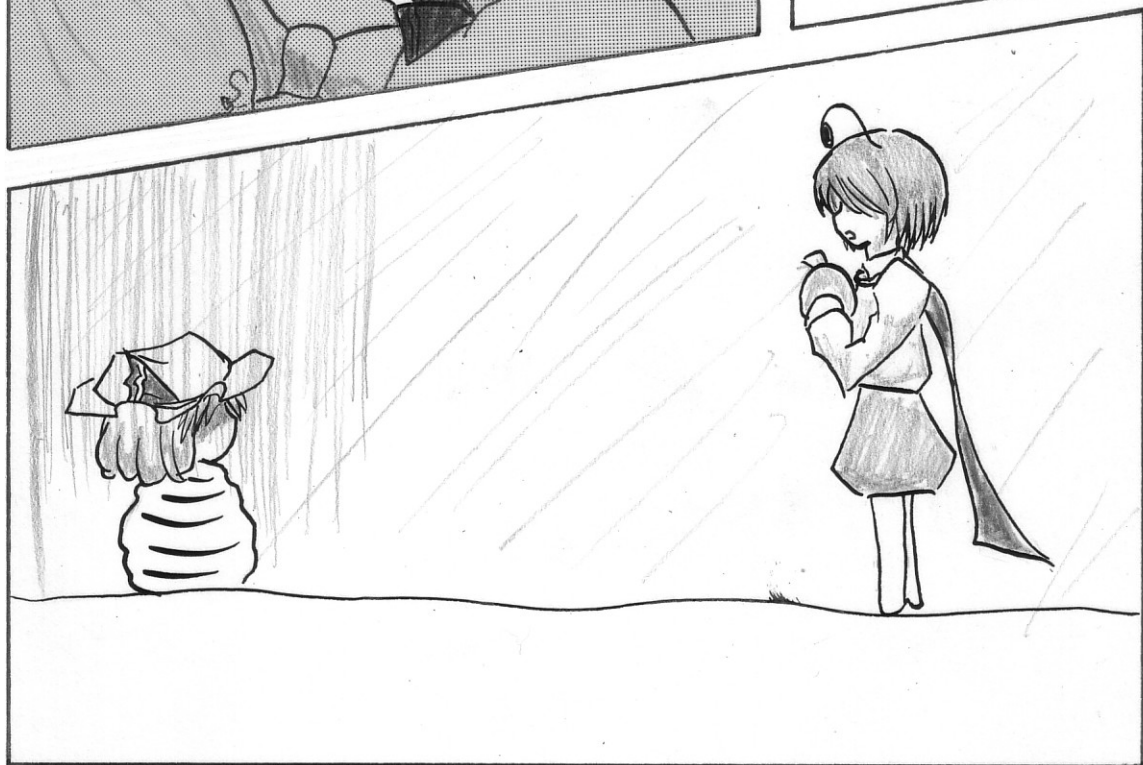
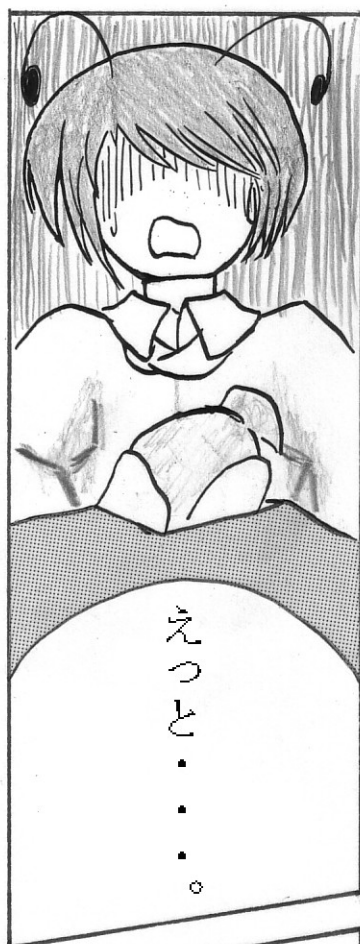
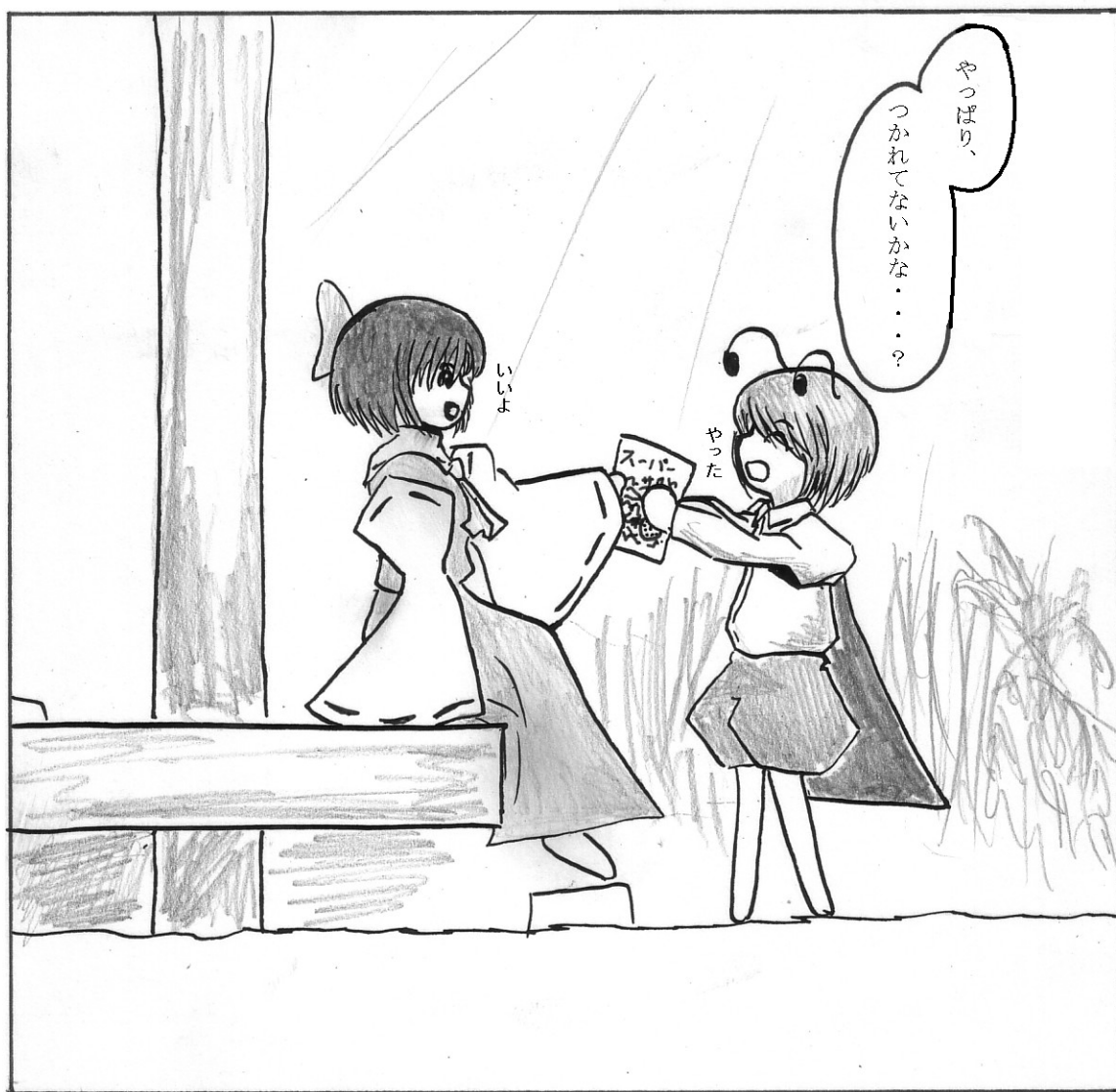
えっと・・・。

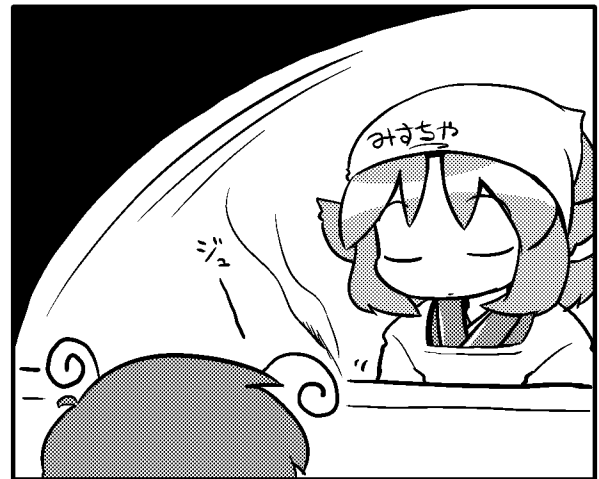
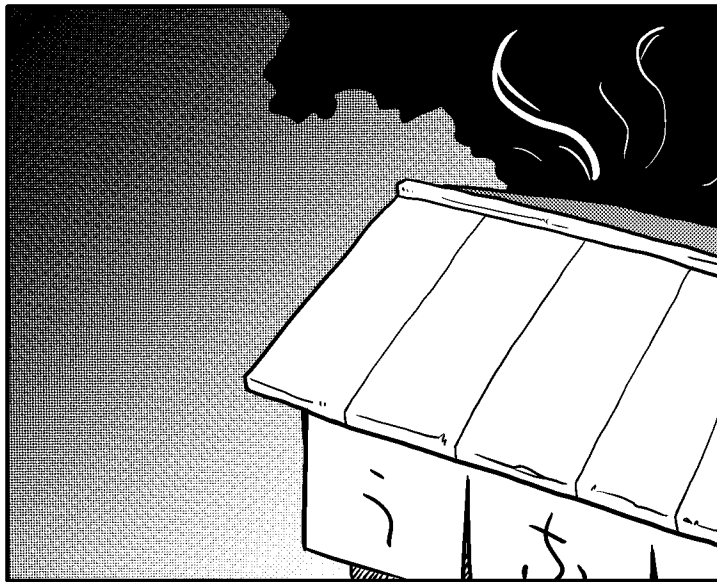
紅白の
鬼にやられたっ！
ええっ
とりあえず、
ほどいてあげるね。
お、アリガトー！
ちょっとまっててね！
豆なくなった
帰るね
ええっ！
わっ、こんなに！
おれいにあげるよ！

と、いうことで、いっぱいもらったよ！
おお、よくぞ生きて帰った。さすが勇者だぜ。
一冊くらい持っとけ。
わーい。
うー、なんかつかれたわー。
ツカレタ
れいむー
？

やっぱり、つかれてないかな・・・・？

いいよ

やった

おわり。

みすちやたい　GIF

※この漫画はフィクションであり、
実在の蟲妖、夜雀、幻想郷とは一切関係ありません。

良くはないですね。…まあ、ぼちぼちですよ。
はは…。外はよっぽど好景気なんだね。

白焼
肝焼
その他なんでも
みすちや

……
おかみさん
はさぁ…

再婚とか
しないの？
いやぁ
みすちー

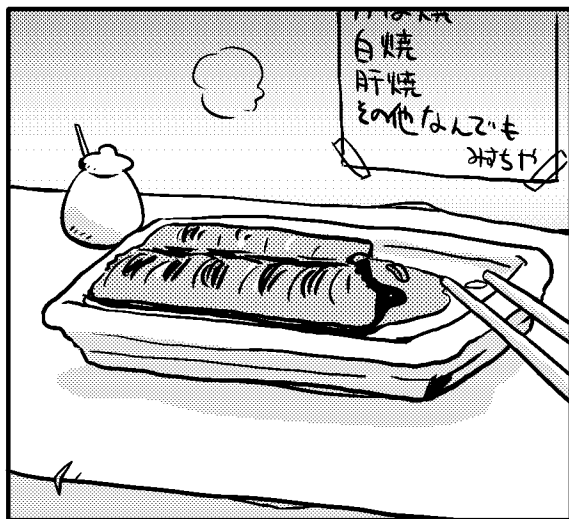
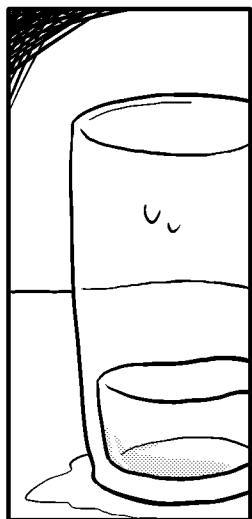
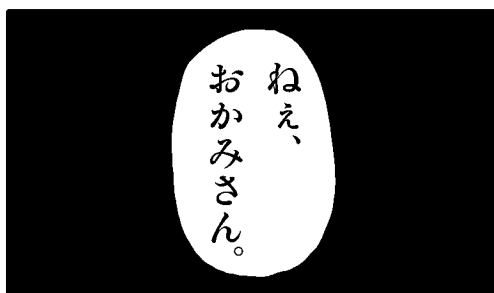
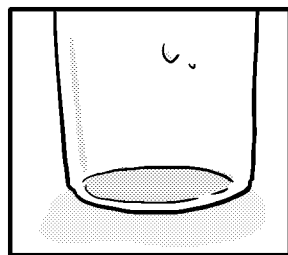
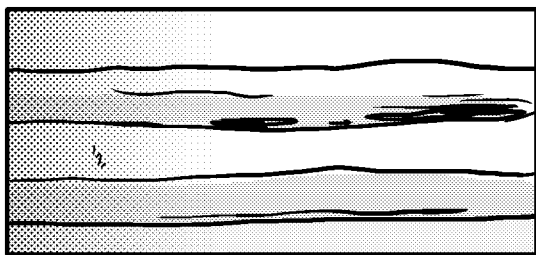
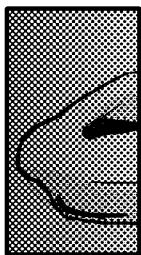
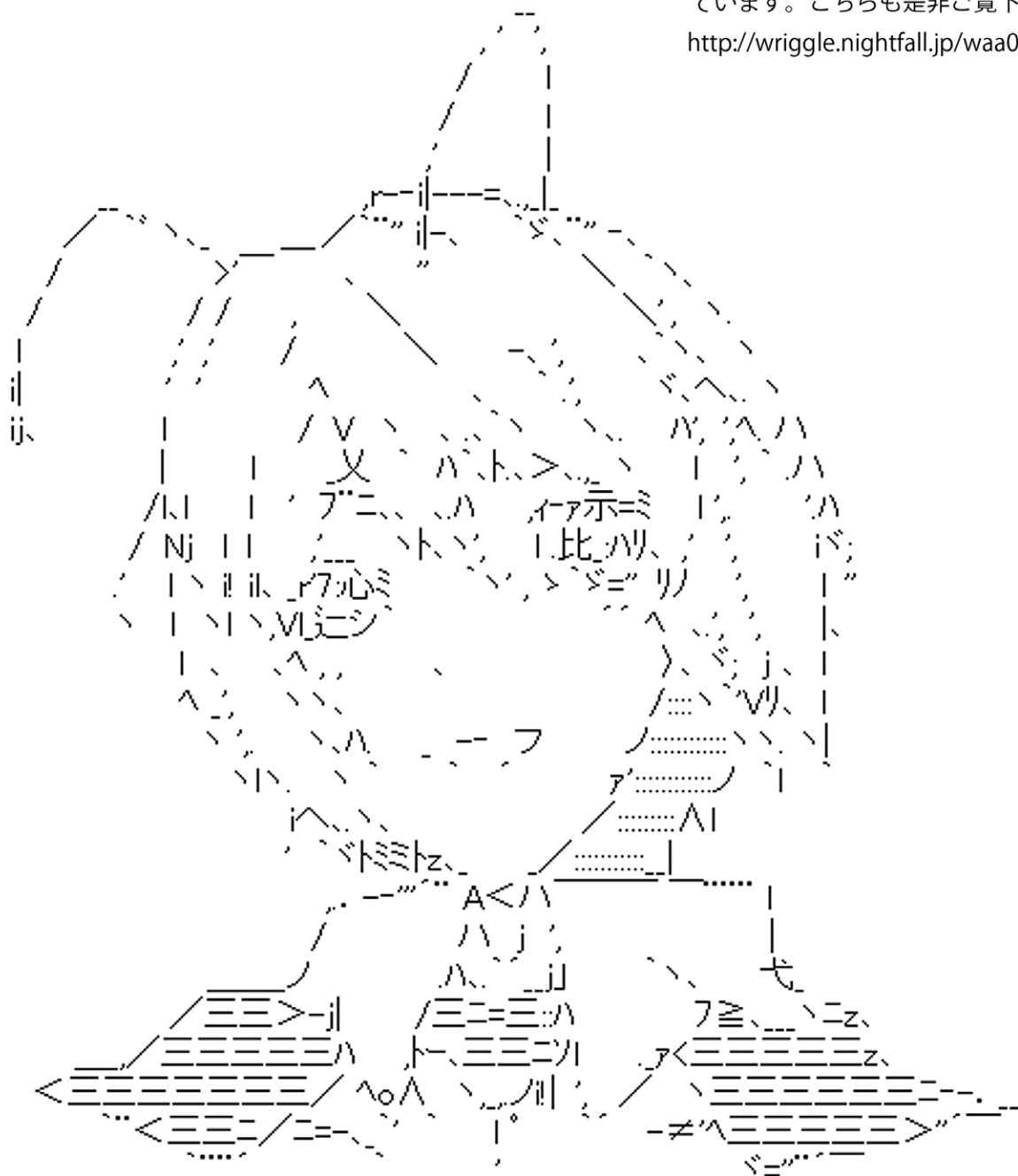
今はお店で
手一杯ですよ。
またまた！
モテるでしょ？
もうっ！
みすちー

それよりも！
うっ
お客さんこそもう
いい年齢でしょ！
早く身を固めないと！

いい人は
いるんでしょ？

いやぁ、今は仕事で手一杯で。
こらっ。
ねぇ、おかみさん。
…ツケでいいかな？
…まったく、誰が景気悪くしてるんだか。

~AA(アスキーアート)~

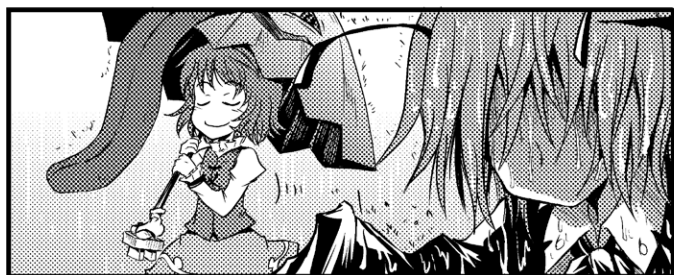
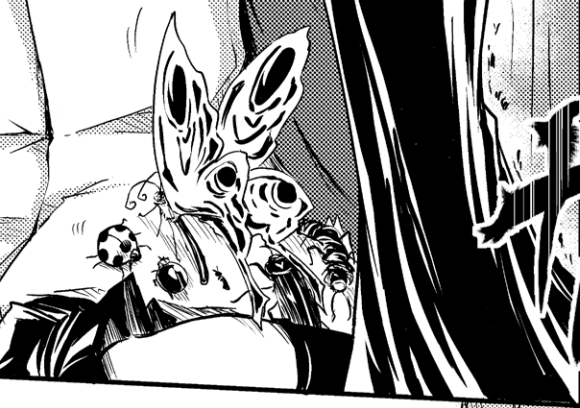
タイトル：無題　／　作者：図隅

※txtファイルを以下のＵＲＬにて公開しています。こちらも是非ご覧下さい。
http://wriggle.nightfall.jp/waa0906.txt

CAUTION!

次ページより2ｐ(p118～p119)、東方星蓮船体験版ネタを含む漫画です。

ネタばれをしたくない方は、次ページとその次のページを一旦飛ばして読むか、

以降のページを体験版入手後に見るなど、ご対応ください。

ザァァァ…
♪～
～雨傘と蟲～
水中花火
いしし
…
?

ガア
アァァ
?
…
END

リグルのやくび
オワタ
p61

リグル俺だ結婚してくｒ……漫画を本格的（？）に書くのは初めてです。多少ミスがありますがご愛嬌で見逃してください（´・ω・） オワタ

みすちやたい
GIF
p113～p116

はんこを駆使してよく分からないものを描きました。
全部環境ホルモンと世界不況のせい。

4月22日の幻想郷ってこうなってたんじゃね？
怒羅悪
p62

創刊号から引き続き投稿のどらおです。ネタ被り覚悟で4コマなんてものを初めて描いてみました。また、恐れ多くも許可を頂き表紙の画像を使用させてもらいました。多分、創刊された時にはこうなっていたことでしょう、そしてリグルは恥ずかしいながらも実は喜んでいるのでしょう、多分。それでは、失礼しました。

無題
図隅
p117

これを作るにあたって知り合いに絵を書き下ろしてもらいました。この場を借りて感謝を。こんな形でもリグル愛が届けば幸いでございます。

Batesian Mimicry
やにたま
p75

ただリグルに霊夢の格好をさせたかった（ぉ
しかし正直誰てめ絵になってしまった感が（汗

雨傘と蟲
水中花火
p118～p119

月イチでリグルまみれの本が出る喜びと月イチで締め切りがやってくる恐怖を同時に感じている今日この頃です

友蟲部
言示弄
p76～p77

どう見てもキモいのは俺です。 本当にありがとうございました。蟲はキモくないよっ！
※胸部・腹部は資料を見つけられなかったのでテキトーに描いてますごめんなさい
あんなんじゃないからっ キモくないからっ

幻想郷農業協同組合6月広告
むつのかみ よしゆき
p123

農業嘘広告も正式にやろうかな～と思い、今月号から毎月作ろうかと思っています。今月は6月ということで、雨季から田植え後の田んぼをイメージして描いてみました。
来月から食べ物関連が始まるかなーと思っています。
楽しんでいただければ、これ幸いです。

ももたろうリグル！？
異国の民
p104～p112

半日で製作とか言う高速投げやり作業になってしまった。
申し訳ない。でも9ページもあるぜ！

表紙・裏表紙
小崎
p1/p124

6月ということで他の方に習って梅雨系です。
表紙は雨がっぱを着たリグル。傘のほうが合うだろうという所をあえてかっぱ。当然光学迷彩付きのかっぱ。てるてるぼうず超キモイ。裏表紙のネタは、雨とセットということで。こっちは意外と被らなかったですね。

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

小悪魔リグル
てつ

p2

一部で大好評の雑誌を目指しました。普段使わない用語を用法もわからぬまま使い「お前は何を言っているんだ」と鏡に向かって問いかけること多数。化粧等かなり濃い目に描いたつもりでしたが出来上がってインスパイア元を見返したら本家が絵を超越していた。か、勝てない……

りぐるん！
のーと

p40～p41

リグルを不幸な目に遭わせる漫画を描きながら「彼女には幸せになってもらいたい」と平気で口走る俺は間違いなくツンデレ。邪悪なツンデレ。

文化への不満と捕食関係
羅外

p4

全く関係ないけれど、蛸って虫偏なんですよね。
あと、虹も。

リグると！/リグると！かぶと
ひどぅん

p54～p55

イラスト：リグるんはみんなの婿だと思うよ。
漫画：リグル達の日常はなんだかんだで楽しそうですね。

「勢いだけで行動していると大抵半端なものになる。」
戌亥

p5～p8

漫画内でリグルがあまり目立っていませんが、屈折した愛情の表れです。作者代理が早苗さんなのは、うちの刊行物では「早苗さん＝腐女子」になっているからです。
常識に囚われてはいけない。

無題
草加あおい

p56～p57

イラスト：梅雨の時期ってあまりわかりません。６月頃でいいんですよね？（汗
4コマ漫画：幽リグに目覚めました

蟲の手帖
HOUSE

p9～p15

リグルを好きになった影響で、昆虫が好きになりました。今では道端で見かけた蟲を観察したり、触ったり、撮ったりせずにはいられません。いつか自分の作品を通してそんな人を増やせたらいいなぁと思ってます。手探りで描き上げた拙い作品ですが読んでいただけたら幸いです。

でらっくす☆りぐるちゃん
さやかりん

p58～p59

４コマ初めて描いてみました。なので読みにくかったらごめんなさい。りぐるりぐるにしたかったのにどうしても霊夢さんがｗ修行が足らない・・・。でもこうゆう風に漫画を見て貰えるっていいですね・・・！私自身楽しんで描かせて頂きました。本当にありがとうございました！

めでたい６がつ
貴キ

p39

幻想郷の暦はきっとこっちとは違うんでしょうけども…
そもそも祝日があるのか謎です。
みすちーの屋台は趣味という事で労働に入りません。

早苗・ナイトバグ＆告知
東

p60

月刊ナイトバグのはずなのに早苗さんメインの４コマになってしまい申し訳ないですｗ
宣伝もＯＫらしいので思いっきり新刊の宣伝させてもらいますね！

月刊ナイトバグ　2009年6月号

2009年5月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

雨、雨、ふれ、ふれ。母さんがー♪　がー♪　が、ぐGu、グーーーーーー……　バグッポイド！(挨拶)
はい。というわけで、お陰様で、本当にお陰様様で今月も出ました。月刊ナイトバグ6月号でございます。
えー、先月の発行後、今回はどれだけ参加があるのかしら、それとも創刊84ｐは一度きりの夢だったのかしらと、どきどきして投稿を待ってたら、待ち合わせ場所ごと虫で埋まりました。すごいです。特に15日は凄まじかった。俺のoutlookが火を噴きました。outlookーーっっ！！

さて、今月の投稿は漫画作品がぐっと増えました。先月号から倍増し、数ページのショート漫画が多かったです。やっぱり漫画が増えると、本の読み応えも増しますね。イラストやSSも引き続きたくさんの投稿を頂きました。今月目立った変わり種作品は、リグルのAAや、漫画に昆虫写真を使った物。写真入の漫画は、どこか小学生の頃読んだ教材漫画を思い出しました。アイデアですねぇ。
あとは、先月も今月も少なかったのですが、HPや新刊の宣伝やPRなどはどんどん入れて頂きたいです。
まるっきり宣伝の為の原稿を作って送って頂いても構いませんし、漫画の端やコメント欄に入れて貰っても構いません。夏コミも近づいてますし、新刊やHPの情報なんか載せて貰えれば需要もあるでしょう。
まぁ、実際には、コミケの〆切り間近になれば、うちに投稿する余裕自体なくなると思うんですけどね。
…来月号は人によってまだいける位かな。再来月は直撃でしょうね。その次の8月に至っては、新刊の原稿は終わってる頃でしょうが、あろうことかコミケ当日がうちの〆切です。ひゃあ、何この三連殺！？
まぁ、とはいってもですね。時期によって分厚くなったり、ペラ本になっちゃったとしても、企画的にはそれも面白いんじゃねとも思ったり。お？　発行が2ヶ月続いてちょっと強気になってきちゃいましたよ、俺？　いざとなれば小崎の4ページ本、見せてやんよと思ったり？　いや思わない。それはない。おなか痛い。というか、自分が〆切に間に合わず今月は表紙・裏表紙だけでした。来月は描きたい…描ければ…かきあげ丼。
ということで、次号もコミケの参加有無に関わらず、お時間があればどんどん投稿頂ければ嬉しいです！
なんか、最近「毎月投稿するぜ」というような声も結構聞きまして、それは勿論嬉しいのですが、うちへの参加に代えて別の犠牲を払う人が出やしないかと少し心配です。執筆者の皆様は、どうかいのちだいじに。コミケだいじに。３時のおやつはナイトバグ。違うそれは―AMだ。グラッツェ。

2009 / 5 / 22　小崎

次号7月号は6月22日（月）発行予定！

※次号投稿締切は6月15日(月)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

幻想郷　九天の滝農業協同組合
「虫にも作物にも
雨って恵みなんですよ？」
食卓に彩りと喜びを
GA全農

月刊NIGHTBUG 2009年6月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

凡用人型兵器
lube
ara
社 蛍夜
くろと
ヘルバナナ狸地
ハンダゴテ
夏樹 真
壁々
はね～～
MAL
小崎

草加あおい
羅外
GIF
さやかりん
貴キ
ひどぅん
東
オワタ
HOUSE
怒羅雄
の一と
やにたま
戌亥
言示弄
異国の民
水中花火
図隅
てつ
むつのかみ よしゆき
KAGOKAGO
foxtrot
涼音 奏
黒ストスキー
せん
くらげん
水無月
くうりん
草葉
しゃき・しゃき
緑
アルフィア